静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第198集

大平遺跡Ⅲ

平成16・17年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第198集

大平遺跡Ⅲ

平成16・17年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

静岡県東部に位置する沼津・三島・駿東地域は、古くから交通の要衝として栄えてきた。また、北は富士・愛鷹山麓、東は箱根外輪山、南は伊豆山系を望み、黄瀬川、狩野川、柿田川湧水に代表される多くの自然水系にも恵まれ、風光明媚な自然を有している。そのため、本地域には、季節を問わず多くの観光客が訪れている。しかしながら、上述の自然環境は、交通機関の開発、発展に地理的な制約を加えるとともに、国道１号線及び国道246号線といった交通量が非常に多い主要幹線道路を有することから、本地域は、長年、慢性的な交通渋滞に悩まされてきた。

東駿河湾環状道路は、こうした慢性的な交通渋滞を緩和する目的で計画され、沼津市岡宮地区から愛鷹南東麓、長泉町、箱根西麓を経由して、田方郡函南町平井に至る高規格幹線道路である。

また、この地域は、古くから埋蔵文化財包蔵地としても知られており、道路建設予定地内にも多くの遺跡が立地していることから、これまでに数多くの発掘調査が実施されてきた。

大平遺跡においても、当静岡県埋蔵文化財調査研究所が、平成７年度・８年度に第Ⅰ期現地調査、平成12年度に第Ⅱ期現地調査を実施しており、それぞれ『大平遺跡』『大平遺跡Ⅱ』として報告している。

過去２回の調査においては、中世後半から近世前半の集石墓を中心とした墓が検出され、また、前回の調査では、弥生時代前期末の遺物を伴う住居１軒を検出、これは静岡県内における初の検出例となり大きな成果を収めることとなった。

今回の第Ⅲ期現地調査は、東駿河湾環状道路建設工事に伴う大平遺跡の発掘調査としては最後の調査を飾るものである。

大平遺跡の発掘調査で得られた貴重な文化財が、今後、研究、教育等の幅広い分野で活用されると同時に、文化財に対する理解を深める一助となることを期待するばかりである。

最後に、現地調査及び資料整理、本書の作成にあたっては、国土交通省をはじめとした関係機関各位に多大なるご援助、ご理解を得ている。この場を借りて厚く御礼申し上げる次第である。また、調査にご理解をいただいた地元の皆様、現地での発掘作業、地道な資料整理作業にあたられた方々に、この機会に厚く御礼申し上げたい。

2009年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　　清水　哲

例　　言

1　本書は静岡県駿東郡長泉町南一色字大36-1他に所在する大平遺跡の第Ⅲ期発掘調査報告書である。

2　現地調査は平成16年度、平成17年度、東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘業務として、国土交通省中部地方整備局沼津河川国道事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、平成16年９月から平成17年５月にかけて実施した。

3　資料整理は平成19年９月から平成20年３月にかけて実施した。

4　調査体制は下記のとおりである。

平成16年度　現地調査

所長　斎藤　忠　　副所長　飯田英夫　　常務理事兼総務部長　平松公夫
総務部次長兼総務課長　鎌田英巳　　会計係長　野島尚紀
調査研究部長　山本昇平　　調査研究部次長　栗野克巳
調査研究部次長兼調査研究二課長　佐野五十三
主任調査研究員　中鉢賢治　　調査研究員　片桐英生　井鍋誉之
調査補助員　福島正史　大島秀俊　（シン技術コンサル）

平成17年度　現地調査

所長　斎藤　忠　　常務理事兼総務部長　平松公夫
総務部次長兼総務課長　鈴木大二郎　　会計係長　野島尚紀
調査研究部長　石川素久　　調査研究部次長　栗野克巳
調査研究部次長兼調査研究二課長　佐野五十三
主任調査研究員　中鉢賢治　　調査研究員　片桐英生　　技術員　水上綾子

平成19年度　資料整理

所長　斎藤　忠　　常務理事兼事務局長　清水　哲
事務局次長兼総務課長　大場正夫　　事務局次長兼調査課長　及川　司
事務局次長　佐野五十三　稲葉保幸　　事業担当　望月高史
調査課東部調査一係長　中鉢賢治　　調査研究員　日吉高幸　　技術員　木村忠義

5　現地での基準点測量を株式会社コアエンジニアリング、空中写真測量及び撮影を株式会社シン技術コンサルに委託した。

6　本書の執筆は主に木村が行い、中鉢・日吉が加筆・修正を行った。

7　本書掲載の遺物写真は、当研究所本部で杉山すず代技術作業員が撮影した。

8　銭貨の分類は、当研究所岩名建太郎調査研究員が行った。

9　石材鑑定は、当研究所森嶋富士夫技術員が行った。

10　本書で使用した地図は、国土地理院発刊１：25,000地形図等を複写して加筆・加工した。

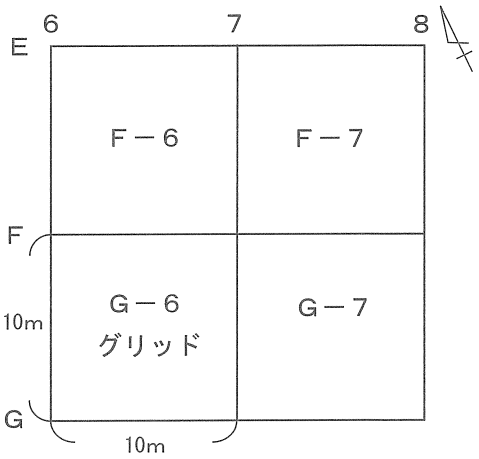
11　発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

12　本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

凡　　例

1　大平遺跡は、過去２回の現地調査が実施されており、今回は３回目にあたる。調査区の設定については、過去２回の調査に準じ、西側の調査区を１－１区、東側の調査区を２－２区とした。

2　平成８年度の第Ⅰ期現地調査において、建設予定道路のセンターラインを中心軸（Ｆライン）として10m×10mのグリッド(方眼)を設定した。
そのため、縦方向は、真北から左回りに333°44′52″回転している。今回の調査でも同様のグリッドを設定し、北西角（Ａ．１）を原点に南北方向にアルファベット、東西方向にアラビア数字を付した。
日本測地系（改正前）を使用し、平面直角座標第Ⅷ系のＸ＝－94421.543　Ｙ＝36172.898を原点（Ａ．１）とし、グリッド南西角の交点をグリッド名とした。(右図)



グリッド（方眼）設定図

3　遺物の取り上げは光波測距器を用い、(株）シン技術コンサルの「遺跡管理システム」上でデジタルデータとして保存した。遺物番号は三桁の数字を用い、土器、石器については通し番号とし、金属製品については別に番号を付した。
4　遺物・遺構の観察表、計測表において、推定値、復元値には（　）を付して表記した。
5　現地調査における土層の観察表及び遺物の色調は、新版『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1997年版）に準拠した。
6　遺物の重量計測には、A&D Co.,LTDのEK1200Aを使用した。
7　挿図の縮尺は、各図に示したスケールの通りである。
8　本書で使用する遺物・遺構の標語・略語は以下の通りである。

遺物	Ｐ＝土器・陶磁器	Ｒ＝礫		
	Ｃ＝炭化物	Ｓ＝石器	Ｂ＝骨類	
遺構他	ＳＦ＝土坑	ＳＤ＝溝	ＳＰ＝小穴	
	ＳＲ＝旧河川	ＳＸ＝性格不明遺構	ＴＲ＝トレンチ	Ｇｒ＝グリッド
石材	An（Py）＝輝石安山岩	LT＝火山礫凝灰岩	Rhy＝流紋岩	Sl＝粘板岩
黒曜石産地	SWHD＝諏訪星ヶ台群			

磨りの範囲　　敲きの範囲

目　　次

序／例言／凡例

第Ⅰ章　調査の概要
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の方法 …… 4
第３節　調査の経過 …… 5
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 6
第２節　歴史的環境 …… 8
第Ⅲ章　調査の成果
第１節　土層について …… 10
第２節　１－１区の遺構と遺物について
１　中世から近世の遺構 …… 12
（１）Ⅲ層検出の遺構 …… 12
（２）Ⅴ層検出の遺構 …… 14
（３）Ⅶ層検出の遺構 …… 22
２　中世から近世の遺物
（１）中世の遺物 …… 29
（２）近世の遺物 …… 30
（３）金属製品・石製品 …… 30
第３節　２－２区の遺構と遺物について
１　弥生時代の遺構と遺物
（１）弥生時代の遺構 …… 36
（２）弥生時代の遺物 …… 36
２　中世から近世の遺構
（１）Ⅳ層検出の遺構 …… 42
（２）Ⅴ層検出の遺構 …… 42
（３）Ⅶ層検出の遺構 …… 44
３　中世から近世の遺物
（１）中世の遺物 …… 51
（２）近世の遺物 …… 54
（３）金属製品・石製品 …… 54
第Ⅳ章　まとめ
第１節　弥生時代の遺構・遺物について …… 59
第２節　大平遺跡における中世墓の形態と分布について …… 64

写真図版

報告書抄録

写　真　図　版

図版１　調査区全景（合成写真）
図版２　１　１－１区 調査区全景（南より）　２　ＳＦ101検出状況（東より）
図版３　１　ＳＦ105検出状況（北より）　２　ＳＦ104検出状況（北より）
図版４　１　ＳＦ108検出状況（北東より）　２　ＳＦ106検出状況（北より）　３　ＳＦ105・ＳＦ106完掘状況(西より)
　　４　ＳＦ114検出状況（西より）　５　ＳＦ222検出状況（南より）
図版５　１　ＳＦ223検出状況（南東より）　２　ＳＦ222・ＳＦ223完掘状況（東より）
　　３　ＳＦ201・ＳＦ202・ＳＦ234・ＳＦ235完掘状況(南東より)　４　ＳＰ212・ＳＰ213完掘状況(東より)
　　５　ＳＸ204完掘状況（北より）
図版６　１　２－２区 調査区全景(西より)　２　ＳＦ285完掘状況（南より）　３　ＳＦ289完掘状況（東より）
　　４　ＳＦ292完掘状況（北より）　５　ＳＦ293完掘状況（南西より）
図版７　１　ＳＦ284完掘状況（南より）　２　ＳＦ298完掘状況（南より）　３　ＳＦ299完掘状況（西より）
　　４　ＳＦ300完掘状況（南西より）　５　ＳＦ301完掘状況（南東より）　６　ＳＦ296・ＳＰ221完掘状況(西より)
　　７　ＳＰ217完掘状況（南東より）　８　ＳＰ222完掘状況（南より）
図版８　１　弥生土器等 遺物出土状況（１）（東より）　２　弥生土器等 遺物出土状況（２）（北より）
図版９　１　１－１区 古瀬戸　２　１－１区 古瀬戸擂鉢　３　１－１区 瀬戸美濃大窯
　　４　１－１区 志戸呂　５　１－１区 羽釜・内耳鍋・瓦質陶器
図版10　１　１－１区 常滑　２　１－１区 貿易陶磁器
図版11　１　１－１区 古瀬戸縁釉小皿　２　１－１区 志戸呂縁釉小皿　３　１－１区 かわらけ
　　４　１－１区 灯明皿　５　１－１区 近世遺物　６　１－１区 金属製品・石製品
　　７　１－１区 遺構出土遺物
図版12　１　２－２区 弥生土器（１）　２　２－２区 弥生土器（２）　３　２－２区 弥生土器（３）
　　４　２－２区 礫器　５　２－２区 石鏃・楔形石器　６　２－２区 磨石
図版13　１　２－２区 古瀬戸　２　２－２区 古瀬戸擂鉢　３　２－２区 瀬戸美濃大窯
　　４　２－２区 貿易陶磁器　５　２－２区 羽釜・内耳鍋・瓦質陶器
図版14　１　２－２区 常滑　２　２－２区 かわらけ（１）　３　２－２区 かわらけ（２）
　　４　２－２区 かわらけ（３）　５　２－２区 かわらけ（４）　６　２－２区 近世遺物
　　７　２－２区 金属製品
図版15　１　２－２区 ＳＲ03出土遺物（１）　２　２－２区 ＳＲ03出土遺物（２）
図版16　１　２－２区 ＳＲ04・ＳＲ05出土遺物　２　２－２区 遺構出土遺物（ＳＦ・ＳＰ）

挿　表　目　次

表１　東駿河湾環状道路関連遺跡一覧表 ‥‥ 3
表２　第Ⅲ期現地調査工程表 ‥‥‥‥‥‥ 5
表３　資料整理工程表 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 5
表４　周辺遺跡一覧表 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 9
表５　１－１区 Ⅲ層 溝状遺構(ＳＤ)計測表 ‥ 12
表６　１－１区 Ⅴ層 土坑（ＳＦ）計測表 ‥ 20
表７　１－１区 Ⅴ層 小穴（ＳＰ）計測表 ‥ 21
表８　１－１区 Ⅶ層 旧河川（ＳＲ）計測表　22
表９　１－１区 Ⅶ層 土坑（ＳＦ）計測表 ‥ 26
表10　１－１区 Ⅶ層 小穴（ＳＰ）計測表 ‥ 27
表11　１－１区 Ⅶ層 不明遺構(ＳＸ)計測表　28
表12　１－１区 出土遺物観察表 ‥‥‥‥‥ 34
表13　１－１区 中世出土遺物一覧表 ‥‥‥ 35
表14　２－２区 弥生時代出土遺物観察表 ‥‥ 41
表15　２－２区 Ⅳ・Ⅴ層土坑（ＳＦ）
　　・溝状遺構（ＳＤ）計測表 ‥‥‥‥‥ 42
表16　２－２区 Ⅶ層 旧河川(ＳＲ)・溝状遺構(ＳＤ)
　　・土坑(ＳＦ)計測表 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 49
表17　２－２区 Ⅶ層 小穴（ＳＰ）計測表 ‥ 50
表18　２－２区 出土遺物観察表 ‥‥‥‥‥ 56
表19　２－２区 中世出土遺物一覧表 ‥‥‥ 57
表20　黒曜石原産地推定分析結果 ‥‥‥‥‥ 63
表21　土坑集計表 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 68
表22　大平遺跡 土坑一覧表(第Ⅰ期・第Ⅱ期) ‥ 70

挿　図　目　次

図１　静岡県の位置図 …… 1
図２　東駿河湾路線配置図 …… 2
図３　大平遺跡調査区配置図 …… 4
図４　長泉町位置図 …… 6
図５　周辺地形分類図 …… 7
図６　周辺遺跡分布図 …… 9
図７　土層柱状図 …… 11
図８　１－１区 溝状遺構実測図（ＳＤ001） …… 12
図９　１－１区 Ⅲ層 遺構分布図 …… 13
図10　１－１区 Ⅴ層 遺構分布図 …… 16
図11　１－１区 Ⅴ層 土坑実測図（１）（ＳＦ101・ＳＦ105・ＳＦ102・ＳＦ113） …… 17
図12　１－１区 Ⅴ層 土坑実測図（２）（ＳＦ103・ＳＦ106・ＳＦ114） …… 18
図13　１－１区 Ⅴ層 土坑実測図（３）（ＳＦ104・ＳＦ108） …… 19
図14　１－１区 Ⅴ層 土坑実測図（４） …… 20
（ＳＦ119・ＳＦ118・ＳＦ124・ＳＦ126・ＳＦ107・ＳＦ111・ＳＦ116・ＳＦ127）
図15　１－１区 Ⅴ層 小穴実測図（ＳＰ101・ＳＰ102・ＳＰ103・ＳＰ104・ＳＰ105・ＳＰ106） …… 21
図16　１－１区 Ⅶ層 遺構分布図 …… 23
図17　１－１区 Ⅶ層 土坑実測図（１）（ＳＦ222・ＳＦ223・ＳＦ224） …… 24
図18　１－１区 Ⅶ層 土坑実測図（２） …… 25
（ＳＦ260・ＳＦ272・ＳＦ249・ＳＦ267・ＳＦ250・ＳＦ210・ＳＦ244・ＳＦ282・
ＳＦ226・ＳＦ202・ＳＦ201・ＳＦ232・ＳＦ234・ＳＦ205・ＳＦ206・ＳＦ213・ＳＦ259）
図19　１－１区 Ⅶ層 小穴実測図 …… 27
（ＳＰ201・ＳＰ202・ＳＰ203・ＳＰ204・ＳＰ205・ＳＰ206・ＳＰ207・ＳＰ208・
ＳＰ210・ＳＰ211・ＳＰ212・ＳＰ213）
図20　１－１区 Ⅶ層 不明遺構実測図（ＳＸ202・ＳＸ204） …… 28
図21　１－１区 出土遺物（１）瀬戸美濃製品・志戸呂製品・貿易陶磁器 …… 31
図22　１－１区 出土遺物（２）常滑製品・羽釜・内耳鍋・かわらけ・近世陶磁器 …… 32
図23　１－１区 出土遺物（３）金属製品・石製品 …… 33
図24　２－２区 Ⅷ層 全体図 …… 37
図25　２－２区 Ⅷ層 遺物出土状況図 …… 38
図26　２－２区 出土遺物（１）弥生土器 …… 39
図27　２－２区 出土遺物（２）石器 …… 40
図28　２－２区 Ⅳ・Ⅴ層　溝状遺構・土坑実測図（ＳＤ102・ＳＦ138・ＳＦ139） …… 42
図29　２－２区 Ⅴ層 遺構分布図 …… 43
図30　２－２区 Ⅶ層 遺構分布図 …… 45
図31　２－２区 Ⅶ層 旧河川実測図（１）（ＳＲ03・ＳＲ04） …… 46
図32　２－２区 Ⅶ層 旧河川実測図（２）（ＳＲ05） …… 47
図33　２－２区 Ⅶ層 土坑実測図（１） …… 48
（ＳＦ284・ＳＦ285・ＳＦ286・ＳＦ289・ＳＦ290・ＳＦ291・ＳＦ292・ＳＦ293・
ＳＦ294・ＳＦ295・ＳＦ296・ＳＰ221・ＳＦ297・ＳＰ228・ＳＰ219）
図34　２－２区 Ⅶ層 土坑実測図（２） …… 49
（ＳＦ302・ＳＦ288・ＳＦ287・ＳＦ299・ＳＦ300・ＳＦ301・ＳＦ298）
図35　２－２区 Ⅶ層 小穴実測図 …… 50
（ＳＰ218・ＳＰ220・ＳＰ227・ＳＰ222・ＳＰ225・ＳＰ217・ＳＰ224・ＳＰ226・ＳＰ216）
図36　２－２区 出土遺物（１）瀬戸美濃製品 …… 52
図37　２－２区 出土遺物（２） …… 53
瀬戸美濃製品・志戸呂製品・貿易陶磁器・常滑製品・瓦質陶器・かわらけ
図38　２－２区 出土遺物（３）近世陶磁器・金属製品・石製品 …… 55
図39　弥生時代　遺物出土状況 …… 62
図40　大平遺跡検出の土坑の形態 …… 68
図41　大平遺跡　土坑分布図 …… 73・74

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

静岡県の東側に位置する三島市・沼津市を中心とした地域（図１）は、富士・愛鷹山麓、箱根外輪山、伊豆山系など、北、東、南の三方を山々に囲まれる。それらが造り出す緩やかな傾斜地と、豊かな地下水脈による風光明媚な自然環境は、四季折々に様々な表情を見せる。古くから富士山、箱根、伊豆方面への観光の拠点としても知られる本地域には、季節を問わず多くの人々が訪れている。

東海道本線、東海道新幹線、国道１号線、国道246号線が通る本地域は、東海地方と関東地方を結ぶ交通の要衝であると同時に、農業、水産業といった都心の生活を支える産業の要衝としても重要な役割を担っている。また、都心から約１時間という立地条件と、富士山麓の豊富な地下水源という自然条件を求めて企業進出が盛んである。都心への通勤圏内ということも相俟って、急速な発展を伴い、交通量が著しく増加した。

しかし、上述の自然環境は、交通機関の発展に地理的制約を加えていたために、主要幹線道路は、長年に渡り、慢性的な交通渋滞に悩まされてきた。

こうした慢性的な交通渋滞の緩和を目的として計画されたのが、沼津市から下田市を結ぶ伊豆縦貫自動車道である。このうち、沼津市岡宮から長泉町、三島市大場を通り、函南町平井を結ぶ約15kmの自動車専用道路が東駿河湾環状道路である。

東駿河湾環状道路建設に際して、路線予定地域内に埋蔵文化財の所在確認のための調査が実施されることになった。まず、平成２年に関係各市町村教育委員会による遺跡及び遺跡の可能性のある地点のリストアップを受けて、静岡県教育委員会文化課、各市町村教育委員会、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の３者による踏査が行われた。その結果、約40カ所が遺跡の可能性が高い場所として報告された（図２）。この報告を受け、指導機関静岡県教育委員会文化課、調査機関財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制で、記録保存を目的とした発掘調査を開始した。

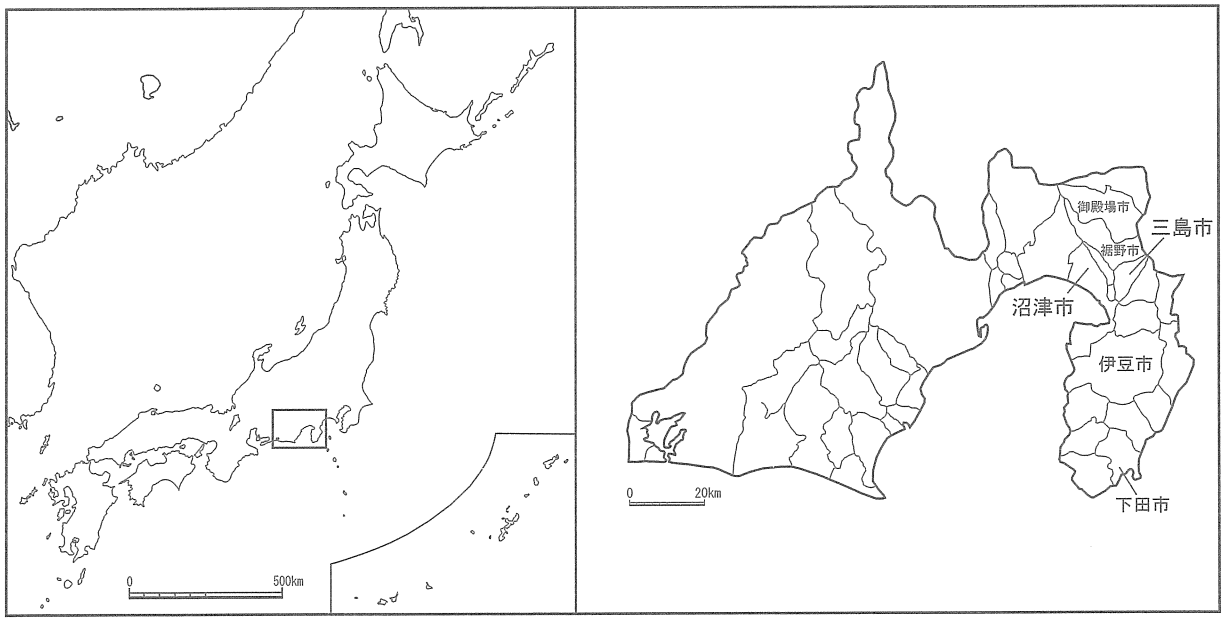


図１　静岡県の位置図

大平遺跡の調査は、委託者である旧建設省中部地方建設局沼津工事事務所（現国土交通省中部地方整備局沼津河川国道事務所)、静岡県教育委員会文化課、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の３者の協議の結果、買収完了地から調査を先行して実施することとなった。まず、平成７年９月から11月にかけて、遺跡の範囲などを確認するための調査を行った。そして、同年11月から平成８年12月にかけて第Ⅰ期現地調査を行い、平成９年４月から平成10年１月まで資料整理を実施した。また、平成12年４月から６月にかけて第Ⅱ期現地調査、平成13年４月から６月まで資料整理を行い、それぞれ『大平遺跡』『大平遺跡Ⅱ』として報告書の刊行に至っている。

今回の第Ⅲ期現地調査は、未調査部分4,762㎡について、国土交通省中部建設局沼津河川国道事務所の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課、当研究所の３者による協議の結果、平成16年９月から平成17年５月にかけて実施した。資料整理は、平成19年９月から平成20年３月にかけて実施した。

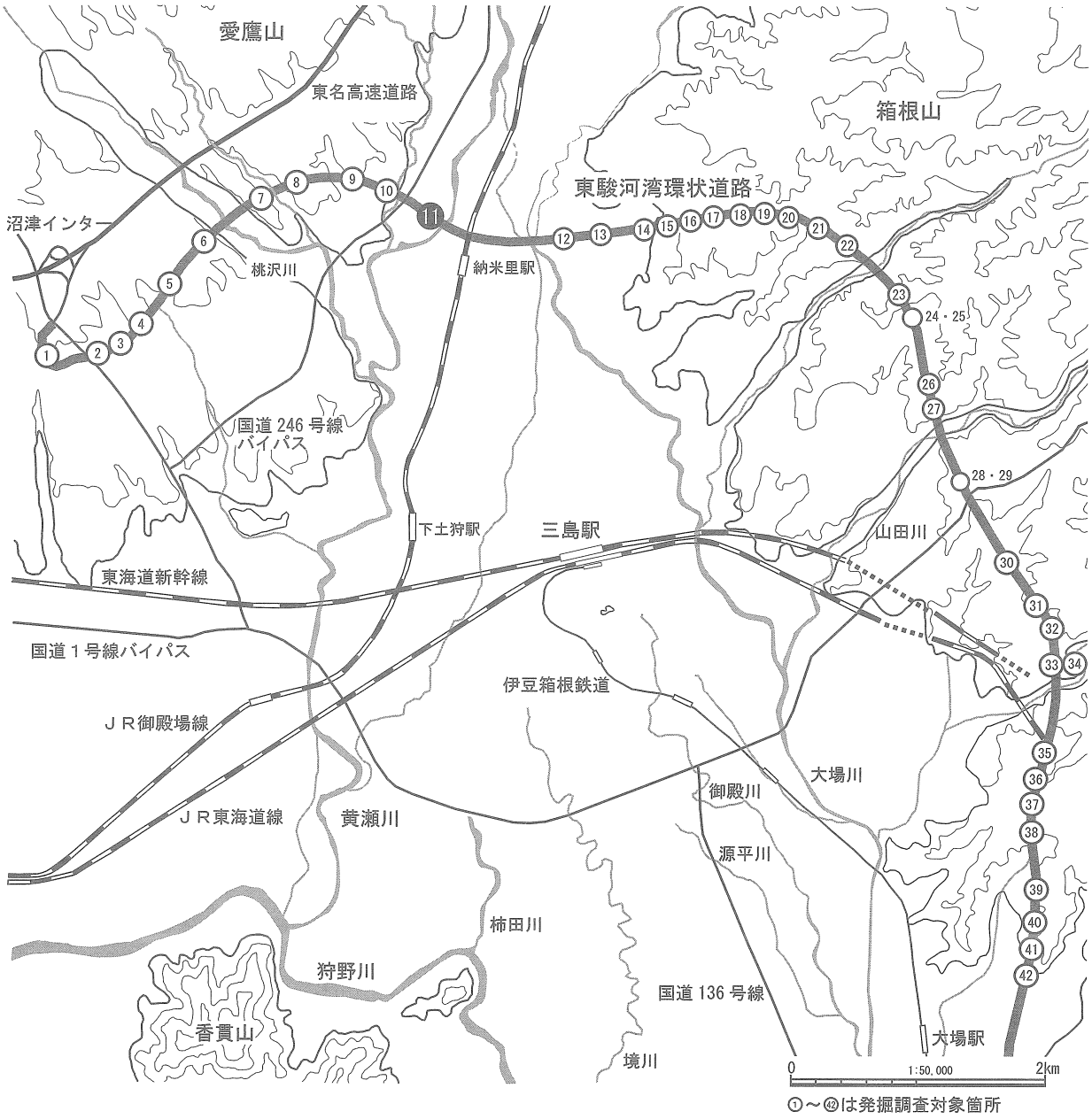


図２　東駿河湾路線配置図

表１　東駿河湾環状道路関連遺跡一覧表

整理番号	遺跡名	内　　容	報　告　書
沼津市			
1	上松沢平（かみまつざわだいら）	縄文早期前半集落	2004『上松沢平遺跡』
2	虎杖原古墳（いたどりはら）	横穴式石室墳（竪穴状の石室）	2003『寺林遺跡・虎杖原古墳』
3	寺林（てらばやし）	旧石器時代（YL層）石器群	
4	丸尾北（まるおきた）	縄文草創期～後期、旧石器時代	資料整理中
長泉町			
6	桜畑上（さくらばたけうえ）	縄文中期集落、旧石器時代	資料整理中
9	池田Ｂ（いけだ）	縄文早期末～前期初頭集落	2000『池田Ｂ遺跡』
10	鉄平（てっぴら）	縄文早期末～前期初頭集落、BBⅢ層土坑群	2003『鉄平遺跡』
11	大平（おおだいら）（Ⅰ期） 大平（Ⅱ期） 大平（Ⅲ期）	中世墳墓 中世墳墓、弥生前期末住居跡 中世墳墓、弥生前期末土器出土	1998『大平遺跡』 2001『大平遺跡Ⅱ』 2009『大平遺跡Ⅲ』（本書）
三島市			
14	北ノ入Ａ（きたのいり）	縄文中期中葉集落	1999『北ノ入Ａ遺跡』
16	長兵衛平（ちょうべえだいら）	縄文	1998『長兵衛平遺跡』
17 18	小池（こいけ）	縄文中期前半集落	1998『小池遺跡』
19	徳倉Ｂ（とくら）	縄文早期後半～中期前半	1998『徳倉Ｂ遺跡』
20	上ノ池（かみのいけ）	旧石器（YL、BB0、BBⅠ、BBⅡ、BBⅢ層）石器群	1998『上ノ池遺跡』
22	八田原（やつたはら）	押型文系土器、BBⅢ層土坑群	1997『八田原遺跡』
23	加茂ノ洞Ｂ（かものほら）	BBⅢ層土坑群	1996『加茂ノ洞Ｂ遺跡』
27	焼場（やきば）	鎌倉古道、縄文早期～前期	1994『焼場Ａ遺跡』 1996『焼場遺跡Ｂ地点・五百司（ごひゃくし）遺跡』
28 29	下原（しもはら）	旧石器（YL層）石器群	1995『下原遺跡Ⅰ』 1996『下原遺跡Ⅱ』 1998『下原遺跡Ⅲ』
30	押出シ（おんだ）	縄文中期後半集落	1999『押出シ遺跡（遺構編）』 2000『押出シ遺跡（遺物編）』
31	生茨沢（はいばらざわ）	横穴式石室、BBVI層直上石器群	1999『生茨沢遺跡』
32	中峯（なかみね）	旧石器時代	1998『中峰遺跡』
33	桧林Ａ（ひのきばやし）	縄文草創期石槍、有舌尖頭器などの石器群	1998『桧林Ａ遺跡』
38	田頭山（たがしらやま）	横穴式石室、方形周溝状遺構、火葬墓	2004『田頭山古墳群』

※整理番号は図２の番号。表にない番号の場所は、確認調査の結果、本調査が必要ないと判断された場所。
※層位の略号は、休場層（YL）、休場層下部の黒色帯（BB0）、第Ⅰ黒色帯（BBⅠ）、第Ⅱ黒色帯（BBⅡ）、第Ⅲ黒色帯（BBⅢ）、第VI黒色帯（BBVI）で愛鷹山麓の基本層序に準じている。

第２節　調査の方法

大平遺跡の第Ⅲ期現地調査の対象地区は、平成８年に調査を実施した１区の西側3,135㎡と平成12年に調査を実施した４区の東側1,627㎡の２つの地区である。調査に際しては、過去の調査に準じて、これらの地区に、それぞれ１－１区、２－２区という調査区名を付した（図３）。調査区に設定したグリッドも、第Ⅰ期現地調査において建設予定道路のセンターラインを中心軸（Ｆライン）として設定された10m×10m四方のグリッドに準じている。北西の角（Ｘ＝－94421.543　Ｙ＝36172.898　日本測地系）を原点（Ａ．１）とし、真北から左回りに333°44′52″回転している。南北方向にアルファベット、東西方向にアラビア数字を付し、南西角の交点をグリッド名としている。

調査は、重機による表土除去に並行して、調査区内に設定したトレンチを掘削し、堆積している土を確認した後、人力掘削を行った。遺物の取り上げ、地形測量等については、光波測距器を用い、(株)シン技術コンサルの「遺跡管理システム」上でデジタルデータとして保存した。また、土層図、個別遺構図は、上記のシステムに加え、縮尺１／20を基本とし、微細図等は１／10として手実測で図化した。また、１－１区については、ラジコンヘリコプターを使用した空中写真測量を実施した。

写真撮影は、35㎜カラーネガ、カラースライド、モノクロネガを主体として、適宜６×７判モノクロ、同スライドを使用し撮影した。高所撮影にはローリングタワーを使用し、全体写真については、ラジコンヘリコプターを使用して空中写真撮影を行った。

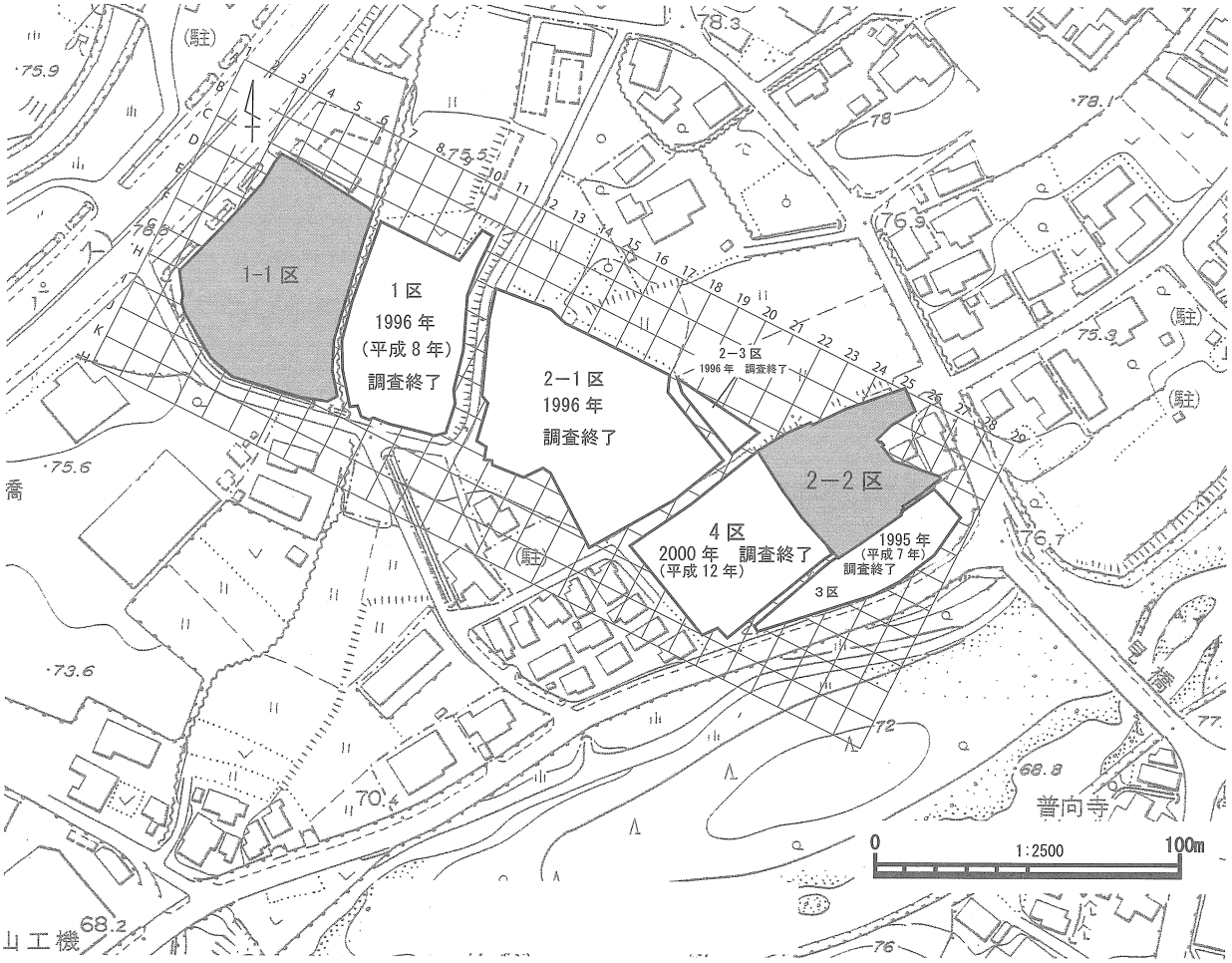


図３　大平遺跡調査区配置図

第３節　調査の経過

１　第Ⅲ期現地調査

第Ⅲ期現地調査は、平成16年９月21日、１－１区から開始した。重機による表土除去と並行してトレンチ掘削を行った結果、過去の調査で確認されたものと同様の土が堆積していることが判明した。１－１区については、第Ⅱ期現地調査で見られた弥生時代の遺物が含まれている層は確認できなかったため、中世から近世にかけての遺物が含まれているⅢ層からⅦ層を対象として、層位ごとに調査を行った。そこでは、第Ⅰ期、第Ⅱ期現地調査で検出されたものと同様の墓と思われる土坑が多数検出された。また、陶磁器、銭貨等の金属製品、砥石等を主体とする石製品が出土した。平成17年１月、Ⅶ層上面において、基盤層を形成する大型の礫が多数出土したため、空中写真測量および撮影を実施することとした。

同年１月中旬、１－１区の調査終了とともに、２－２区の表土除去及びトレンチ掘削を実施し、２－２区の調査を開始した。２－２区においては、トレンチ掘削中に第Ⅱ期現地調査で出土したものと同様の弥生時代前期末に比定される条痕文系土器がⅧ層から出土した。そのためⅢ層からⅦ層にかけての調査と弥生時代の遺物包含層であるⅧ層を調査の対象とすることとした。Ⅲ層からⅦ層における調査では、１－１区同様、多くの土坑が検出され、陶磁器を中心とした遺物が出土した。４月下旬、Ⅶ層上面においてラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した後、Ⅷ層の調査を開始した。しかし、第Ⅱ期現地調査で検出された弥生時代前期の遺構は検出されなかった。また、弥生土器や石器類が出土したものの、Ⅷ層における遺構、遺物の広がりが調査区の中央部南側に限定されたものであることが判明した。掘削作業による調査は５月17日をもって終了し、５月20日に撤収作業を終え現地調査を完了した。

表２　第Ⅲ期現地調査工程表

	2004年（平成16年）				2005年（平成17年）				
	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	４月	５月
準備工・撤去工	▬								▬
１－１区		▬	▬	▬	▬				
２－２区						▬	▬	▬	▬

２　資料整理

平成19年９月初旬に三島事務所に仮収納していた遺物や図面等を東駿河湾整理事務所へ移動し、９月中旬から本格的な資料整理作業を開始した。現地で記録、作成した図面から遺構図、遺跡全体図、報告書に載せるための遺構図版を作成した。また遺物については、分類、仕分け、接合、復元を行い、続けて実測作業を実施、遺物図版を作成した。遺物の写真は、６×７判を使用して静岡県埋蔵文化財調査研究所本部にて撮影を行った。また、黒曜石については、独立行政法人沼津工業高等専門学校の望月明彦教授に蛍光Ｘ線による原産地推定分析を依頼した。

表３　資料整理工程表

	2007年（平成19年）				2008年（平成20年）		
	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
準備作業	▬						
資料整理	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

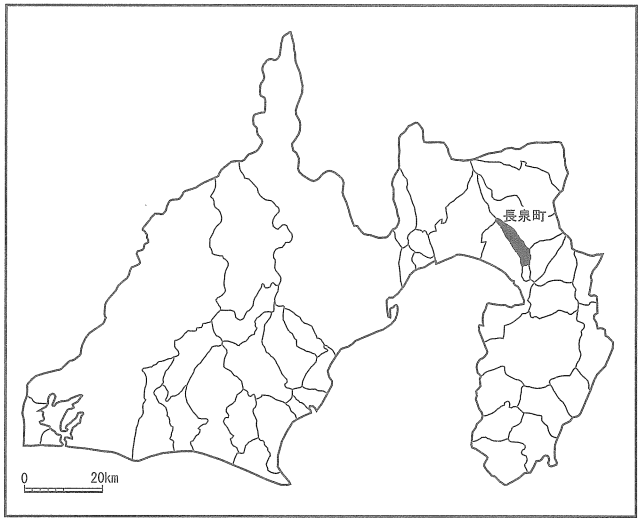


図４　長泉町位置図

大平遺跡（以下、本遺跡）は、静岡県駿東郡長泉町南一色に所在する。ＪＲ御殿場線の納米里駅から北西に約0.5㎞、国道246号線バイパスとその南を流れる黄瀬川の間に位置している。

地形的には、富士・愛鷹山と箱根外輪山の接する地点を頂点に広がる、いわゆる黄瀬川扇状地が黄瀬川の浸食によって形成された河岸段丘上にあり、標高は約70m～75mを計る。

黄瀬川扇状地は、富士・愛鷹山麓と箱根外輪山が最も近づく、裾野市伊豆島田を扇頂として、扇端の南西部は沼津市浮島ヶ原、南東部は狩野川低地へと続いている。今から約10,000年前、富士山から噴出し堆積した溶岩（通称、三島溶岩）の上部に、縄文海進（註１）による粘土、シルト層が堆積し潟湖化、その後、約2,500年前の富士山東麓の大規模な山体崩落を起源とする御殿場泥流層が堆積して形成されたと考えられている。

御殿場泥流層は地元では「マサ」と呼ばれ、灰褐色の無層理の砂に、斜長石に富む多孔質玄武岩の礫を含む層が何層かにわたり堆積しており、その間には層理の発達した砂層をレンズ状に挟むことがある。乾燥すると堅く、一方で水分を含むと崩壊しやすいという特徴を有し、農耕には不適である。

黄瀬川は、富士山の南東麓、御殿場市の標高約520m地点に起源を有する。多少の迂曲を経るが、ほぼ南に向かって流れ、清水町長沢付近で狩野川に合流する全長約30㎞に及ぶ河川である。黄瀬川及びその支流は、約2,000年前以降、御殿場泥流層を浸食し河岸段丘を形成してきたとされている。

現在の黄瀬川は、国道246号線バイパスにほぼ並行して流れている。その流心は、西から東に向かって移動してきたと考えられている。また、等高線や段丘面と段丘崖の礫の分布は、本遺跡周辺の地形が、黄瀬川の河川活動によって形成された西高東低の河岸段丘であることを示している。

大平という地名は、黄瀬川の形成する河岸段丘上の開けた土地を示して付けられたと言われ、また、一色という字名は、シキ（砂礫）が広がるところ、あるいは河川に沿うところ、山麓の開拓地という意味で、一毛作しかできない生産性の低い土地を指しているという説がある。

本遺跡周辺の土地利用については、現在は宅地及び店舗地が中心である。しかし、江戸時代まで遡ると、寛文12年（1672）の検地帳による一色村の田畑屋敷別等級別の構成は、田畑16町７反、畑地１町３反、屋敷１町となっている。また、宝暦11年（1761）の「主人　下人　切支丹宗門御改帳」が示す一色村の家数・人数構成は、「家数六拾軒　内百姓三拾軒」とあり、安永６年（1775）作の「御尋ニ付書上帳」と一緒に整理されている、文化４年（1807）に定められた「（覚）」には、「総家数五十二軒中本百姓四十八軒」とあり、江戸時代を通じた本遺跡周辺の土地利用の状況が窺える。

また、明治９年以降の、駿河国駿東郡南一色村字前ノ田及び石行塚の地籍図においても、本遺跡の大部分は水田であった事が記されている。

註１　縄文海進…約２万年前頃、海面は現在より100m以上低かったが、しだいに気温が上昇し約6,000年前頃は現海面上より２～３m上昇し海岸線は現在よりも内陸部にあった。日本では、この時期縄文時代にあたるので縄文海進と呼んでいる。

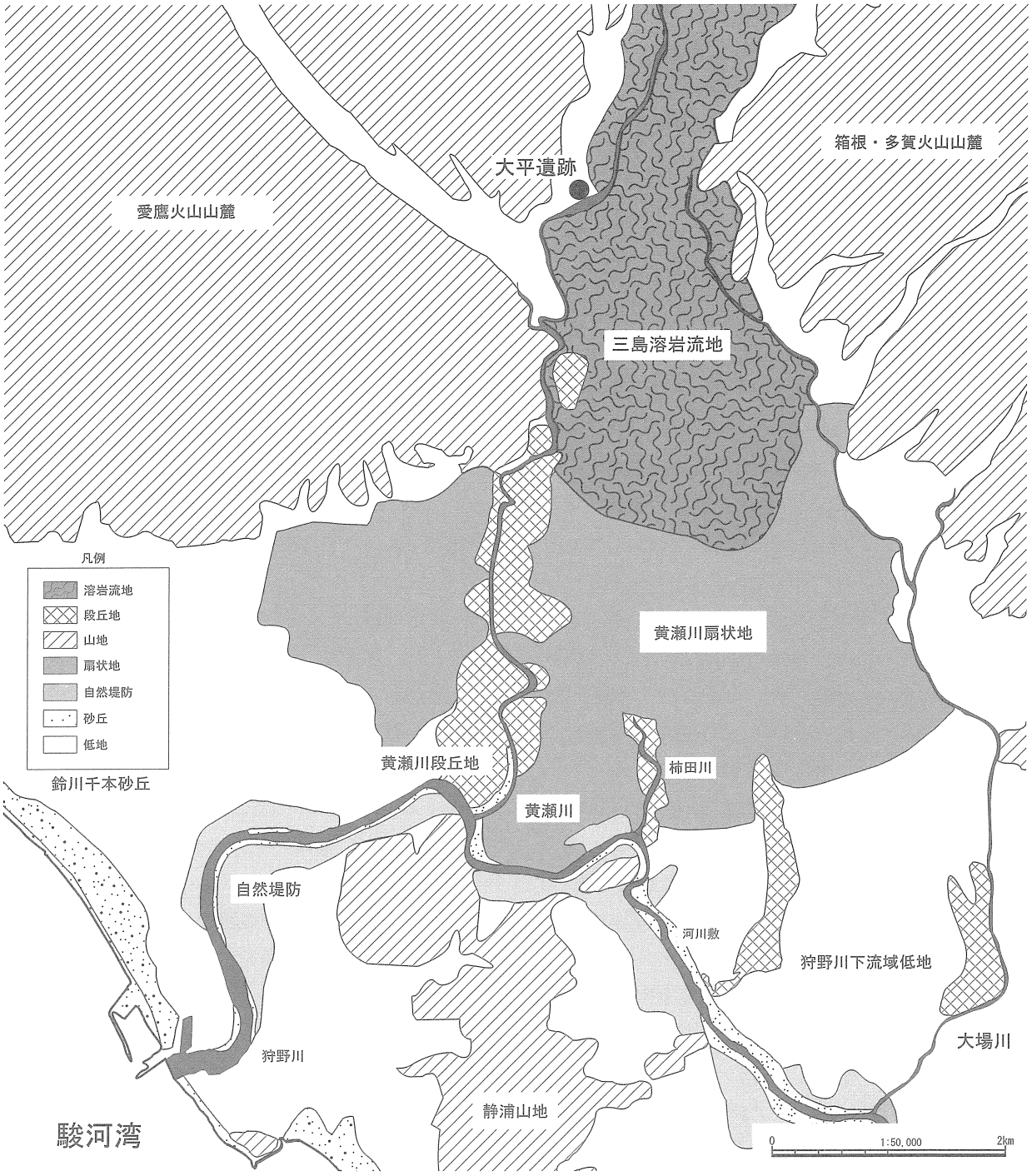


図５　周辺地形分類図（『沼津市史』資料編　自然環境（1999）付図６「地形分類図」をもとに作成）

参考文献

鈴木　譲　1998『大平遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

田中琢・佐原真（編）2002『日本考古学事典』三省堂

吉川　契子　1992「黄瀬川下流域の地形について」『静岡地学』第66号　静岡県地学会

吉川　契子　1994「黄瀬川扇状地の地形・地質と人の暮らしと関わり」『沼津市史研究』第三号　沼津市教育委員会市史編さん係

渡辺　精　1988「黄瀬川の溶岩と泥流」『静岡地学』第58号　静岡県地質学会

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺の遺跡を概観すると大きく２つの特徴が挙げられる。愛鷹山麓、箱根外輪山西麓の丘陵に位置する旧石器から縄文時代にかけての遺跡と、黄瀬川扇状地上に位置する弥生時代以降の遺跡である。

本節では、大平遺跡の調査対象時期である弥生時代及び中世の遺跡を中心に、周辺の遺跡の状況について確認したい。

静岡県の東部地域では、弥生時代前期の遺跡はほとんど確認されておらず、中期、後期のものが中心である。ただし、本遺跡の南西約200mの地点で、芝繊機械株式会社建設に際し、弥生時代前期終末期と推定される水神平系の条痕文の壺と遠賀川系の壺がセットで出土している（註１）。また、本遺跡の第Ⅱ期現地調査においても、弥生時代前期末（註２）のものと思われる住居跡１軒が検出されており、これは東部地域のみならず静岡県内でも稀少な検出例である。

本遺跡周辺部の弥生時代の遺跡には長泉町下長窪上野遺跡（２）がある。本遺跡から西に700mほど離れているが、ここからは、弥生時代後期最末期から古墳時代初めの時期と思われる住居跡17軒、倉庫跡１軒が検出され、土器は壺と台付甕及び鉢、高坏が出土している。約1.5km北に所在する裾野市富沢原遺跡（３）も同様に弥生時代後期の遺跡である。また、『静岡県文化財地名表Ⅰ』によると白陰林Ｂ～Ｄ遺跡（４）（５）（６）、反畑Ｅ遺跡（７）、中村Ａ遺跡（８）（いずれも三島市）から弥生土器が採取されている。

一方、中世の遺跡は数多く存在している。本遺跡が所在する地域は、古代から交通路として利用されていた事が知られている。中世初頭には、木瀬川駅から北上し、鮎沢駅（竹之下）を経て、足柄峠を超えて相模の地へと向かう道や鮎沢沿いに相模松田へ抜ける道があったと伝えられている。

三方を険しい山々に囲まれる本地域は、古くから東国と京を結ぶ交通の要衝であったことから、中世においては幾つもの城が築かれた。

本遺跡の北方約１kmの地点には天神川古城（９）が所在する。標高約115mの通称天神山に築かれた長さ約160m、幅約100mの城域を有する城である。天正10年（1582）築城と伝えられる本城は、本遺跡の西約500mに位置する長久保城の出城と考えられている。

その長久保城（10）は、一説に源頼朝の家臣、竹下孫八左衛門（大森）の築城と伝えられるが、『駿河記』等によれば、天文６年（1537）、北条氏綱が今川氏の築いた古墨を修復して城にしたと伝えられ、北条氏特有の築城法とされる畝堀が検出されている。

天神古城と長久保城のほぼ中間地点には、南一色城（11）が所在する。長さ約350m、幅約130mの城域を有し、本郭、曲輪、空堀、土塁等が検出されているが、伝承、記録等がなく詳細は不明である。長久保城の出城という説と、『武徳編年集成』にいう「天神川砦」であるとする説がある。

本遺跡の南西約1.5kmに位置する平畦遺跡（12）は、六道銭と考えられる銭貨やかわらけが出土した４基の土坑を含む、合計25基の土坑、溝状遺構20基を検出し、室町時代中頃から江戸時代以前の土坑墓群と考えられている。また、南東約1.5km地点に位置する巨勢伊予守館（13）は、通称「ヨーガフチ」という久保田川を東に控えた場所にあり、『駿河志料』によると、今川氏家臣巨勢（小瀬村）伊予守が居住したとされる館であるが、遺構等の検出例はなく詳細は不明とされている。

また、本遺跡の北側約200mでは、国道246号線バイパス建設工事に伴って大平遺跡（14）が調査されている。中世から近世にかけての墳墓とされる土坑や杭列遺構が検出されており、長久保城二の丸、大水濠出土の遺物と同じ年代観を示す16世紀から17世紀の遺物が出土している。

このように、本遺跡周辺において、県内で最も古い段階の弥生時代の土器が出土していること、また、城郭を中心とした中世の遺跡が多数分布していることは、本遺跡の性格を考える上で重要である。

註１　小野真一　1970 「駿東郡長泉町南一色出土の弥生式土器」『駿豆考古』第10号

註２　弥生時代の時代区分については前期・中期・後期といった三時期区分が主流であったが、近年になり四時期区分、もしくは六時期、七時期区分などが提唱されており統一された見解はない。本報告書では、三時期区分による時代区分を用いている。

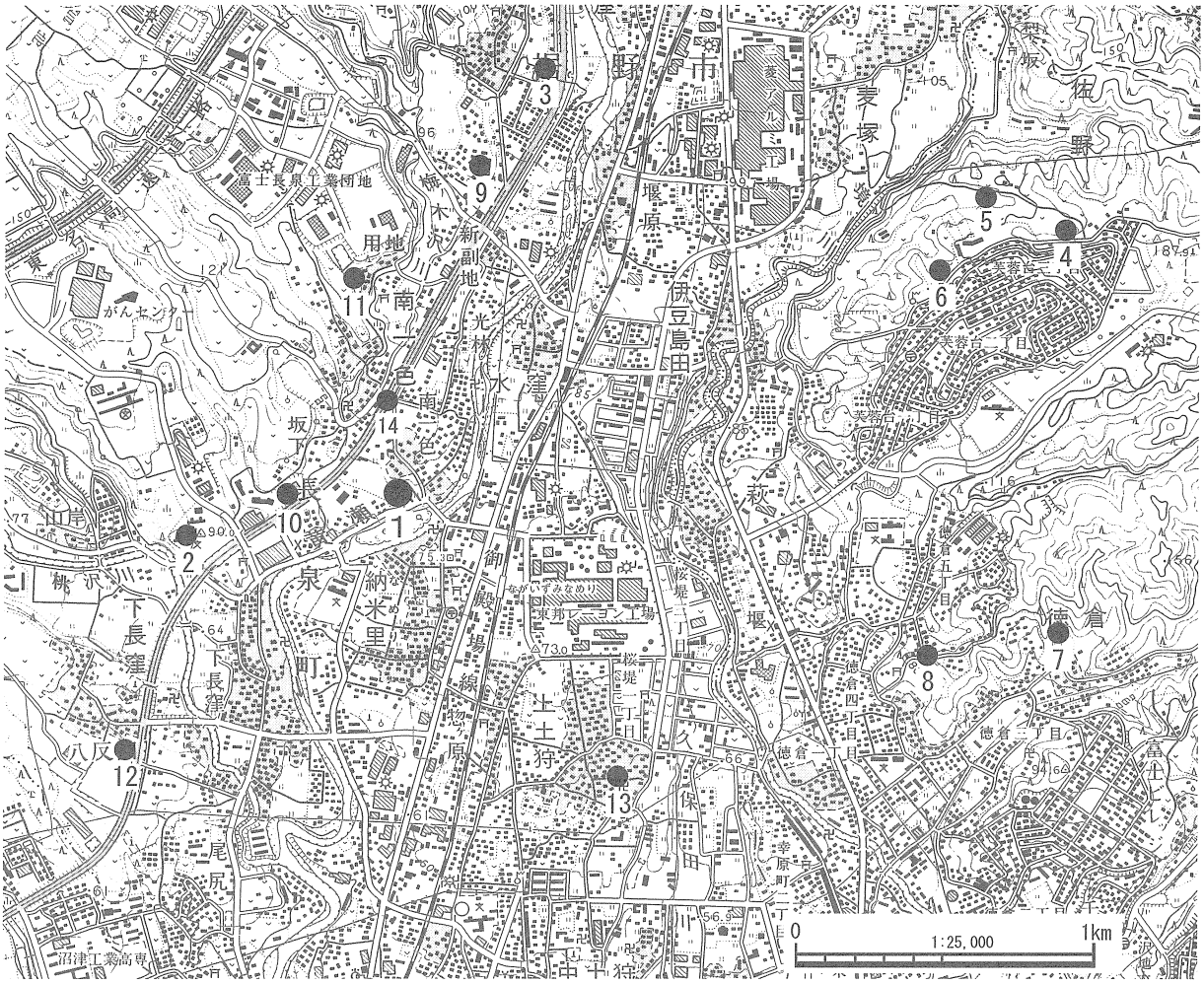


図６　周辺遺跡分布図

表４　周辺遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	種別	備　　考	番号	遺　跡　名	種別	備　　考
1	**大平遺跡**	墳墓群	平成７～８・12年調査	8	中村Ａ遺跡	散布地	
2	下長窪上野遺跡	集落	昭和47年調査	9	天神川古城	城館	消滅
3	富沢原遺跡	散布地		10	長久保城	城館	昭和49～52・56年調査
4	白陰林Ｂ遺跡	散布地		11	南一色城	城館	
5	白陰林Ｃ遺跡	散布地		12	平畦遺跡	墳墓群	昭和49年調査
6	白陰林Ｄ遺跡	散布地		13	巨勢伊予守館	城館	
7	反畑Ｅ遺跡	散布地		14	大平遺跡(246バイパス)	散布地	昭和55年調査

参考文献

佐藤民雄・小野真一・笹津海祥・山田繁治・秋本真澄　1979 『下長久保上野遺跡』 長泉町教育委員会

佐野暢彦・水上綾子　2001 『大平遺跡Ⅱ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県教育委員会文化課　1988 『静岡県文化財地図Ⅰ』『静岡県文化財地名表Ⅰ』 静岡県教育委員会

鈴木　譲　1988 『大平遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

田中琢・佐原真（編）　2002 『日本考古学事典』

渡瀬治・袴田稔・井上輝夫編　1989 『富沢原・千福馬場添・大畑・桃園入ノ洞』 裾野市教育委員会

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　土層について

１　基本土層について

大平遺跡第Ⅲ期調査の基本土層は、第Ⅰ期現地調査において２－１区の土層を標準として設定された基本土層に準じている。比較的堆積状態が良好であった１－１区を標準として、第Ⅰ期現地調査時のデータと比較、検討し、第Ⅰ期現地調査の基本土層に相当すると考えられるⅠ層からⅦ層について、同様のローマ数字を付した。また、２－２区で新たに検出された土層についてはⅧ層からとした。

以下に基本土層について記す。

第Ⅰ層	黒褐色土	水田耕作土。
第Ⅱ層	灰色粘土	水田耕作土。
第Ⅲ層	鈍い褐色土	鉄分を多く含み、場所によっては赤褐色を帯びる。遺物包含層。
第Ⅳ層	暗褐色土	粘性がややある。砂礫をわずかに含む。遺物包含層。
第Ⅴ層	黒褐色土	砂礫を多く含む。橙色スコリアを多く含む。水田耕作の痕跡あり。
第Ⅵ層	黒色土	砂礫を多く含む。粘性が強い箇所がある。色調によりⅥa，Ⅵbに細分される。遺物包含層。
第Ⅶ層	鈍い褐色砂質土	砂礫を多く含む。遺物包含層。
第Ⅷ層	鈍い黄褐色砂	シルト化したⅦ層が浸潤する箇所あり。弥生時代の遺物包含層。
第Ⅸ層	鈍い褐色土砂	円磨度が高い砂層。
第Ⅹ層	灰褐色砂	シルト質。酸化し褐色が強い。

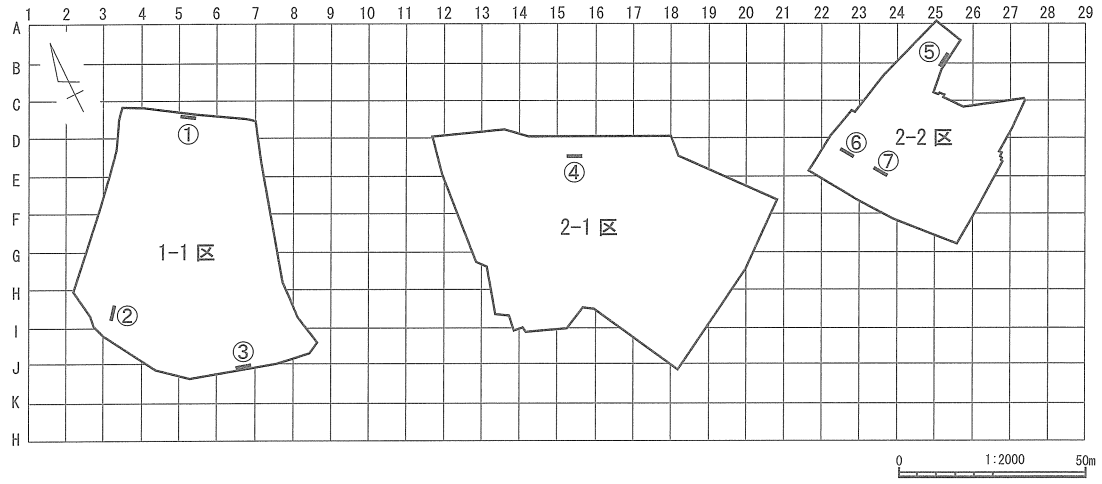
２　各区の土層について

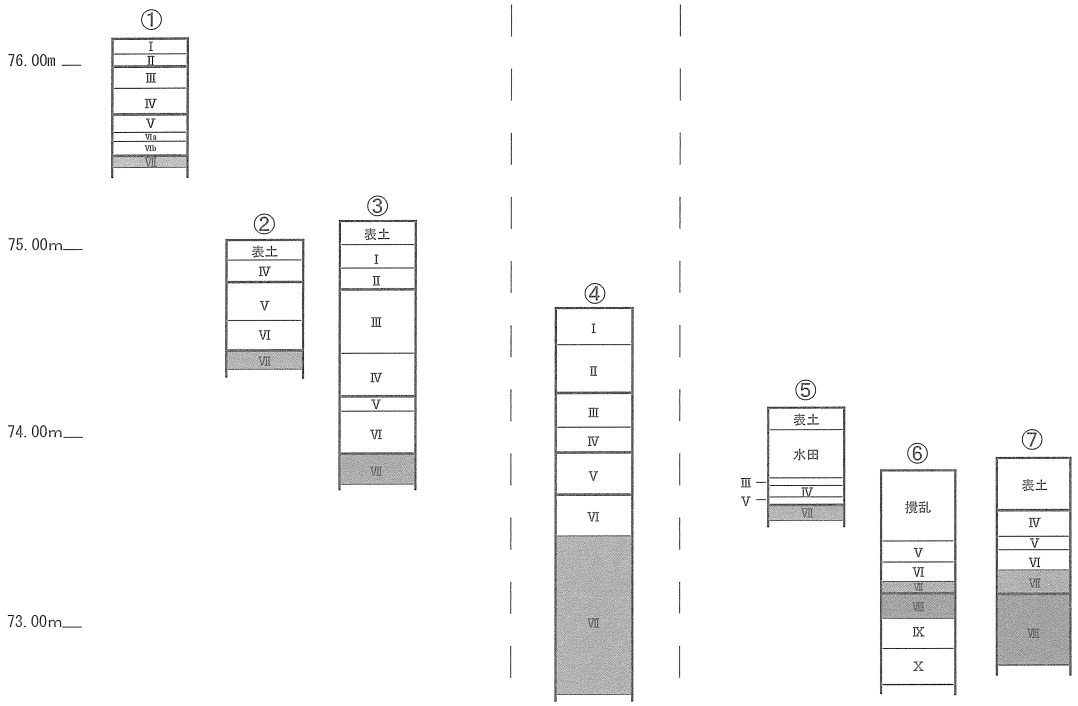
１－１区は、調査区の西側約１／４が削平により攪乱されていた。それ以外の地点では、概ね標準土層が良好な状態で堆積する様子が確認できた。調査区のＤ－６、Ｆ－４、Ｊ－５・６、Ｉ－６グリッド付近では、Ｖ層中に褐鉄鉱が集積する水田耕作の痕跡を示す土層が確認された（註１）。また、調査区の一部では、Ⅶ層中にも耕作の痕跡が認められた。Ⅳ層中において、砂礫を多量に含む再堆積層が認められたため、これをⅣａ層とし、標準のⅣ層をⅣｂ層として２分した箇所がある。Ⅶ層の上面では、径が１ｍを超える大型の礫が多数検出され、また、調査区の中央を南北に流れる旧河川が検出された。

２－２区は、近現代において調査区の広範囲が削平されており、Ⅰ層は確認できず、Ⅱ層、Ⅲ層の検出も調査区の一部に限られており、残存していた層のほとんどがⅣ層以下である。Ⅶ層上面に大型の礫は認められず、代わりに調査区の広範囲に渡って、Ⅶ層下部に粒子の粗い砂層と細かい砂層、シルトが互層を成して堆積しており、旧河川が流れを変えながら標準土層が形成されていく様子が確認された。

調査区の中央部南側においては、弥生時代前期末の条痕文系土器を包含する層が検出されⅧ層としたが、旧河川による浸食の影響で調査区の一部に認められたのみであった。

註１　静岡大学名誉教授　加藤芳郎氏のご教示による。





『大平遺跡』より

遺構検出面
中・近世遺物包含層
中世遺物包含層・遺構検出面
弥生時代遺物包含層

図7　土層柱状図

第２節　１－１区の遺構と遺物について

１　中世から近世の遺構

１－１区では旧河川、溝状遺構、土坑、小穴、不明遺構が検出された。以下検出層位ごとに報告する。

（１）Ⅲ層検出の遺構（図９）

Ⅲ層で検出された遺構は溝状遺構１条である。

溝状遺構

ＳＤ001（図８）

ＳＤ001は、Ｉ－３・Ｉ－４・Ｊ－４・Ｊ－５・Ｊ－６グリッドで検出された。検出された規模は長さ31.7m、幅0.52m、検出面から底面までの深さ0.15mを計る。遺物は近世碗（Ｐ139)、志野丸皿（Ｐ141)、古瀬戸平碗（Ｐ143)、瀬戸美濃大窯４丸碗（Ｐ176)、貿易陶磁染付碗（Ｐ177)、古瀬戸縁釉小皿（Ｐ178）などが出土している。用途は不明である。

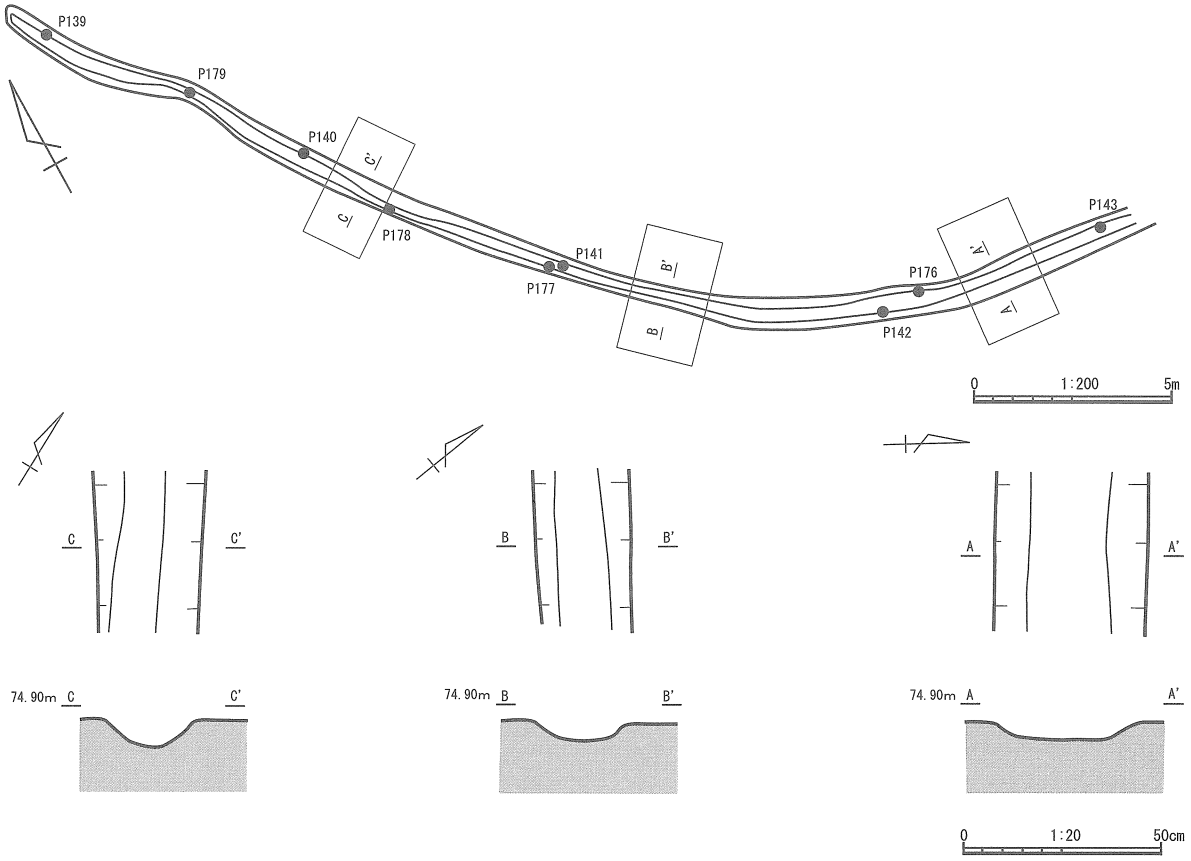


図８　１－１区 溝状遺構　実測図

表５　１－１区 Ⅲ層 溝状遺構（ＳＤ）計測表

遺構名	区	グリッド	層位	断面形態	覆土	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺　物	時期	備　考
ＳＤ001	1-1	I-3・I-4 J-4・J-5 J-6	Ⅲ	逆台形	Ⅱ	31.7	0.52	0.15	近世(139)・志野丸皿(141) 古瀬戸平碗(143)瀬戸美濃 大窯４丸碗(176)貿易陶磁 染付碗(177)縁釉小皿(178)	中・近世	

※(　)内の数値は遺物番号。Ｐは省略。

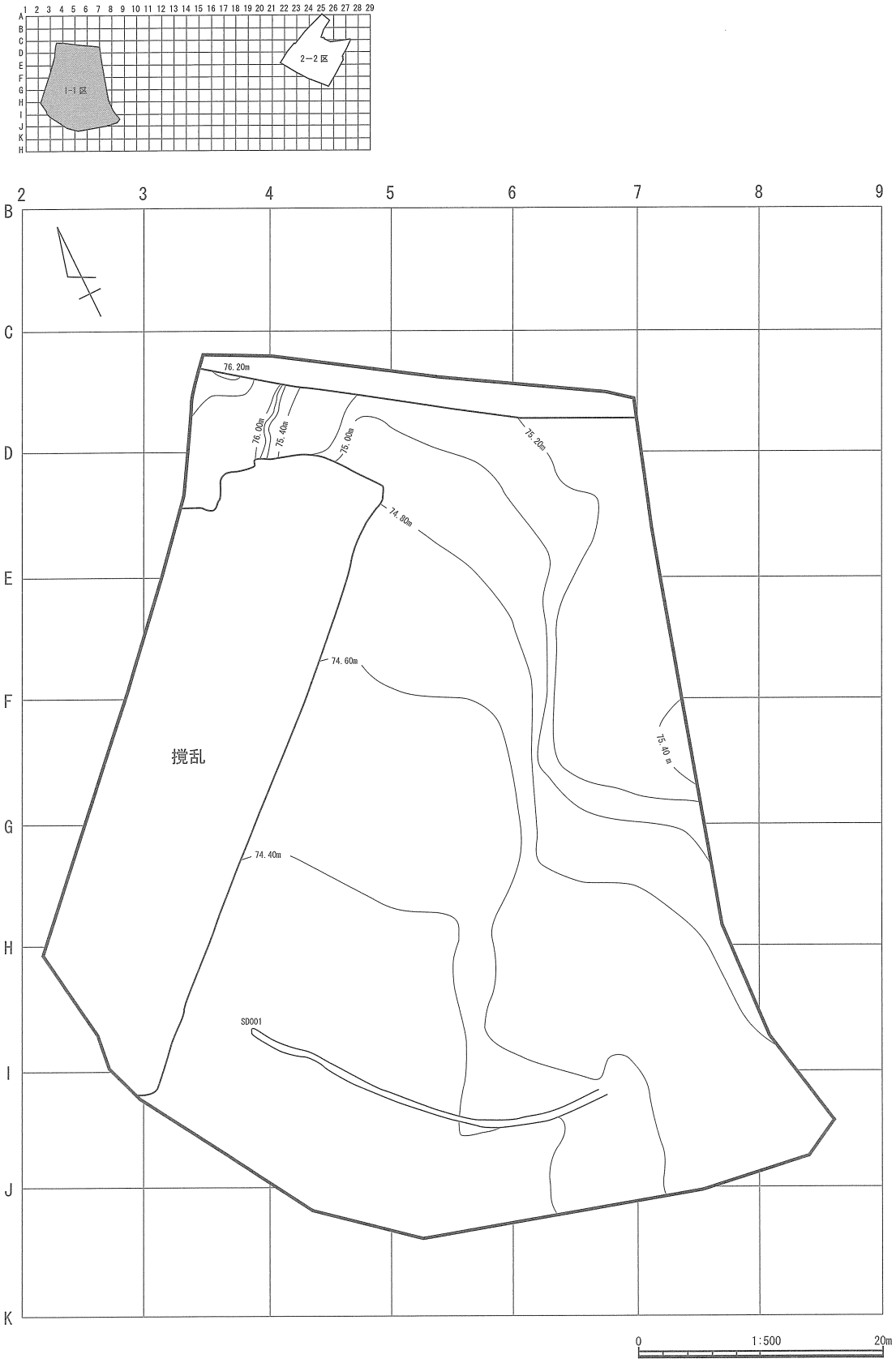


図9　1－1区 Ⅲ層 遺構分布図

（２）Ｖ層検出の遺構（図10）

Ｖ層で検出された遺構は、土坑36基、小穴６基である。

①　土坑

大平遺跡では過去の２回にわたる調査において数多くの集石土坑が検出された。主に骨、銭貨、かわらけ等の遺物が出土した集石土坑を墓と認定しているが、遺物が出土しなかった集石土坑についても、形態の比較、検討から集石墓と認定し報告されたものがある。

今回の調査において検出された土坑については、遺物を伴うものがごくわずかであり、個々の遺構について墓と断定することは困難であったが、過去の調査の成果を参考に墓か否かを判断することとした。

ＳＦ101・ＳＦ105（図11）

ＳＦ101はＪ－５・Ｊ－６グリッドで検出された。規模は長径2.72m、短径2.50mを計る。平面形は円形である。土坑中央に大型の礫が認められる。礫は人為的に配置されたものではなく、礫の下部については地山層に食い込んだ状態で検出された。大型の礫の上面は人為的に割られており、その割石が土坑内に充填されている。また、破砕礫とは考えられない自然礫も数多く認められる。遺物はかわらけが１点出土している。

ＳＦ105はＩ－６グリッドで検出された。規模は長径1.59m、短径1.56m、検出面から底面までの深さは0.30mを計る。平面形は円形である。ＳＦ101と同様の形態の集石土坑である。本遺構からは時期、用途不明の鉄片が出土している。

ＳＦ101・ＳＦ105ともに時期、性格について断定はできないが、同様の遺構は、第Ｉ期現地調査時の２－１区でも検出され中世の集石墓として報告がなされている（註１）。しかし、今回検出された土坑については、礫の充填方法と覆土に相違点が認められ、近世に下る可能性を指摘しておきたい。本遺跡は近世以降農地として利用されていたことが文献から明らかになっていることから（註２）、農地として利用する際に耕作面に突出する大型の礫の上部を割ることで平らな耕作面を作り出し、割石と周辺の自然礫を併せて土坑内に廃棄した可能性がある。

ＳＦ102・ＳＦ113（図11）

ＳＦ102はＨ－５グリッドで検出された。長径1.25m、短径1.09m、検出面から底面までの深さ0.53mを計る円形の土坑である。

ＳＦ113はＨ－６グリッドで検出された。規模は長径1.10m、短径0.93m、検出面から底面までの深さは0.51mである。平面形は円形である。

ＳＦ102・ＳＦ113ともに遺物が出土していないため時期、性格について断定はできない。

ＳＦ103・ＳＦ106・ＳＦ114（図12）

ＳＦ103はＨ－５グリッドで検出された。規模は長径1.66m、短径1.40m、検出面から底面までの深さは0.32mを計る。平面形はやや不整な方形である。覆土に割石を含む。少破片のため図示できなかったが、羽釜Ａ類が１点（写真図版11－７）出土した。

ＳＦ106はＩ－６グリッドで検出された。規模は長径1.09m、短径0.93m、検出面から底面までの深さは0.34mを計る。平面形は楕円形である。覆土に割石と炭化物が認められた。土坑の北側に大型の自然礫が認められる。

ＳＦ114はＨ－６グリッドで検出された。規模は長径1.40m、短径1.10m、検出面から底面までの深

さは0.34mを計る。平面形は楕円形である。覆土に割石を含む。

これらの土坑については検出状況、形態から墓の可能性が高いと判断した。

ＳＦ104・108（図13）

ＳＦ104はＨ－６グリッドで検出された。規模は長径0.84m、短径0.60m、検出面から底面までの深さは0.30mを計る。平面形は楕円形である。大型の礫を配し周辺に小型の礫を充填している。

ＳＦ108はＤ－４グリッドで検出された。規模は長径1.47m、短径0.95m、検出面から底面の深さ0.47mを計る大型の土坑である。平面形は楕円形である。土坑の中央に大型の礫を配し、周辺に礫を充填している。遺物は出土していない。

これらの土坑については検出状況、形態から墓の可能性が高いと判断した。

ＳＦ119・ＳＦ118・ＳＦ124・ＳＦ126（図14）

ＳＦ119はＩ－６グリッドで検出された。規模は長径1.21m、短径0.84m、検出面から底面までの深さは0.33mを計る。平面形は長楕円形を呈する。土坑の西側に大型の自然礫が認められる。遺物は出土していない。

ＳＦ118はＪ－６グリッドで検出された。規模は長径0.99m、短径0.80m、検出面から底面までの深さは0.28mを計る。平面形はやや不整な楕円形を呈する。土坑の西側に大型の自然礫が認められる。遺物は出土していない。

ＳＦ124、ＳＦ126はＪ－７グリッドで検出された。ＳＦ124の規模は、長径0.78m、短径0.77m、検出面から底面までの深さは約0.17m、平面形は円形である。

ＳＦ126の規模は長径が推定で１m、短径0.66m、検出面から底面までの深さは0.30mを計り、平面形は長楕円形を呈する。ＳＦ124がＳＦ126を切っていることからＳＦ126の方が先に掘られたことがわかる。

いずれの土坑にも大型の自然礫が認められる。遺物は出土していないが、検出状況、形態から墓の可能性が高いと判断した。

ＳＦ107・ＳＦ111・ＳＦ116・ＳＦ127（図14）

ＳＦ111は平面形がやや不正の円形を呈する土坑で、規模は、長径0.75m、短径0.69m、検出面から底面までの深さは0.22mである。

ＳＦ107、ＳＦ116・ＳＦ127はいずれも平面形が楕円形を呈する。ＳＦ107の規模は長径0.99m、短径0.68m、検出面から底面までの深さが0.28mである。ＳＦ116の規模は長径0.91m、短径0.54m、検出面から底面までの深さが0.15mである。ＳＦ127の規模は長径0.81m、短径0.59m、検出面から底面までの深さが0.35mである。

いずれの土坑からも遺物は出土しておらず、時期、性格等については不明である。

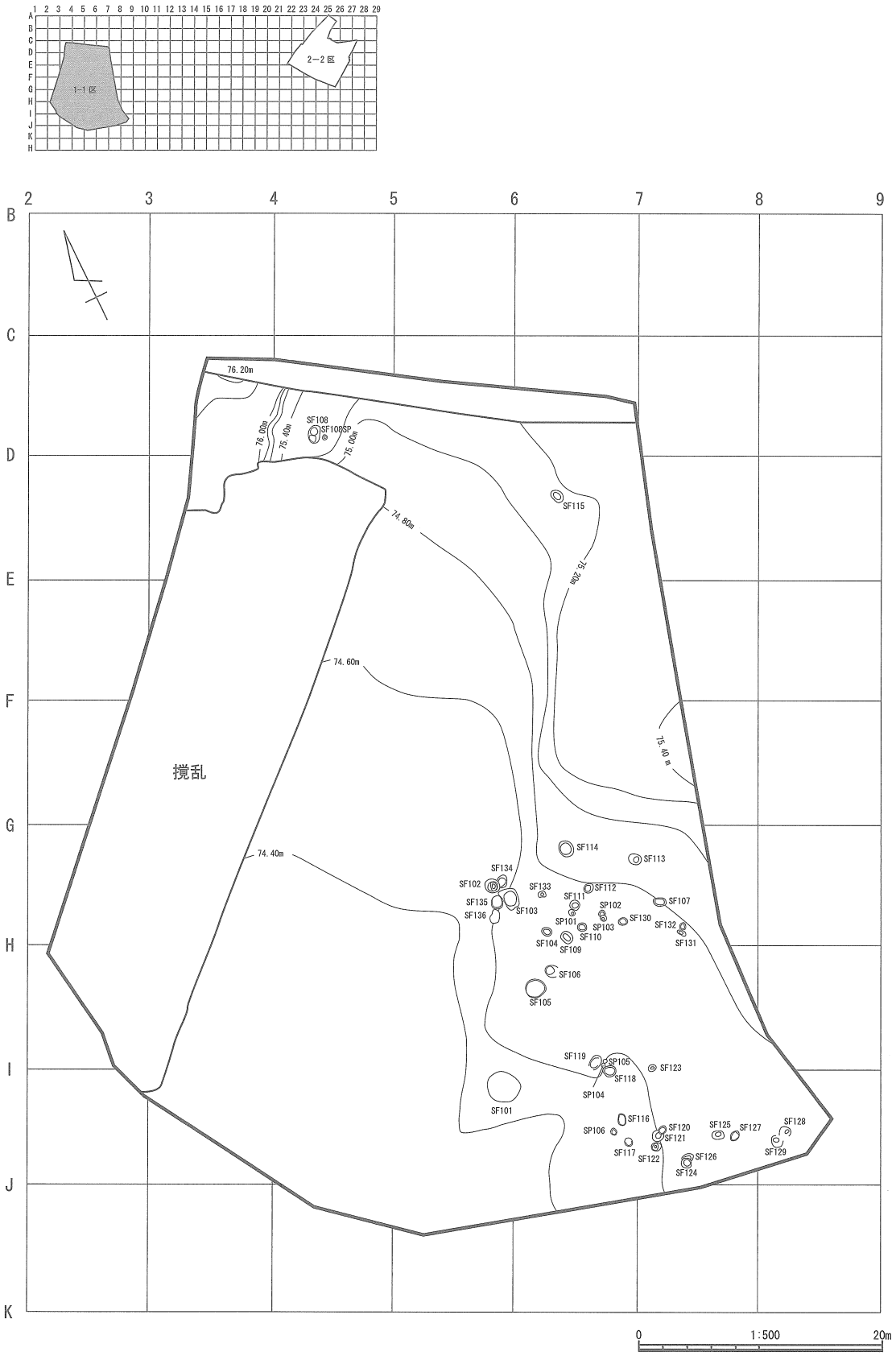
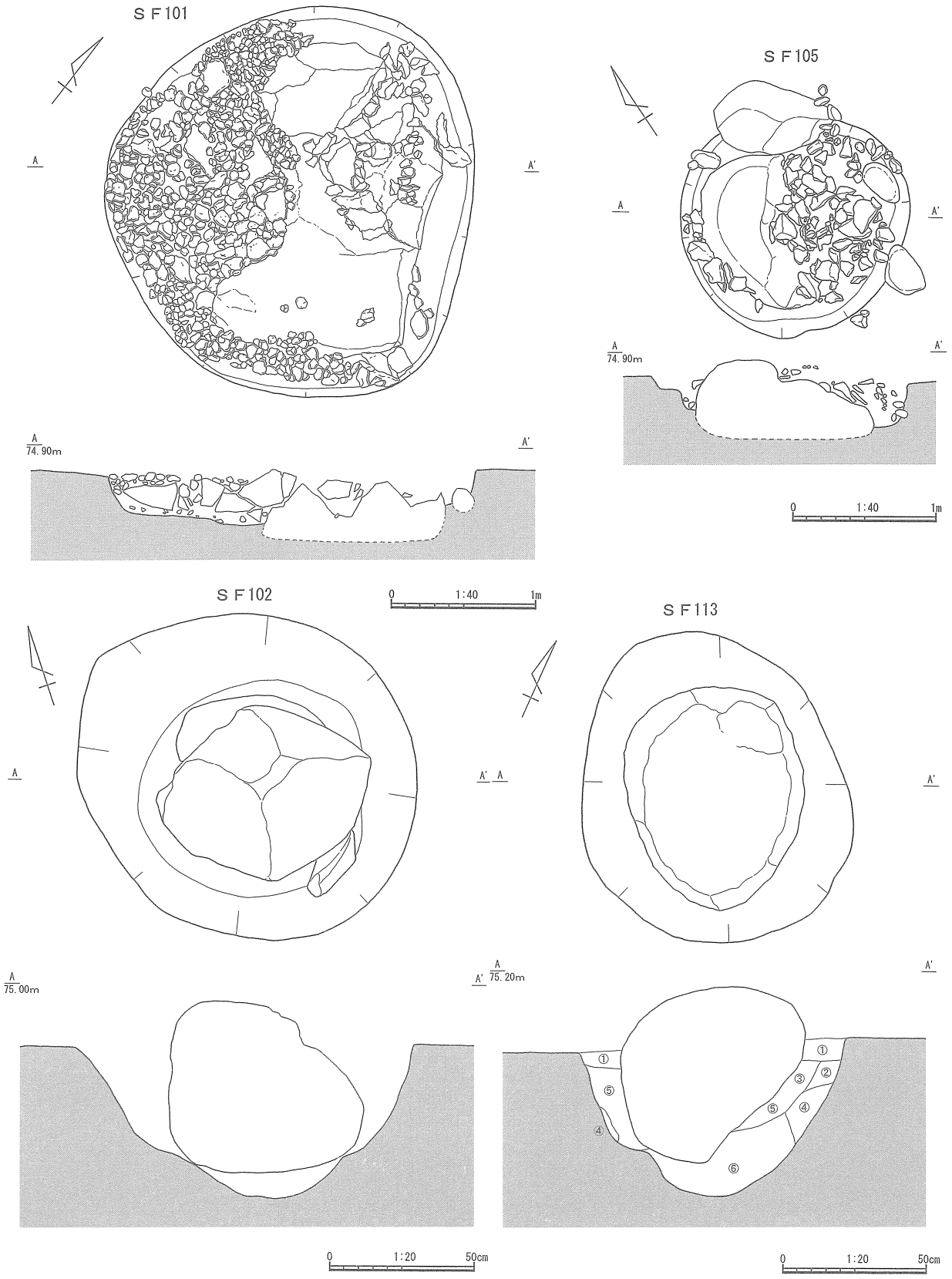


図10　1－1区 V層 遺構分布図



①黒褐色土（10YR 3/1）　ややシルト質・Ⅶ層を主体にⅤ層が混じる
②黒色土（10YR 2/1）　しまりあり・Ⅴ層主体・黄褐色パミス含む
③黒色土（10YR 2/1）　②層に類似・しまりなし
④黒色土（10YR 2/1）　②に類似・黄褐色パミスが大きい黒褐色
⑤黒褐色土（10YR 3/1）　しまり強い
⑥黒褐色土（10YR 2/2）　しまり強い・黄褐色パミス含む

図11　1－1区 Ⅴ層 土坑実測図（1）

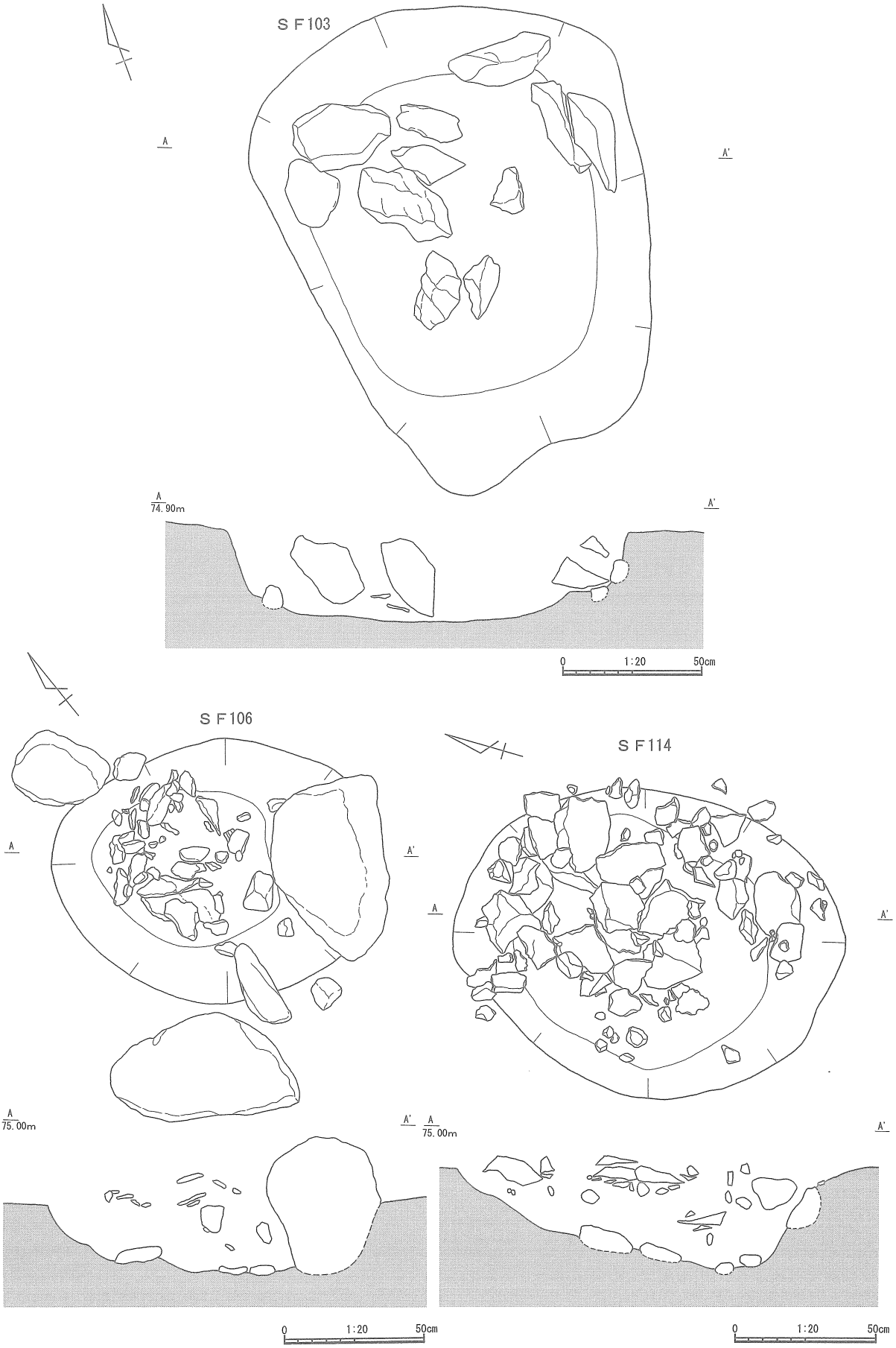
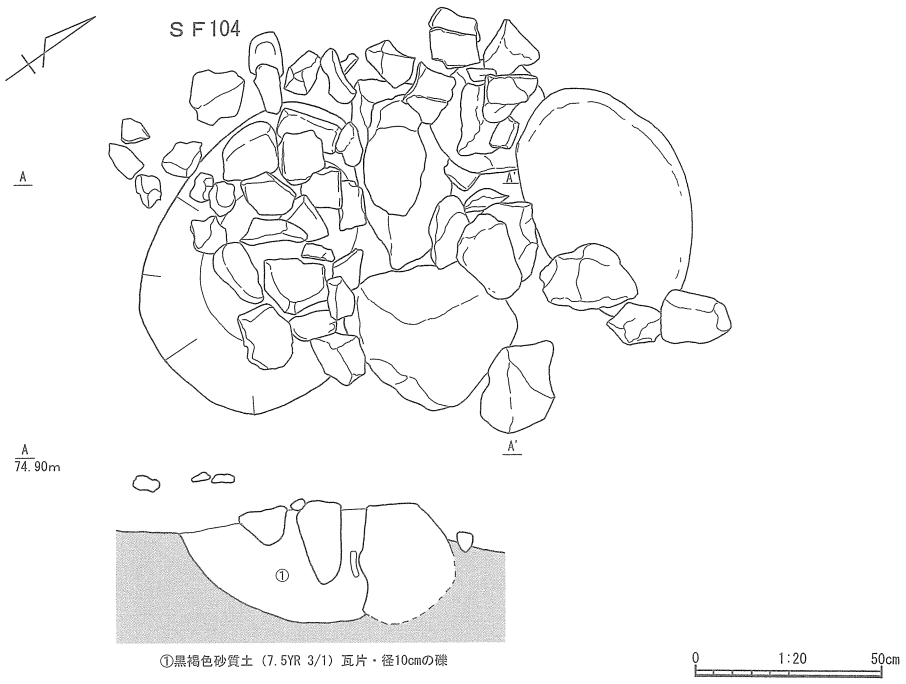


図12　1－1区 V層 土坑実測図（2）



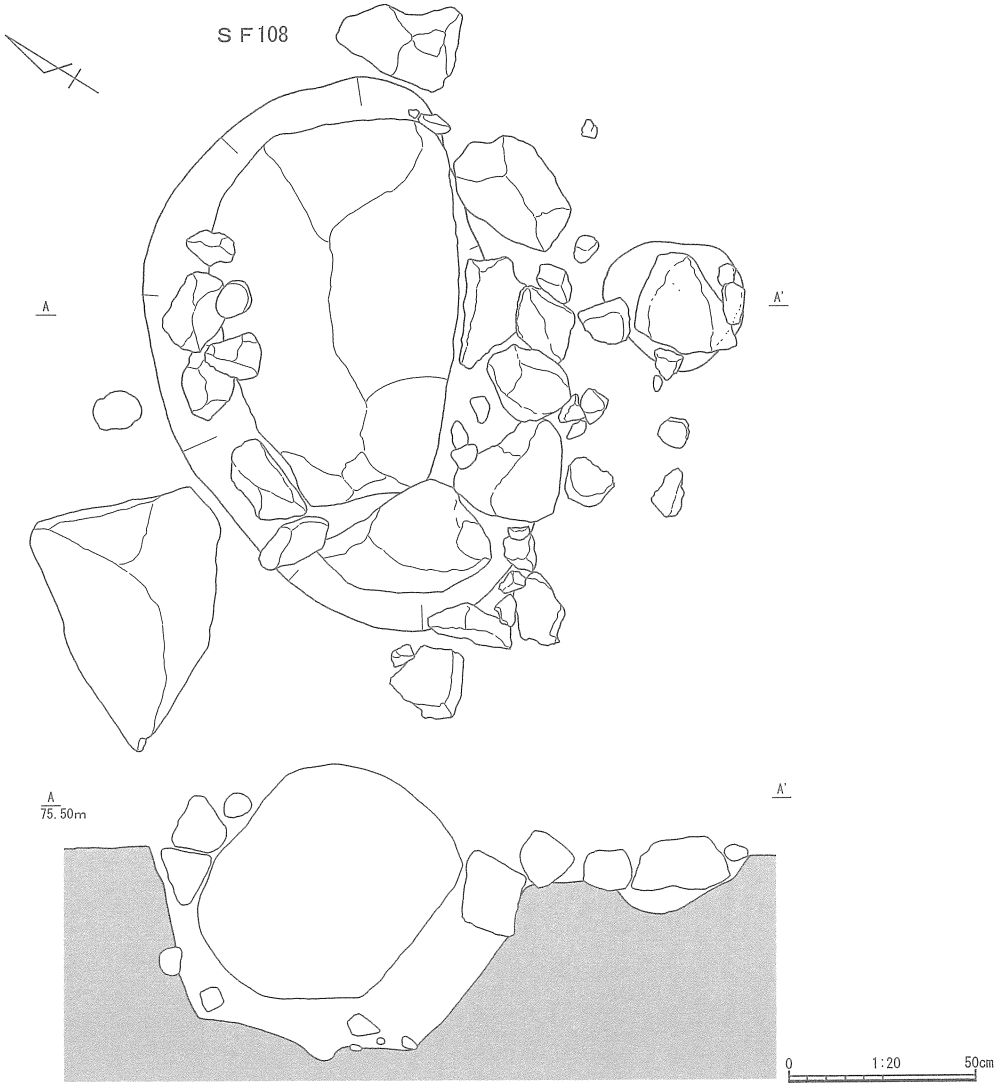


図13　１－１区 Ｖ層 土坑実測図（３）

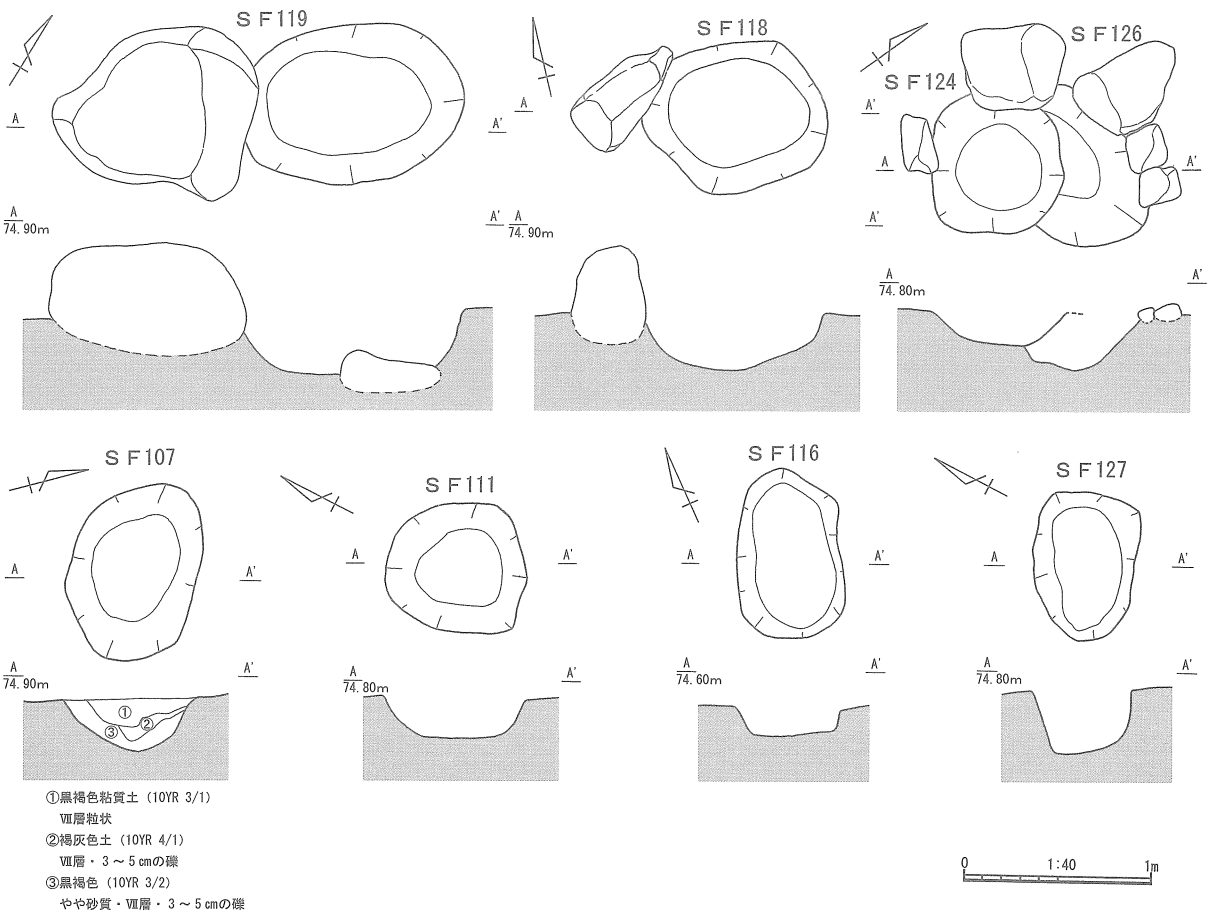


図14　１－１区 Ｖ層 土坑実測図（４）

表６　１－１区 Ｖ層 土坑（ＳＦ）計測表

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	時期	形態	備考
11	2－2	ＳＦ101	1－1	Ｊ－5・6	Ⅴ	円形	ぼさぼさの黒土	2.72	2.50	0.26	かわらけ（271）	中・近世	Ａ－2	
11		ＳＦ102	1－1	Ｈ－5	Ⅴ	円形	ぼさぼさの黒土	1.25	1.09	0.53		中・近世	Ａ－1	
12		ＳＦ103	1－1	Ｈ－5	Ⅴ	方形	Ⅲ層	1.66	1.40	0.32	羽釜（800）	中・近世	Ｂ	
13	3－2	ＳＦ104	1－1	Ｈ－6	Ⅴ	楕円形	黒褐色土	0.84	0.60	0.30	瓦　（256）	中・近世	Ａ－2	
11	3－1	ＳＦ105	1－1	Ｉ－6	Ⅴ	円形	Ⅴ層	1.59	1.56	0.30	鉄片	中・近世	Ａ－2	
12	4－2	ＳＦ106	1－1	Ｉ－6	Ⅴ	楕円形	Ⅴ層	1.09	0.93	0.34	炭化物	中・近世	Ｂ	
14		ＳＦ107	1－1	Ｈ－7	Ⅴ	楕円形	Ⅴ層	0.99	0.68	0.28		中・近世	Ｄ－2	
13	4－1	ＳＦ108	1－1	Ｄ－4	Ⅴ	楕円形	ぼさぼさの黒土	1.47	0.95	0.47		中・近世	Ａ－2	
		ＳＦ109	1－1	Ｈ－6	Ⅴ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	1.06	0.78	0.18		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ110	1－1	Ｈ－6	Ⅴ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.73	0.67	0.19		中・近世	Ｄ－2	
14		ＳＦ111	1－1	Ｈ－6	Ⅴ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.75	0.69	0.22		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ112	1－1	Ｈ－6	Ⅴ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.77	0.73	0.19		中・近世	Ｄ－2	
11		ＳＦ113	1－1	Ｈ－6	Ⅴ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	1.10	0.93	0.51		中・近世	Ａ－1	
12	4－4	ＳＦ114	1－1	Ｈ－6	Ⅴ	楕円形	Ⅴ層	1.40	1.10	0.34		中・近世	Ｂ	
		ＳＦ115	1－1	Ｅ－6	Ⅴ	長楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	1.13	0.74	0.28		中・近世	Ｄ－2	
14		ＳＦ116	1－1	Ｊ－6	Ⅴ	長楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.91	0.54	0.15		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ117	1－1	Ｊ－6	Ⅴ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.68	0.56	0.36		中・近世	Ｅ	
14		ＳＦ118	1－1	Ｊ－6	Ⅴ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.99	0.80	0.28		中・近世	Ｅ	
14		ＳＦ119	1－1	Ｉ－6	Ⅴ	長楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	1.21	0.84	0.33		中・近世	Ｅ	
		ＳＦ120	1－1	Ｊ－7	Ⅴ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.66	0.52	0.30		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ121	1－1	Ｊ－7	Ⅴ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	(0.82)	0.87	0.30		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ122	1－1	Ｊ－7	Ⅴ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.82	0.60	0.27		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ123	1－1	Ｉ・Ｊ－7	Ⅴ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.60	0.47	0.09		中・近世	Ｄ－2	
14		ＳＦ124	1－1	Ｊ－7	Ⅴ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.78	0.77	0.17		中・近世	Ｅ	
		ＳＦ125	1－1	Ｊ－7	Ⅴ	長楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.97	0.63	0.25		中・近世	Ｅ	
14		ＳＦ126	1－1	Ｊ－7	Ⅴ	長楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	(1.0)	0.66	0.30		中・近世	Ｅ	
14		ＳＦ127	1－1	Ｊ－7	Ⅴ	長楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.81	0.59	0.35		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ128	1－1	Ｊ－8	Ⅴ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	1.02	0.70	0.37		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ129	1－1	Ｊ－8	Ⅴ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	1.03	(0.92)	0.31		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ130	1－1	Ｈ－6	Ⅴ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.71	0.56	0.13		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ131	1－1	Ｈ－7	Ⅴ	長楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.70	0.28	0.22		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ132	1－1	Ｈ－7	Ⅴ	不整円	Ⅲ・Ⅴ層	0.58	0.47	0.19		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ133	1－1	Ｈ－6	Ⅴ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.61	0.44	0.19		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ134	1－1	Ｈ－5	Ⅴ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	1.04	0.83	0.10		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ135	1－1	Ｈ－5	Ⅴ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	1.08	0.94	0.10		中・近世	Ｄ－2	
		ＳＦ136	1－1	Ｈ－5	Ⅴ	長楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	1.06	0.68	0.04		中・近世	Ｄ－2	

② 小穴

ＳＰ101・ＳＰ102・ＳＰ103・ＳＰ104・ＳＰ105・ＳＰ106（図15）

ＳＰ101・ＳＰ102・ＳＰ103はいずれもＨ－６グリッドで検出された楕円形を呈する小穴である。ＳＰ101の規模は、長径0.5m、短径0.37m、検出面から底面までの深さが0.8mである。

ＳＰ102とＳＰ103に切り合いが認められＳＰ102がＳＰ103を切る。ＳＰ102の規模が長径0.52m、短径0.43m、検出面から底面までの深さが0.19m。ＳＰ103の規模が長径0.46m、短径0.43m、検出面から底面までの深さが0.16mである。

ＳＰ104とＳＰ105はＩ－６グリッドで検出された円形を呈する小穴である。規模はＳＰ104が長径0.39m、短径0.34m、検出面から底面までの深さが0.12m。ＳＰ105が長径0.33m、短径0.31m、検出面から底面までの深さが0.15mである。ＳＰ104とＳＰ105の周辺には大型の自然礫が認められた。

ＳＰ106はＪ－６グリッドで検出された円形を呈する小穴である、規模は長径0.51m、短径0.42m、検出面から底面までの深さが0.11mである。

いずれの小穴からも遺物は出土しておらず時期、性格は不明である。

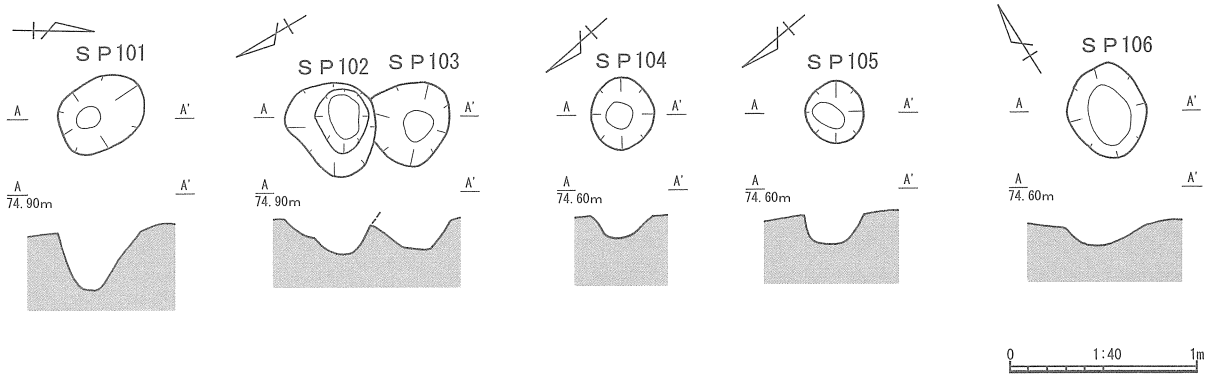


図15　１－１区 Ｖ層 小穴実測図

表７　１－１区 Ｖ層 小穴（ＳＰ）計測表

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	時期	備考
15		ＳＰ101	１－１	Ｈ－６	Ｖ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.50	0.37	0.8		中・近世	
15		ＳＰ102	１－１	Ｈ－６	Ｖ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.52	0.43	0.19		中・近世	
15		ＳＰ103	１－１	Ｈ－６	Ｖ	楕円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.46	(0.43)	0.16		中・近世	
15		ＳＰ104	１－１	Ｉ－６	Ｖ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.39	0.34	0.12		中・近世	近くに大型の礫
15		ＳＰ105	１－１	Ｉ－６	Ｖ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.33	0.31	0.15		中・近世	近くに大型の礫
15		ＳＰ106	１－１	Ｊ－６	Ｖ	円形	Ⅲ・Ⅴ層	0.51	0.42	0.11		中・近世	

註１・２　鈴木　譲　1998『大平遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　12～14、39～81頁

（３）Ⅶ層検出の遺構（図16）

Ⅶ層で検出された遺構は旧河川１基、土坑83基、小穴14基、不明遺構２基である。

① 旧河川

ＳＲ01

ＳＲ01は調査区の中央やや西側を、北東から南西に向かって流れる旧河川である。検出された規模は長さ63.10m、最大幅8.00m。検出面から底面までの最大の深さは0.72mである。Ⅶ層が堆積する時期の河川と考えられる。遺物は出土していない。

表８　１－１区 Ⅶ層 旧河川（ＳＲ）計測表

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	時期	備考
16		ＳＲ01	１－１		Ⅶ			63.10	8.00	0.72		不明	

② 土坑

ＳＦ222・ＳＦ223・ＳＦ224（図17）

ＳＦ222、ＳＦ223はいずれもＨ－７グリッドで検出された。ＳＦ222の規模は長径0.73m、短径0.72m、検出面から底面までの深さは0.20mを計り平面形は円形を呈する。ＳＦ223の規模は長径0.62m、短径0.59m、検出面から底面までの深さは0.20mを測る。平面形は円形を呈する。いずれも覆土に10cmから20cmの破砕した礫を含む。遺物は出土していない。ＳＦ222・ＳＦ223ともに、検出状況、形態から墓の可能性が高いと判断した。

ＳＦ224はＦ－５グリッドで検出された。規模は長径0.86m、短径0.50m、検出面から底面までの深さ0.17mの大型の土坑で、平面形は長楕円形を呈している。覆土の上層に破砕礫が充填されている。遺物は出土していない。検出状況、形態から墓の可能性が高い。

ＳＦ260・ＳＦ272・ＳＦ249・ＳＦ267・ＳＦ250・ＳＦ210・ＳＦ244・ＳＦ282・ＳＦ226（図18）

いずれも大型の自然礫の近くに掘られた土坑である。各土坑の規模等については計測表を参照されたい。Ⅶ層で検出された大型の礫の間に構築された土坑については墓の可能性が高いと判断した。

ＳＦ202・ＳＦ201・ＳＦ232・ＳＦ234・ＳＦ205・ＳＦ206・ＳＦ213（図18）

ＳＦ201・ＳＦ202・ＳＦ232・ＳＦ234はいずれも径が約１ｍの円形の土坑。静岡県東部地域、愛鷹山麓の遺跡で数多くの検出例が報告されているものである。この円形土坑の性格について、近隣の平畦遺跡および国道246号線バイパス建設に伴う大平遺跡の調査では座棺を土葬するための墳墓ではないかと報告され（註１）、また、猪之頭養鱒場内遺跡では肥料や灌水用の「溜め」の施設ではないかと報告されている（註２）。本遺跡で検出された遺構についても埋葬施設と農業用施設の双方の可能性がある。

ＳＦ205・ＳＦ206・ＳＦ213はいずれもやや楕円形を呈する土坑で、覆土に径10cmから20cmの円礫を含む。いずれの土坑からも遺物は出土しておらず時期、性格について不明である。

ＳＦ259（図18）

ＳＦ259はＨ－７グリッドで検出された。規模は長径1.00m、短径0.61m、検出面から底面までの深さ0.16mを計る長楕円形の土坑である。中央から北東側の底面において焼土が検出され、また、底面の広範囲に渡って炭化物が認められた。骨片、遺物は出土しておらず時期、性格について断定はできない。類似する遺構が２－１区においても検出されている（ＳＸ21196、ＳＸ21197）が、ここでも遺物は出土しておらず、焼却施設ないしは焼却物の廃棄場所の可能性があるとしている（註３）。

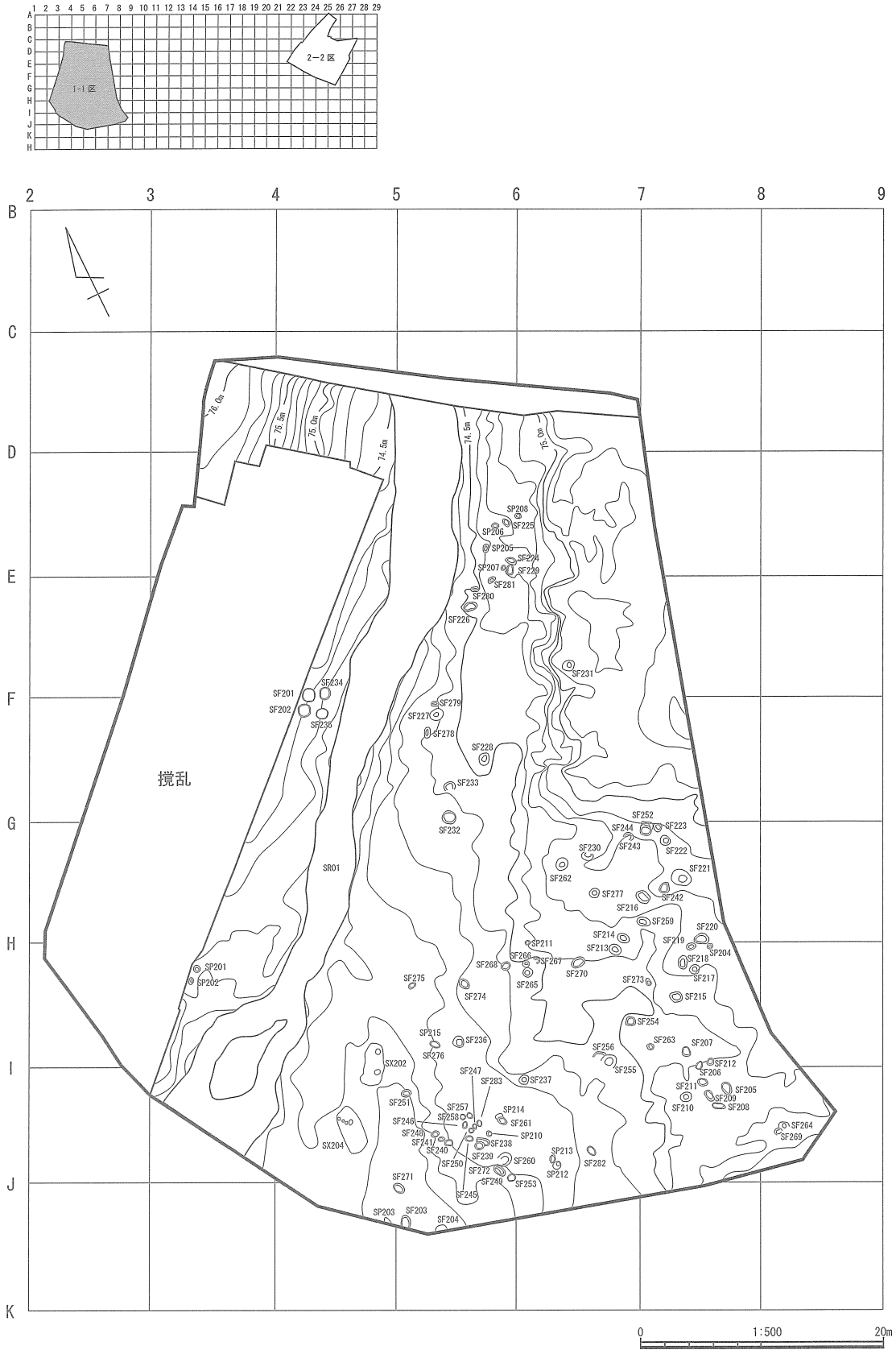


図16　1－1区 Ⅶ層 遺構分布図

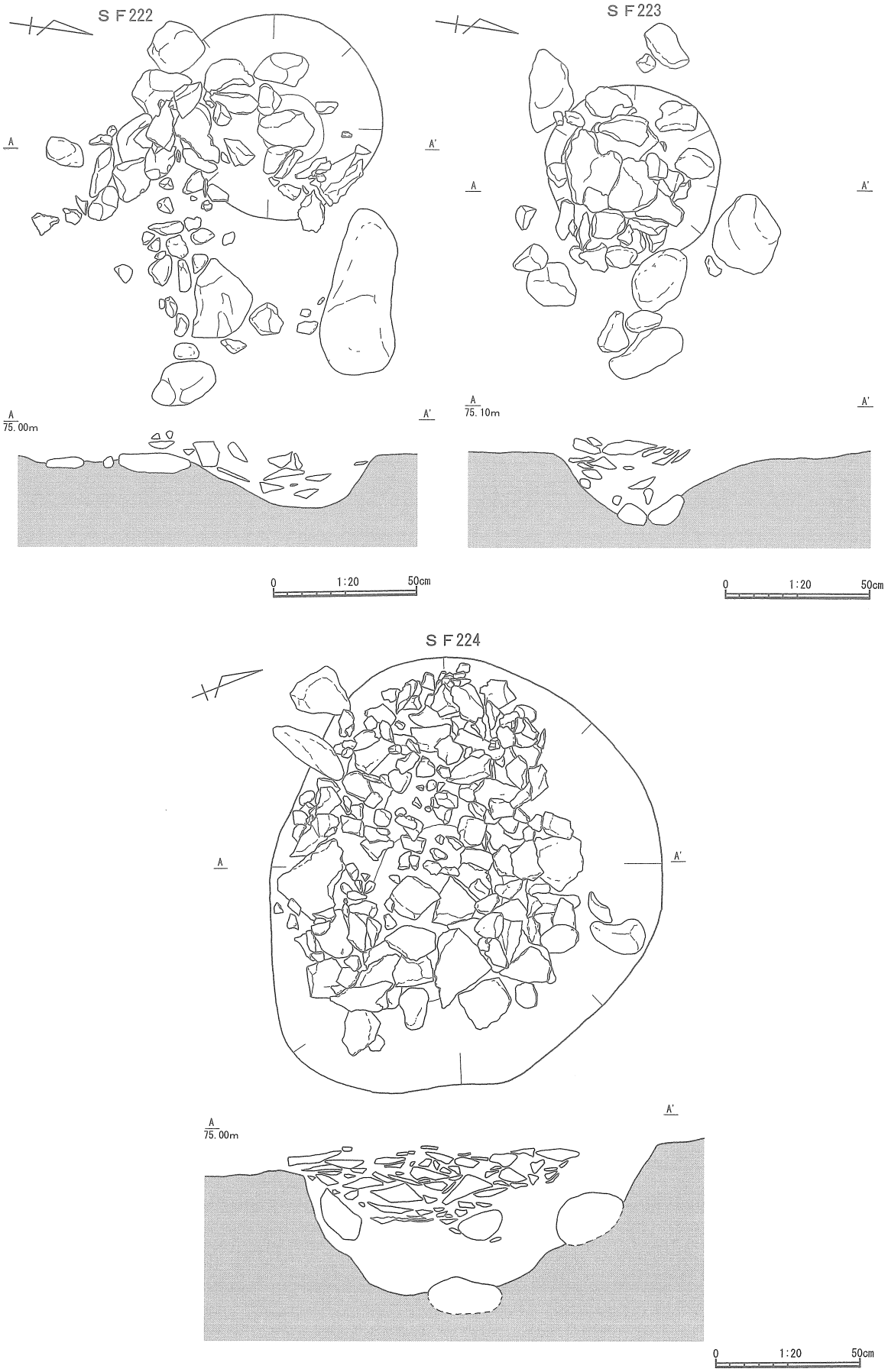


図17　1－1区 Ⅶ層 土坑実測図（1）

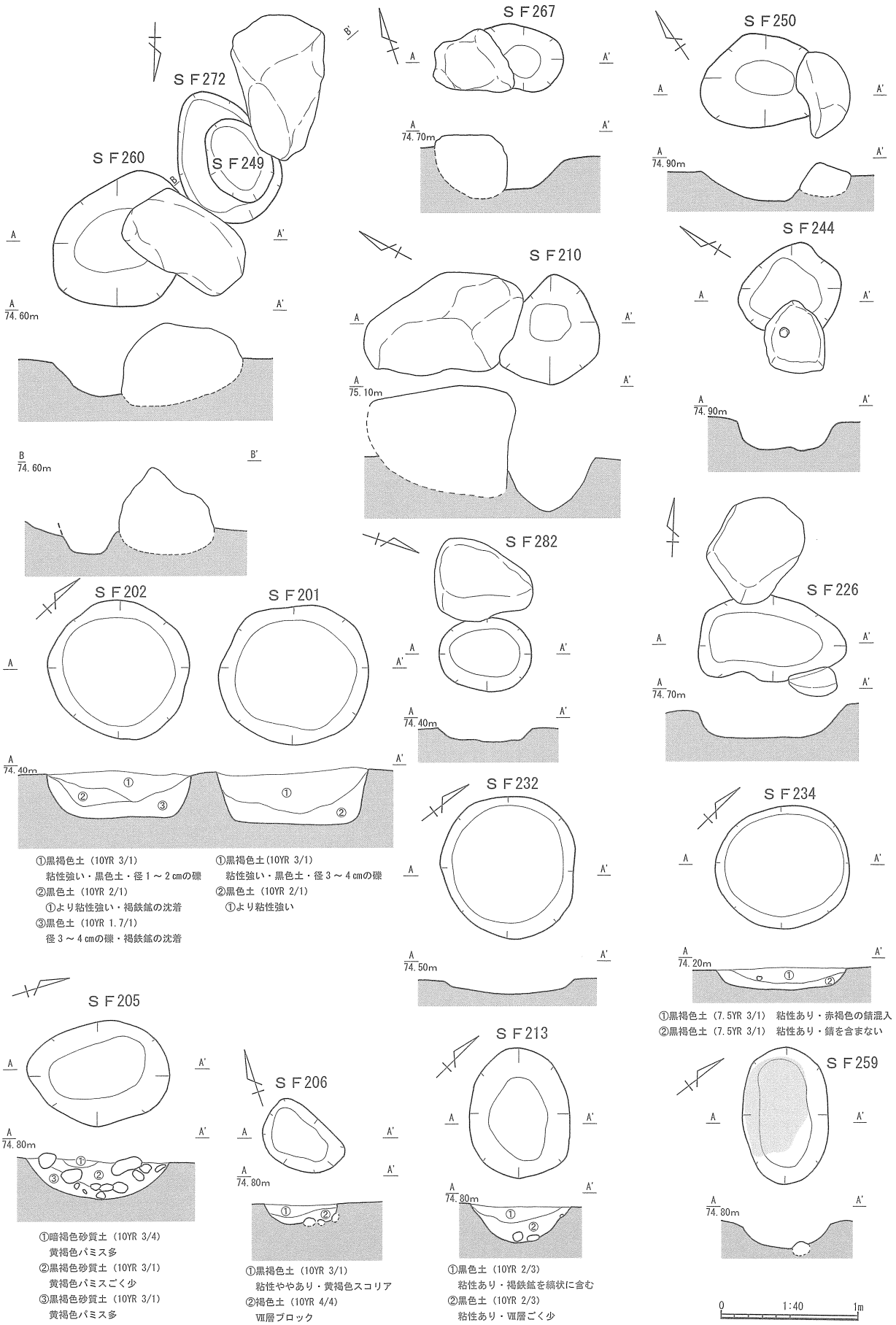


図18　1－1区 Ⅶ層 土坑実測図（2）

表9　1－1区 Ⅶ層 土坑（ＳＦ）計測表

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	時期	形態	備考
18	5－3	ＳＦ201	1－1	Ｅ・Ｆ－4	Ⅶ	円形	Ⅳ層	1.08	1.01	0.39		不明	Ｄ－1	
18	5－3	ＳＦ202	1－1	Ｇ－4	Ⅶ	円形	Ⅳ層	1.04	1.00	0.31		不明	Ｄ－1	
		ＳＦ203	1－1	Ｋ－5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ層	(0.83)	0.52	0.20		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ204	1－1	Ｋ－5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ層	(0.76)	(0.15)	(0.10)		不明	Ｄ－2	
18		ＳＦ205	1－1	Ｊ－7	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.04	0.76	0.26		中世	Ｃ	
18		ＳＦ206	1－1	Ｉ・Ｊ－7	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.62	0.41	0.13		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ207	1－1	Ｉ－7	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.75	0.63	0.21		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ208	1－1	Ｊ－7	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.81	0.39	0.11		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ209	1－1	Ｊ－7	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.94	0.66	0.18		中世	Ｄ－2	
18		ＳＦ210	1－1	Ｊ－7	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.81	0.66	0.35		中世	Ｅ	近くに大型の礫
		ＳＦ211	1－1	Ｊ－7	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.78	0.55	0.20		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ212	1－1	Ｉ－7	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.57	0.52	0.13		中世	Ｄ－2	
18		ＳＦ213	1－1	Ｉ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.94	0.72	0.25		中世	Ｃ	炭化物
		ＳＦ214	1－1	Ｈ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.96	0.72	0.26		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ215	1－1	Ｉ－7	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.96	0.78	0.31		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ216	1－1	Ｈ－7	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.24	0.81	0.13		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ217	1－1	Ｉ－7	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.79	0.75	0.26		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ218	1－1	Ｉ－7	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.09	0.62	0.24		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ219	1－1	Ｉ－7	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.63	0.50	0.20		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ220	1－1	Ｈ－7	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.34	0.74	0.24		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ221	1－1	Ｈ－7	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.51	1.30	0.46	砥石(441)肥前系磁器(442)	中世？	Ｂ	覆土上面に破砕礫
17	4－5	ＳＦ222	1－1	Ｈ－7	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.73	0.72	0.20		中世	Ｂ	覆土上面に破砕礫
17	5－2	ＳＦ223	1－1	Ｈ－7	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.62	0.59	0.20		中世	Ｂ	覆土上面に破砕礫
17		ＳＦ224	1－1	Ｆ－5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.86	0.50	0.17		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ225	1－1	Ｆ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.71	0.43	0.18		中世	Ｄ－2	
18		ＳＦ226	1－1	Ｆ－5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.07	0.62	0.21		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ227	1－1	Ｇ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.08	0.82	0.37		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ228	1－1	Ｇ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.89	0.70	0.16		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ229	1－1	Ｅ－5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	(0.92)	0.52	0.08		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ230	1－1	Ｈ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	(0.69)	0.68	0.20		中世	Ｅ	近くに大型の礫
		ＳＦ231	1－1	Ｇ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.97	0.73	0.28		中世	Ｄ－2	
18		ＳＦ232	1－1	Ｇ－5	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.05	0.98	0.10		中世	Ｄ－1	
		ＳＦ233	1－1	Ｇ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅵ層	0.91	(0.44)	(0.31)		中世	Ｅ	近くに大型の礫
18	5－3	ＳＦ234	1－1	Ｆ－4	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.97	0.89	0.15		中世	Ｄ－1	
	5－3	ＳＦ235	1－1	Ｇ－4	Ⅶ	円形	Ⅳ層	0.95	0.90	0.15		中世	Ｄ－1	
		ＳＦ236	1－1	Ｉ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ層	0.92	0.83	0.22		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ237	1－1	Ｊ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.31	1.14	0.22		中世	Ｅ	
		ＳＦ238	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.95	(0.31)	0.19		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ239	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.70	0.61	0.27		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ240	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.62	0.46	0.12		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ241	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.38	0.36	0.12		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ242	1－1	Ｈ－7	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.86	0.54	0.28		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ243	1－1	Ｈ－7	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.85	0.60	0.35		中世	Ｄ－2	
18		ＳＦ244	1－1	Ｈ－6	Ⅶ	隅丸方形	Ⅳ・Ⅴ層	0.76	(0.64)	0.21		中世	Ｅ	近くに大型の礫
		ＳＦ245	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.63	0.42	0.16		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ246	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.54	0.42	0.16		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ247	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.50	0.39	0.15		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ248	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.60	0.50	0.31		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
18		ＳＦ249	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.64	(0.40)	(0.16)		中世	Ｅ	近くに大型の礫
18		ＳＦ250	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	(0.59)	0.35	0.11		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ251	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.75	0.51	0.31		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ252	1－1	Ｈ－7	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.01	(0.32)	0.42		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ253	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.63	0.45	0.11		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ254	1－1	Ｉ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.71	0.66	0.29		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ255	1－1	Ｉ－6	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.12	1.05	(0.44)		中世	Ｅ	近くに大型の礫
		ＳＦ256	1－1	Ｉ－6	Ⅶ	円形？	Ⅳ・Ⅴ層	(0.45)	(0.87)	(0.30)		中世	Ｅ	近くに大型の礫
		ＳＦ257	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.57	0.39	0.20		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ258	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.45	0.34	0.14		中世	Ｄ－2	
18		ＳＦ259	1－1	Ｈ－7	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.00	0.61	0.16		中世	Ｃ	西壁に被熱　炭化物
18		ＳＦ260	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.10	0.91	0.26		中世	Ｅ	近くに大型の礫
		ＳＦ261	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.41	0.34	0.27		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ262	1－1	Ｈ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.01	0.84	0.24		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ263	1－1	Ｉ－7	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.49	0.45	0.25		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ264	1－1	Ｊ－8	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.73	(0.59)	0.30		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ265	1－1	Ｉ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.80	0.74	0.39		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ266	1－1	Ｉ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.53	0.47	0.29		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
18		ＳＦ267	1－1	Ｉ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	(0.7)	0.45	0.19		中世	Ｅ	近くに大型の礫
		ＳＦ268	1－1	Ｉ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.65	0.55	0.25		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ269	1－1	Ｊ－8	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	(0.55)	(0.57)	0.12		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ270	1－1	Ｉ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.01	0.67	0.15		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ271	1－1	Ｋ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.97	0.70	0.12		中世	Ｄ－2	
18		ＳＦ272	1－1	Ｊ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	1.01	(0.61)	(0.10)		中世	Ｅ	近くに大型の礫
		ＳＦ273	1－1	Ｉ－7	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.52	0.38	0.24		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ274	1－1	Ｉ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.82	0.68	0.30		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ275	1－1	Ｉ－5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.60	0.36	0.3		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ276	1－1	Ｉ 5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.65	0.36	0.06		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ277	1－1	Ｈ－6	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.70	(0.47)	0.16		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ278	1－1	Ｇ－5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.76	0.42	0.07		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ279	1－1	Ｇ－5	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.49	0.38	0.23		中世	Ｄ－2	
		ＳＦ280	1－1	Ｆ－5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.59	0.39	0.15		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ281	1－1	Ｆ－5	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.60	0.29	0.14		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
18		ＳＦ282	1－1	Ｊ－6	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.67	(0.59)	0.10		中世	Ｄ－2	近くに大型の礫
		ＳＦ283	1－1	Ｊ－6	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.54	0.42	0.09		中世	Ｄ－2	

③　小穴

ＳＰ201～ＳＰ208　ＳＰ210～ＳＰ213（図19）

ＳＰ201～208、ＳＰ210～213は、長径が最小のもので0.38m、最大のもので0.66mを計り、不整な円形ないしは楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは、最も浅いもので0.07m、最も深いもので0.20mである。

ＳＰ205～ＳＰ208は幾つかの小穴が近接し、グループを形成するように検出されている。いずれの小穴からも遺物は出土しておらず時期は不明である。

また検出状況から建物を想定する事が難しいこと、第Ⅱ期現地調査において礫の間に構築された小穴を中世墓と認定したことから、これらの小穴についても、火葬骨だけを埋葬した墓で上部構造が流出した可能性が高いものと判断した。

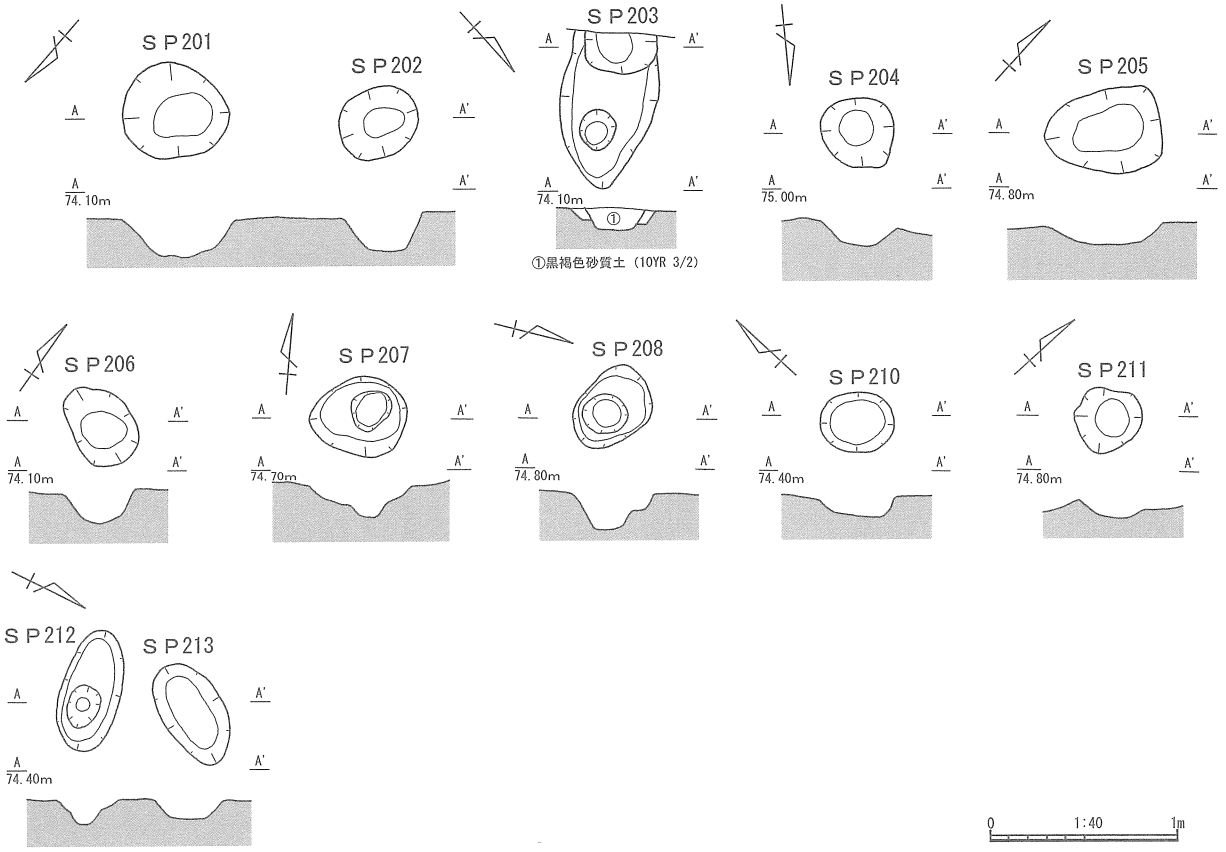


図19　１－１区 Ⅶ層 小穴実測図

表10　１－１区 Ⅶ層 小穴（ＳＰ）計測表

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	時期	備考
19		ＳＰ201	１－１	Ｉ－３	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.57	0.50	0.20		中世	
19		ＳＰ202	１－１	Ｉ－３	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.44	0.37	0.20		中世	
19		ＳＰ203	１－１	Ｋ－５	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	(0.38)	(0.22)	(0.11)		中世	
19		ＳＰ204	１－１	Ｉ－７	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.43	0.39	0.12		中世	
19		ＳＰ205	１－１	Ｅ－５	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.63	0.44	0.12		中世	
19		ＳＰ206	１－１	Ｅ－５	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.47	0.34	0.17		中世	近くに大型の礫
19		ＳＰ207	１－１	Ｅ－５	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.53	0.43	0.16		中世	近くに大型の礫
19		ＳＰ208	１－１	Ｅ－５	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.49	0.35	0.20		中世	
		ＳＰ209											欠番
19		ＳＰ210	１－１	Ｊ－５	Ⅶ		Ⅳ・Ⅴ層	0.39	0.32	0.11		中世	
19		ＳＰ211	１－１	Ｉ－６	Ⅶ	円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.38	0.34	0.07		中世	
19	５－４	ＳＰ212	１－１	Ｊ－６	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.66	0.31	0.13		中世	
19	５－４	ＳＰ213	１－１	Ｊ－６	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.58	0.32	0.10		中世	
		ＳＰ214	１－１	Ｊ－５	Ⅶ	楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.32	(0.30)	0.09		中世	
		ＳＰ215	１－１	Ｉ－５	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	0.35	0.18	0.10		中世	

④　不明遺構

ＳＸ202・ＳＸ204（図20）

ＳＸ202はＩ－４・Ｊ－４グリッドで検出された。規模は長径3.48m、短径1.67m、検出面から底面までの深さは0.06mを計る。覆土中に炭化物と焼土を含む。また遺構の周辺でも広い範囲で焼土が認められた。

ＳＸ204もほぼ同様の規模を有する。北側に炭化物と焼土が集中し、中央から南半分には炭化した板材や丸木材が多量に含まれる。

第Ｉ期現地調査時に２－１区で検出されたＳＸ21123も、同様に長楕円形の土坑に炭化材が多量に含まれていたが、壁面や床面に焼けた痕跡は認められず炭化材の廃棄施設として報告されている（註４）。

しかし覆土内の焼土及び周辺での焼土の検出からＳＸ202・ＳＸ204については焼成遺構の可能性が高いと考えられる。

図20　１－１区 Ⅶ層 不明遺構実測図

表11　１－１区 Ⅶ層 不明遺構（ＳＸ）計測表

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	時期	備考
20		ＳＸ202	１－１	Ｉ・Ｊ－４	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	3.48	1.67	0.06		中世	焼却施設か　炭化物　焼土
20	５－５	ＳＸ204	１－１	Ｊ－４	Ⅶ	長楕円形	Ⅳ・Ⅴ層	3.93	1.68	0.07		中世	焼却施設か　炭化物　焼土

註１　小野真一・植松章八・尾形礼正・秋本真澄・平林蒋信1976『陣場上・平畝遺跡』長泉町他
　　平川昭夫・袴田稔（編）1982『長久保城址（八幡曲輪・上野南・大水濠）　大平遺跡』長泉町他

註２　馬飼野行雄・渡井英誉　1994『猪之頭養鱒場内遺跡』富士宮市教育委員会

註３・４　鈴木　譲　1998『大平遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　64頁、56～57頁

2　中世から近世の遺物

本来層位ごとに報告すべきであるが、遺跡形成過程における非文化的プロセスの影響が大きいこと、小破片が多く図化できるものが限定されることから、中世の遺物、近世の遺物のように時期ごとに区分して報告する（註１）。中世の遺物に関しては出土点数を別表に記載した（表13・19）。

（１）中世の遺物

瀬戸美濃製品（図21－１～14、写真図版９－１～３、11－１）

瀬戸美濃の製品は古瀬戸段階と大窯段階の製品が出土している。古瀬戸の製品が23点、大窯の製品が11点、古瀬戸後Ⅳ～大窯３の擂鉢が９点、合計43点である。

図21－１は後Ⅳ古段階の縁釉小皿、２は直縁大皿、３は卸目付大皿である。４は合子あるいは双耳小壺の蓋、５は古瀬戸後Ⅳ新の縁釉小皿、７は腰折皿である。

大窯段階の製品は、11は天目茶碗、12は２～３期の丸皿、13は４期の丸碗である。

志戸呂製品（図21－15～17、写真図版９－４、11－２）

志戸呂の製品は７点出土した。古瀬戸後Ⅳ新段階併行が４点、大窯期が３点である。図21－15の平碗、16の縁釉小皿はいずれも後Ⅳ新段階併行の製品。17は大窯期の皿類である。

貿易陶磁器（図21－18～23、写真図版10－２）

貿易陶磁器は15点出土し、その内６点を図化した。図21－18は龍泉窯系の青磁連弁文碗のＡ６類、大平遺跡出土の貿易陶磁器の中では、古手の製品である。菊川市の伊平遺跡、裾野市大畑遺跡上屋敷地区、伊豆の国市御所之内遺跡第13次調査で出土例が報告されている（註２）。

20は白磁皿Ｂ群、21は染付皿Ｂ２群、22は染付碗Ｃ群、23は漳州窯系の染付碗で見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。

常滑製品（図22－１、写真図版10－１）

常滑製品は26点出土した。内１点を図化した。図22－１は11型式に比定される甕の口縁部。常滑の製品は３～４形式に比定される甕が４点、８形式に比定される甕が１点出土しているが、主体は11型式である。

内耳鍋　羽釜　瓦質陶器（図22－２～７、写真図版９－５）

羽釜は４点、内耳鍋は７点、瓦質陶器は１点出土した。図22－５と６はいずれも16世紀に比定される内耳鍋の口縁部。２、３、４は伊勢湾系の羽釜Ａ類。７は瓦質の火鉢である。

かわらけ（図22－８～９、写真図版11－３）

かわらけは76点が出土し、接合後の破片数は63点である。小破片が多く、図化できたものは２点のみである。図22－８は口径が6.1cmの小型の製品で口縁に煤の付着が認められる。９は底径５cm前後の中型のかわらけである。

三島市の長伏・六反田遺跡、伊豆の国市の御所之内遺跡出土のかわらけと類似点が認められ、いずれも在地で焼かれた15世紀後半～16世紀前半の範疇に収まるものである（註３）。

（２）近世の遺物（図22－10～18、写真図版11－４、５）

近世以降の遺物として近世から近代の陶磁器類が出土した。近世の遺物は60㎝×40㎝×10㎝のコンテナで約２箱分が出土したが、小破片が多く図化できたものはその内の９点である。

図22－14はくらわんか手の丸碗、12は瀬戸美濃系の灰釉の灯明受皿で19世紀に下る製品である。17は灰釉の筒型碗か香炉で18世紀中頃の信楽の製品か。18は瀬戸美濃系の擂鉢Ｅ類で18世紀後半の製品である。近世の遺物は18世紀後半から19世紀の製品が出土遺物の中で高い割合を占めている。

（３）金属製品・石製品

銭貨（図23－１～６、写真図版11－６）

図23－１は至和元寳、２及び３は初鋳年1636年の寛永通寳。４と５は「文銭」と呼ばれる初鋳年が1668年の新寛永通寳である。

鉄砲玉（図23－７～13、写真図版11－６）

図23－７～13は鉄砲玉である。いずれも表面が白色を呈している。第Ｉ期現地調査においても15点の鉄砲玉が出土しているが、蛍光Ｘ線による分析の結果全て鉛玉であった（註４）。

鋳張りの痕跡が12で確認できる。また、湯注ぎの痕跡と考えられるヘソが７で確認できた。酸化による径の変形により本来の直径を正確に測定する事はできないが、現状での最大径を「井上流近要流」の玉割表に当て嵌めると、７～９は直径が12.0～12.2㎜で三匁玉、10は直径12.5㎜で三匁五分玉、11～12は直径が13.4～13.5㎜で四匁玉、13は直径14㎜で四匁五分玉となる。

釘類（図23－14～16、写真図版11－６）

図23－15と16はいずれも現存する長さが約6.8㎝で二寸五分釘と考えられる。金箱文夫氏の分類（金箱文夫　1984）における頭つくり出し類と考えられる（註３）。

石製品（図23－17～19、写真図版11－６）

図23－17は流紋岩製の手持ちの砥石、18も同じく流紋岩製の砥石。19は粘板岩製の碁石の玉である。

註１　中世から近世の出土遺物の分類には、当研究所河合修氏の協力を得、特に中世の遺物に関しては、伊豆の国市教育委員会池谷初恵氏にご教示頂いた。また、瀬戸美濃製品の編年については、藤澤良祐氏の編年をもとにした。貿易陶磁の編年については、『静岡県の中世社会〈資料編〉（菊川シンポジウム実行委員会　2005）を参考にした。

註２　菊川シンポジウム実行委員会　2005『静岡県の中世社会』〈資料編〉

註３　伊豆の国市教育委員会　池谷初恵氏のご教示による。

註４　鈴木　譲　1998『大平遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　132頁参照。

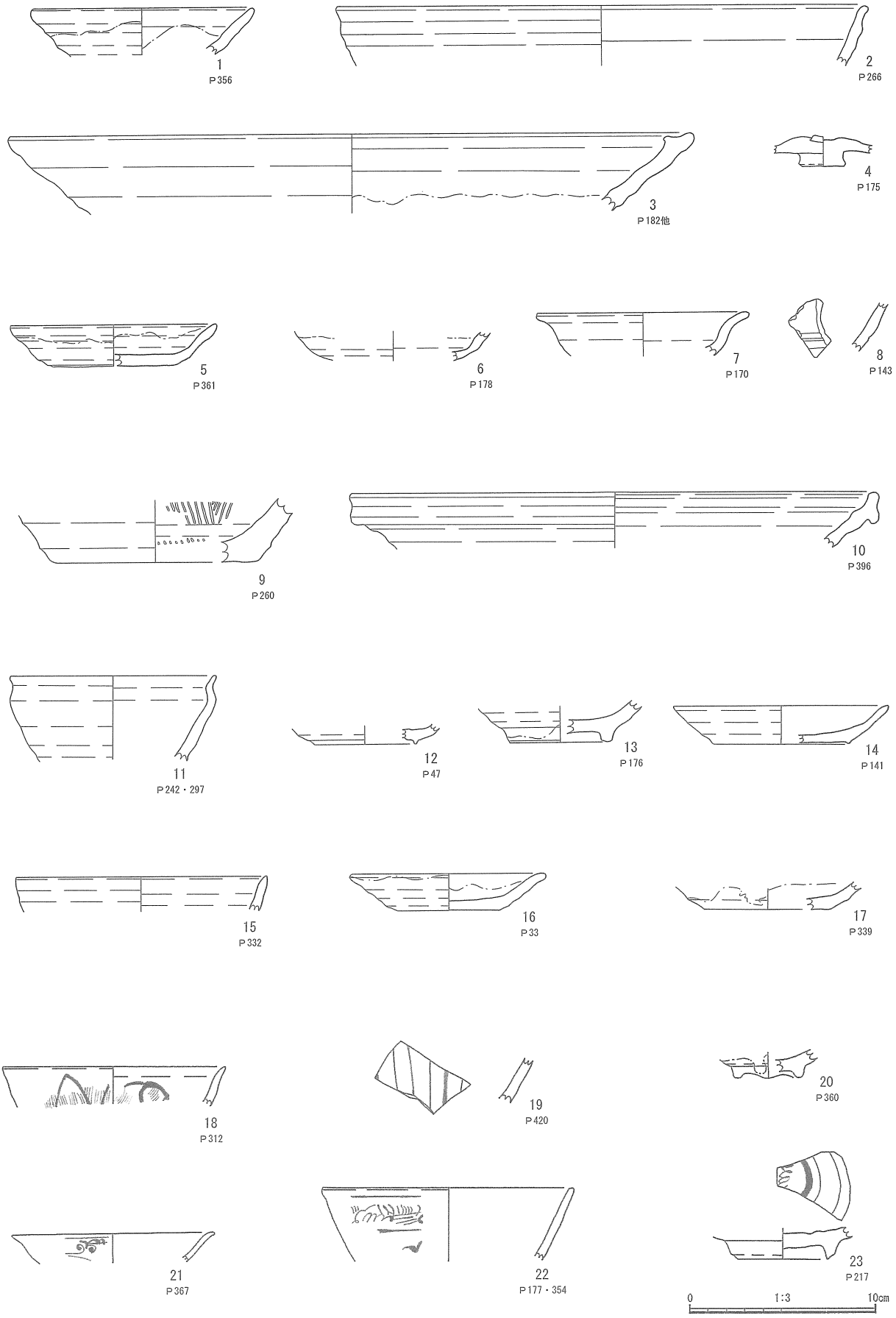


図21　1－1区 出土遺物（1）瀬戸美濃製品・志戸呂製品・貿易陶磁器

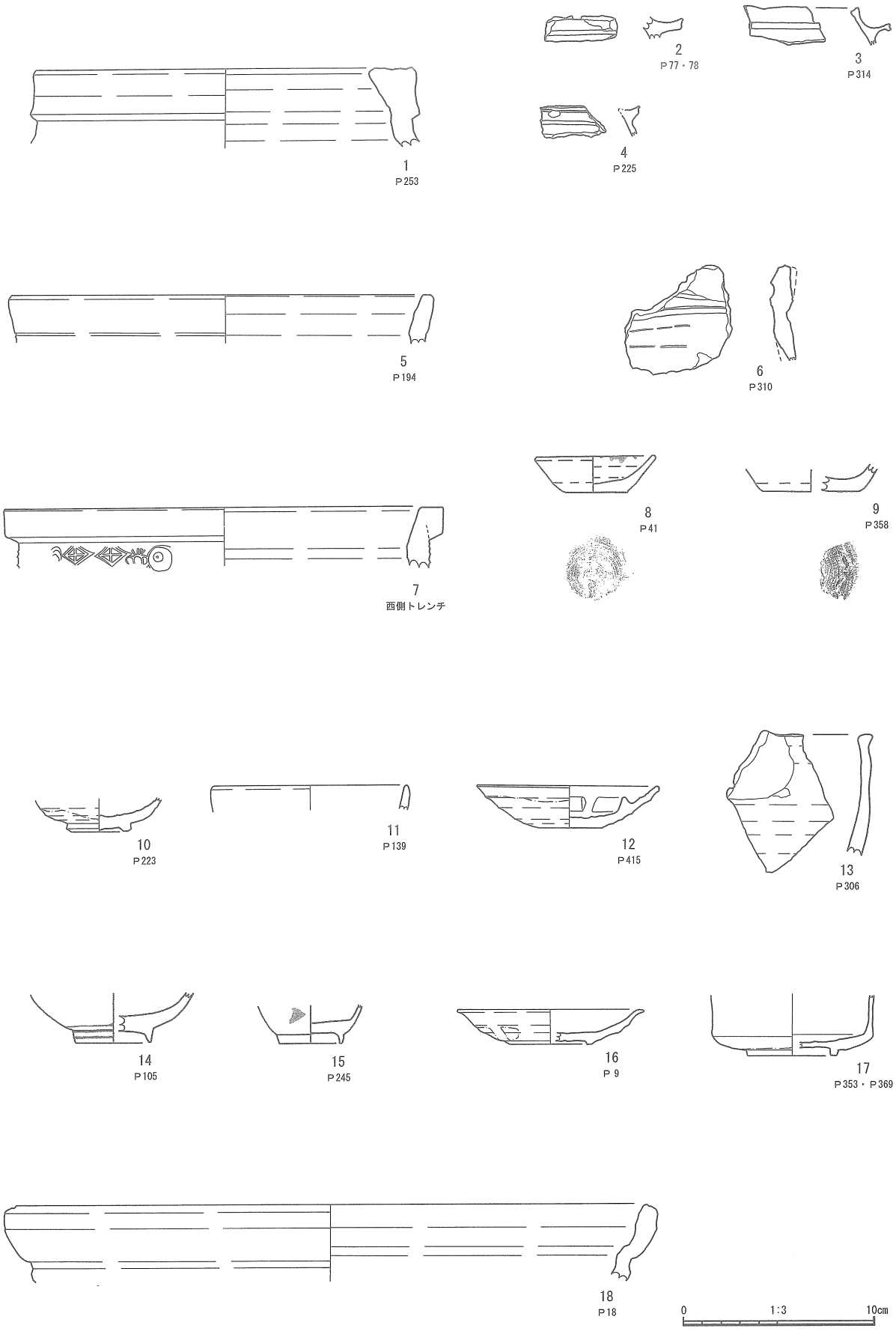


図22　1－1区 出土遺物（2）常滑製品・羽釜・内耳鍋・かわらけ・近世陶磁器

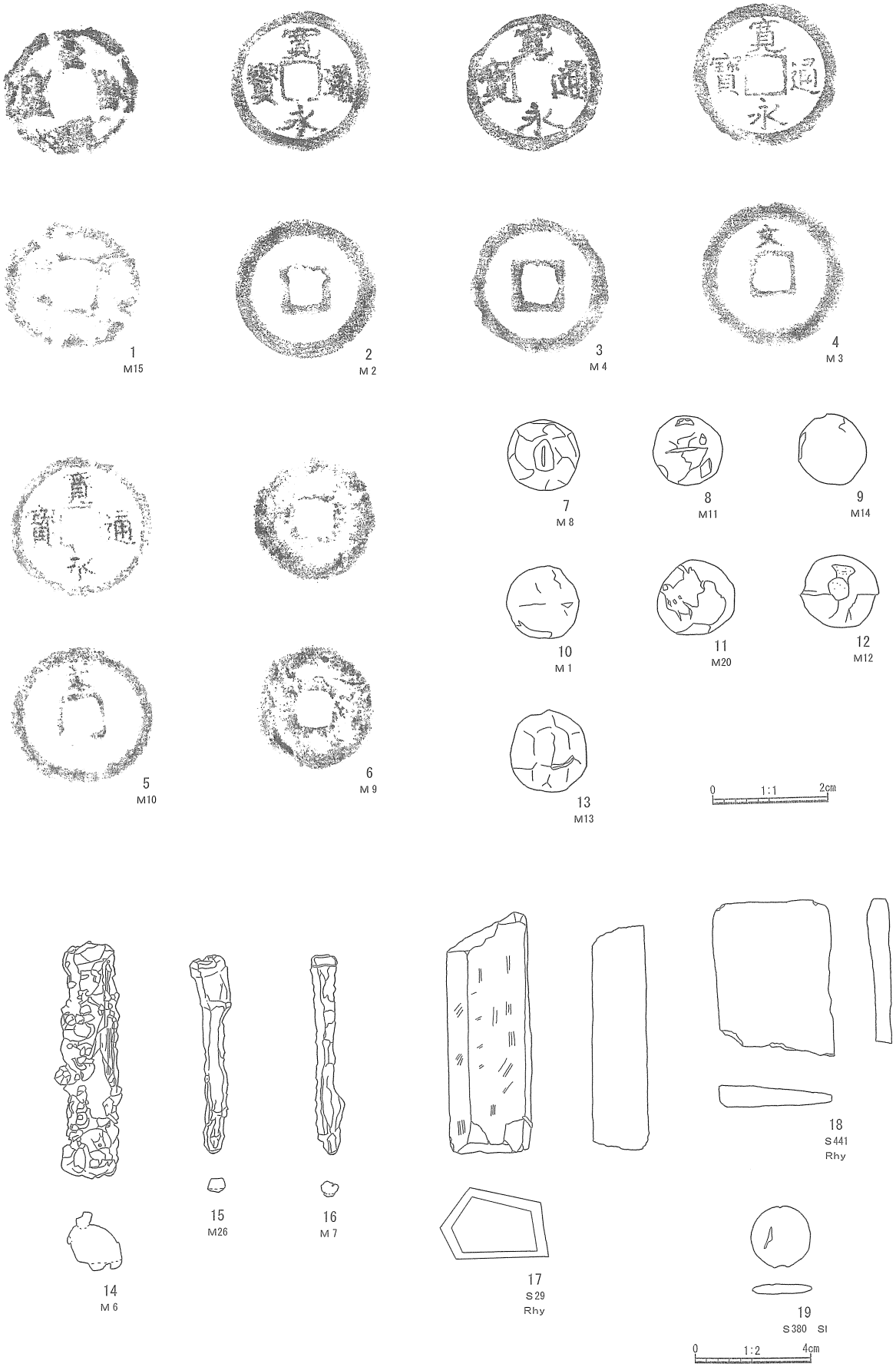


図23　1－1区 出土遺物（3）金属製品・石製品

表12　1－1区 出土遺物観察表

瀬戸美濃製品　観察表

挿図	写真図版	区	番号	器種	遺構・グリッド	層位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	時期／産地等	備考
21－1	9－1	1－1	356	縁釉小皿	J－6	V	(11.8)	－	－	褐 7.5YR 4/4	古瀬戸後Ⅳ古	鉄釉
21－2	9－1	1－1	266	直縁大皿	J－5	Ⅳ	(28.0)	－	－	オリーブ黄 5Y 6/3	古瀬戸後Ⅳ古	－
21－3	9－1	1－1	182他	卸目付大皿	G－4	Ⅳ	(36.4)	－	－	オリーブ黄 5Y 6/3	古瀬戸後Ⅳ古	182,237,268と接合
21－4	9－1	1－1	175	合子か双耳小壺の蓋	F－4	Ⅳ	－	2.25	－	暗オリーブ 7.5Y 4/3	古瀬戸後Ⅳ新	－
21－5	11－1	1－1	361	縁釉小皿	J－5	V	(11.0)	(6.4)	2.2	灰オリーブ 7.5Y 5/3	古瀬戸後Ⅳ新	－
21－6	11－7	1－1	178	縁釉小皿	SD001	Ⅲ	－	－	－	オリーブ 5Y 5/4	古瀬戸	－
21－7	9－1	1－1	170	腰折皿	I－6	Ⅲ	(11.5)	－	－	オリーブ黄 7.5Y 6/3	古瀬戸後Ⅳ新	－
21－8	11－7	1－1	143	平碗	SD001	上層	－	－	－	オリーブ黄 5Y 6/4	古瀬戸	－
21－9	9－2	1－1	260	擂鉢	I－5	Ⅲ	－	(10.2)	－	暗褐 10YR 3/4	古瀬戸後Ⅳ新～大窯３	－
21－10	9－3	1－1	396	擂鉢	D－3	V	(28.1)	－	－	暗褐 7.5YR 3/3	瀬戸美濃　大窯２	－
21－11	9－3	1－1	242・297	天目茶碗	I－4	Ⅳ	(10.6)	－	－	黒褐 10YR 2/2	瀬戸美濃　大窯	－
21－12	9－3	1－1	47	丸皿	I－6	Ⅲ	－	(5.4)	－	浅黄 2.5Y 7/4	瀬戸美濃　大窯２～３	－
21－13	11－7	1－1	176	丸碗	SD001	Ⅲ	－	(5.5)	－	黒 N2/	瀬戸美濃　大窯４	鉄釉　神座窯
21－14	11－7	1－1	141	志野丸皿	SD001	上層	(11.4)	(7.2)	2.0	灰白 5Y8/2	瀬戸美濃　大窯４	－

志戸呂製品　観察表

21－15	9－4	1－1	332	平碗	J－5	Ⅳ	(13.4)	－	－	オリーブ黄 5Y 6/4	志戸呂　後Ⅳ新併行	－
21－16	11－2	1－1	33	縁釉小皿	I－6	Ⅳ	(10.5)	(5.3)	2.0	オリーブ灰 10Y 5/2	志戸呂　後Ⅳ新併行	－
21－17	9－4	1－1	339	丸皿か	H－6	V	－	(6.7)	－	灰オリーブ 7.5Y 5/3	志戸呂　大窯	－

貿易陶磁器　観察表

21－18	10－2	1－1	312	青磁碗	TR101	Ⅵ	(12.0)	－	－	明緑灰 10GY 7/1	龍泉窯系　１３Ｃ	Ａ６類
21－19	10－2	1－1	420	青磁碗	SR02	V	－	－	－	オリーブ灰 5GY 6/1	龍泉窯系13Ｃ中～１４Ｃ前	Ｂ１類
21－20	10－2	1－1	360	白磁皿	J－6	V	－	(3.7)	－	灰白 5Y 8/1	15Ｃ前半	Ｂ群
21－21	10－2	1－1	367	染付端反皿	H－6	V	(10.9)	－	－	灰白 N 8/	16Ｃ中	Ｂ２群
21－22	11－7	1－1	177・354	染付碗	SD001	Ⅲ	(13.5)	－	－	灰白 N 8/	－	Ｃ群
21－23	10－2	1－1	217	染付碗	J－6	Ⅳ	－	(4.8)	－	灰白 5Y 7/1	漳州窯系	蛇の目釉剥ぎ

常滑製品　観察表

22－1	10－1	1－1	253	甕	J－6	Ⅳ	(19.8)	－	－	にぶい赤橙 10R 6/4	16Ｃ前～中	11型式
22－2	9－5	1－1	77・78	羽釜	F－5	Ⅲ	－	－	－	浅黄橙 7.5YR 8/4	15Ｃ後半	Ａ類
22－3	9－5	1－1	314	羽釜	H－6	V	－	－	－	浅黄橙 10YR 8/4	15Ｃ後半	Ａ類
22－4	9－5	1－1	225	羽釜	H－4	Ⅳ	(20.6)	－	－	浅黄橙 7.5YR 8/3	15Ｃ後半	Ａ類
22－5	9－5	1－1	194	内耳鍋	H－5	Ⅳ	(21.9)	－	－	灰白 7.5YR 8/1	16Ｃ位	－
22－6	9－5	1－1	310	内耳鍋	H－6	V	－	－	－	淡橙 5YR 8/3	16Ｃ位	－

瓦質陶器　観察表

22－7	9－4	1－1	－	火鉢	西側トレンチ	Ⅳ	(23.0)	－	－	灰白 N 8/	16Ｃ位	瓦質

かわらけ　観察表

22－8	11－3	1－1	41	かわらけ	E－5	Ⅳ	6.1	3.3	2.0	にぶい橙 7.5YR 7/3	15Ｃ後半	灯明皿
22－9		1－1	358	かわらけ	J－6	V	－	(5.0)	－	にぶい橙 7.5YR 6/4	15Ｃ後半	－

近世遺物　観察表

22－10	11－5	1－1	223	丸碗	H－5	Ⅳ	－	2.9	－	灰白 7.5Y 8/1	瀬戸美濃　18Ｃ代	－
22－11	11－7	1－1	139	丸碗	SD001	上層	(10.2)	－	－	にぶい黄橙 10YR 6/4	瀬戸美濃　近世	－
22－12	11－4	1－1	415	灯明受皿	I－7	Ⅵ	9.7	3.3	2.2	灰白 5Y 7/2	瀬戸美濃　19Ｃ代	－
22－13	11－5	1－1	306	片口鉢	I－5	Ⅲ	－	－	－	褐 7.5YR 4/4	瀬戸美濃　18Ｃ代	飴釉
22－14	11－5	1－1	105	染付丸碗	I－5	Ⅲ	－	(4.0)	－	明緑灰 7.5GY 8/1	肥前　18Ｃ代	くらわんか手
22－15	11－5	1－1	245	小杯	I－4	Ⅳ	－	(3.3)	－	灰白 N 8/	肥前　18Ｃ後半～19Ｃ中	－
22－16		1－1	9	丸皿	D－5	Ⅲ	(9.8)	(4.4)	(1.9)	オリーブ 5Y 5/4	不明	被熱
22－17	11－5	1－1	353・369	筒型碗	J－5	Ⅳ	－	4.7	－	灰白 5Y 7/2	信楽か	－
22－18	11－5	1－1	18	擂鉢	D－5	Ⅲ	(33.0)	－	－	暗褐色 7.5YR 3/4	瀬戸美濃　18Ｃ後	E類

銭貨　観察表

挿図	写真図版	区	番号	名称	遺構・グリッド	層位	法量(cm) 直径	重量	孔径	書体	初鋳年代	備考
23－1	11－6	1－1	M15	至和元寶	H－3	Ⅳ	2.3	1.3	0.8	篆書	1054	－
23－2	11－6	1－1	M2	寛永通寶	E－5	Ⅲ	2.4	2.2	0.6	－	1636	古寛永
23－3	11－6	1－1	M4	寛永通寶	E－4	Ⅲ	2.4	2.4	0.6	－	1636	古寛永
23－4	11－6	1－1	M3	寛永通寶	E－4	Ⅲ	2.5	2.0	0.6	－	1668	文銭
23－5	11－6	1－1	M10	寛永通寶	K－4	Ⅲ	2.45	1.6	0.6	－	1668	文銭
23－6	11－6	1－1	M9	不明	G－4	Ⅳ	2.0	1.2	0.6	不明	不明	－

鉄砲玉　観察表

挿図	写真図版	区	番号	名称	遺構・グリッド	層位	法量(cm) 最大径	最小径	重量(g)	鋳張り	ヘソ	備考
23－7	11－6	1－1	M8	鉄砲玉	E－5	Ⅲ	1.22	1.21	7.2	－	－	三匁玉
23－8	11－6	1－1	M11	鉄砲玉	J－4	Ⅳ	1.20	1.20	8.3	－	－	三匁玉
23－9	11－6	1－1	M14	鉄砲玉	J－4	Ⅳ	1.21	1.17	7.8	有り	－	三匁玉
23－10	11－6	1－1	M1	鉄砲玉	D－5	Ⅲ	1.25	1.22	8.9	－	有り	三匁五分玉
23－11	11－6	1－1	M20	鉄砲玉	K－6	Ⅲ	1.34	1.26	8.8	－	－	四匁玉
23－12	11－6	1－1	M12	鉄砲玉	J－4	Ⅳ	1.37	1.25	10.0	－	－	四匁玉
23－13	11－6	1－1	M13	鉄砲玉	J－4	Ⅳ	1.40	1.34	11.4	－	－	四匁五分玉

釘類　観察表

挿図	写真図版	区	番号	種別	遺構・グリッド	層位	法量(cm) 長さ	幅	重量(g)	断面形	分類	備考
23－14	11－6	1－1	M6	－	E－4	Ⅲ	8.1	1.9	77.0	－	－	－
23－15	11－6	1－1	M26	釘	F－4	Ⅵ	6.8	0.7	6.2	方形	頭つくり出し	２寸５分釘か
23－16	11－6	1－1	M7	釘	J－3	Ⅳ	6.9	0.6	6.7	方形	頭つくり出し	２寸５分釘か

石製品　観察表

挿図	写真図版	区	番号	種別	遺構・グリッド	層位	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	色調	石材	備考
23－17	11－6	1－1	S29	砥石	H－3	Ⅲ	8.3	2.8	1.9	灰オリーブ 5Y 6/2	流紋岩	－
23－18	11－7	1－1	S441	砥石	SF221	Ⅶ	5.4	4.1	0.75	褐 7.5YR 4/4	流紋岩	－
23－19	11－6	1－1	S380	碁石	H－7	V	2.1	0.35	2.9	灰 N 4/	粘板岩	黒色

表13　1－1区 中世出土遺物一覧表

1－1区　瀬戸美濃　出土一覧

器種名		古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期					古瀬戸計	古瀬戸後IV～大窯3	大窯製品								大窯計	合計
		I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV古	IV新			1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後		
碗類	天目茶碗													3	4		2								3	7
										1							1									
	鉄釉丸碗														0								1		1	1
	灰釉平碗														0										0	0
皿類	灰釉腰折皿													1	1										0	1
	灰釉縁釉小皿													1	1										0	1
	灰釉丸皿														0				1						1	1
	鉄絵皿														0										0	0
	端反皿か丸皿														0			1			1				2	2
	鉄釉縁釉小皿												1		1										0	1
盤類	灰釉直縁大皿												1		1										0	1
	灰釉折縁深皿													1	1										0	1
	灰釉卸目付大皿												4		4										0	4
	灰釉盤類											5			5										0	5
	鉄釉直縁大皿														0										0	0
卸皿	灰釉卸皿							1							1										0	1
擂鉢	擂鉢														0	9	1								1	13
																			2		1				3	
壺甕類	灰釉瓶子														0										0	0
	灰釉小壺							1							1										0	1
	合子か双耳小壺													1	1										0	1
	灰釉壺か瓶											2			2										0	2
合計															23	9									11	43

1－1区　志戸呂　出土一覧

器種名		古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期					古瀬戸計	古瀬戸～大窯	大窯製品								大窯計	合計
		I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV古	IV新			1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後		
皿類	灰釉丸皿														0								1		1	1
	灰釉縁釉小皿													2	2										0	2
碗類	鉄釉天目茶碗													1	1									1	1	2
	灰釉平碗													1	1										0	1
不明	灰釉不明														0					1					1	1
合計															4										3	7

1－1区　貿易陶磁器　出土一覧

種別	器種名	産地	分類	年代	破片数
青磁	碗類	同安窯系	C類	12C後～13C前	1
		同安窯系	不明	不明	1
		龍泉窯系	A6類	13C前	1
		龍泉窯系	B1類	13C中～14C前	5
		龍泉窯系	B2類	15C	1
		龍泉窯系	B4類	15C後	0
		龍泉窯系	D1類	14C後	1
		不明	不明	不明	0
白磁	皿類		B群	15C前	1
染付	碗類		B2群	16C中	1
			C群	15C後～16C前	1
		漳州窯系	C群		1
	皿類		B1群	15C中	1
	不明			不明	0
合計					15

1－1区　かわらけ　出土一覧

器種	部位	年代	破片数
かわらけ	破片数	15C末～16C	76
	接合後破片数	15C末～16C	63
合計			76

1－1区　内耳鍋　出土一覧

器種	部位	年代	破片数
内耳鍋	口縁部	16C位	1
	体部	16C位	6
合計			7

1－1区　渥美　出土一覧

産地	器種	部位	型式	年代	破片数
渥美	甕	体部	不明	不明	4
合計					4

1－1区　常滑　出土一覧

産地	器種	部位	型式	年代	破片数
常滑	甕	体部	3～4形式か	12C後～13C前	4
			8形式	14C中～15C初	1
			9～11形式	16C初～16C中	20
			9型式	16C初～16C中	0
			11形式	16C初～16C中	1
	鉢	口縁部	不明	16C初～16C中	0
		体部	11形式	14C中～15C初	0
	甕か鉢	体部	11形式	16C初～16C中	0
合計					26

1－1区　羽釜　出土一覧

器種	部位	型式	年代	破片数
羽釜	口縁部	A類	15C位	4
合計				4

1－1区　瓦質陶器　出土一覧

種別	器種	部位	型式	年代	破片数
瓦質	火鉢	口縁部		16Cか	1
合計					1

第３節　２－２区の遺構と遺物について

１　弥生時代の遺構と遺物

２－２区においては、弥生時代の遺物包含層（第Ⅷ層）が調査区の中央部下半において検出された。これは第Ⅱ期現地調査で検出された遺物包含層（第Ⅳ層　註１）と同じ土層と考えられる。第Ⅱ期現地調査においては４区の西側で限定的に検出されたが、本調査２－２区においても同様に調査区の中央下半の限られた範囲でのみの検出となった（図24）。

（１）弥生時代の遺構

ＳＲ02（図24）

ＳＲ02は、弥生時代の遺物が出土したⅧ層で検出された。調査区のほぼ中央に北東から南西方向に向かって流れる旧河川である。検出された規模は長さ19.50m、幅6.83mである。第Ⅱ期現地調査で検出された河道跡１と同一の河川と考えられる。ＳＲ02の左岸において遺物が集中して出土した。

（２）弥生時代の遺物（図26　写真図版12）

調査区中央部、Ｆ－23・24グリッド、Ｅ－24・25グリッドから出土している。出土した遺物は土器と石器である。

土器（第26図）

土器は全て条痕文系のものである。明らかに部位が分かるものを除くと、小片が多いため、器種の判断は難しいが、大半は甕と考えられる。１は口縁部から胴部下半まで約1/3が残存している。胴部の張りは弱く直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに開く。器面全体は５本単位の茎束状原体による斜方向の条痕が施される。口縁部外面には横長の緩い押圧が施され、その直下は強いナデにより条痕を消している。内面は口縁部がナデ、胴部上位から下位にかけてはケズリの後ナデが施されている。２・３は甕の口縁部の破片である。調整方法は１と同じであり、また胎土・焼成も類似しており、同一個体の可能性も持つが、口縁部の開き方が異なる点、また口縁部直下のナデの幅の違いから別個体としておく。８は胴部下半から底部にかけての破片である。１と同様の斜方向の条痕が施される。底部裏面は剥離が著しく調整は不明である。この破片は調整・胎土・焼成から１と同一個体と考えられる。４～24は甕胴部の破片である。茎束状原体による斜方向を中心とする条痕調整が施される点で共通している。条痕については太いタイプ（４・14)、細いタイプ（５・10・11・19)、中間的なタイプ（６・７・９・12・13・15・17・18・21・23・24）に分類できそうである。16・20は小片のため、また22は剥離のために分類できなかった。

石器（第27図）

１は黒曜石製の石鏃の未成品である。２は黒曜石製の楔形石器である。３は磨・叩石である。不整楕円形の火山礫凝灰岩を用いたもので、両面に磨痕と敲打痕が認められるが、両端及び側縁の敲打は不明瞭である。４は礫器である。角の稜が明瞭な輝石安山岩を用いて、３辺からの剥離を行うことで刃部を作り出している。

註１　佐野暢彦・水上綾子　2001『大平遺跡Ⅱ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　２頁

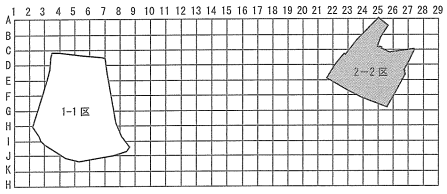


図24　2－2区 Ⅷ層 全体図

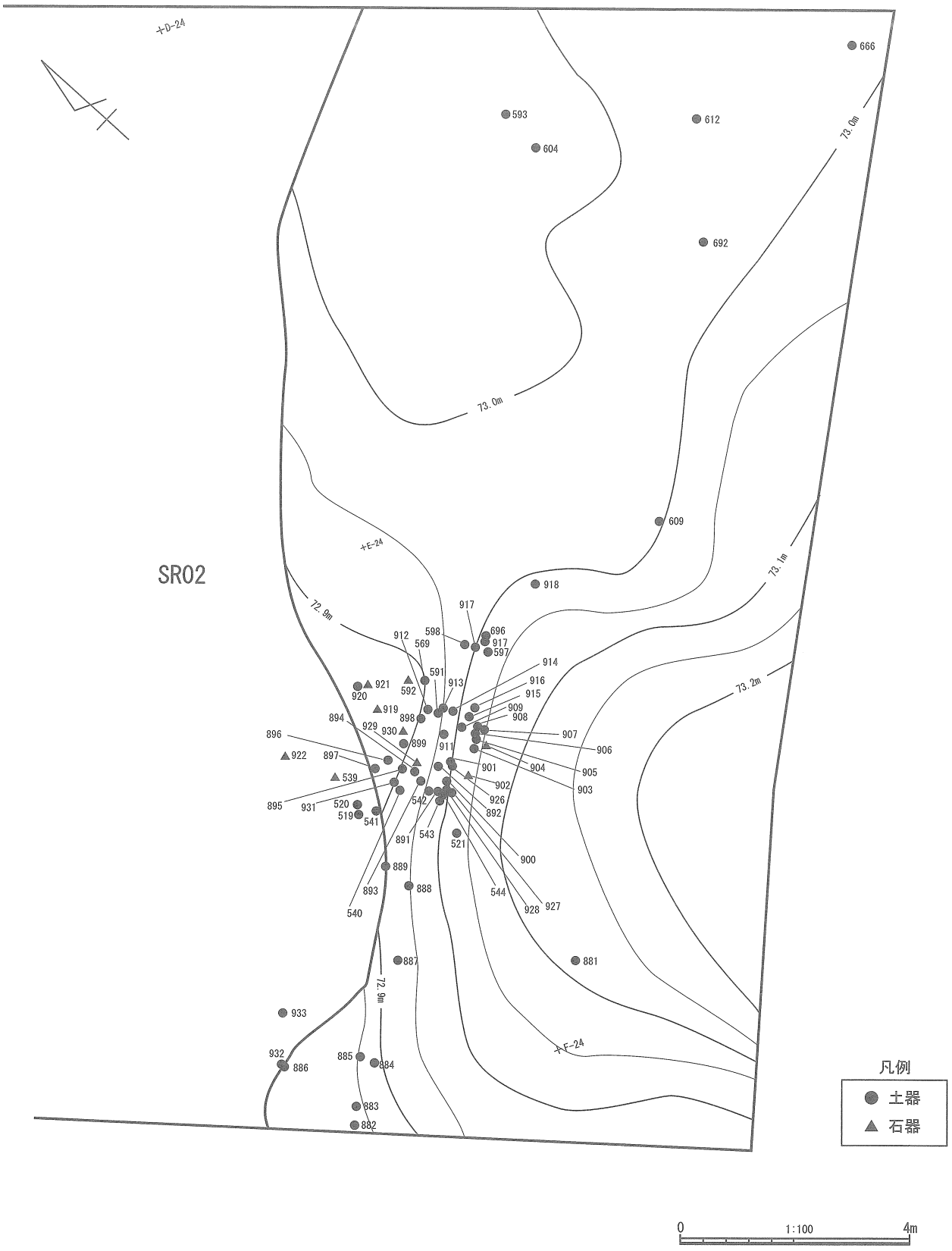


図25　2－2区 Ⅷ層 遺物出土状況図

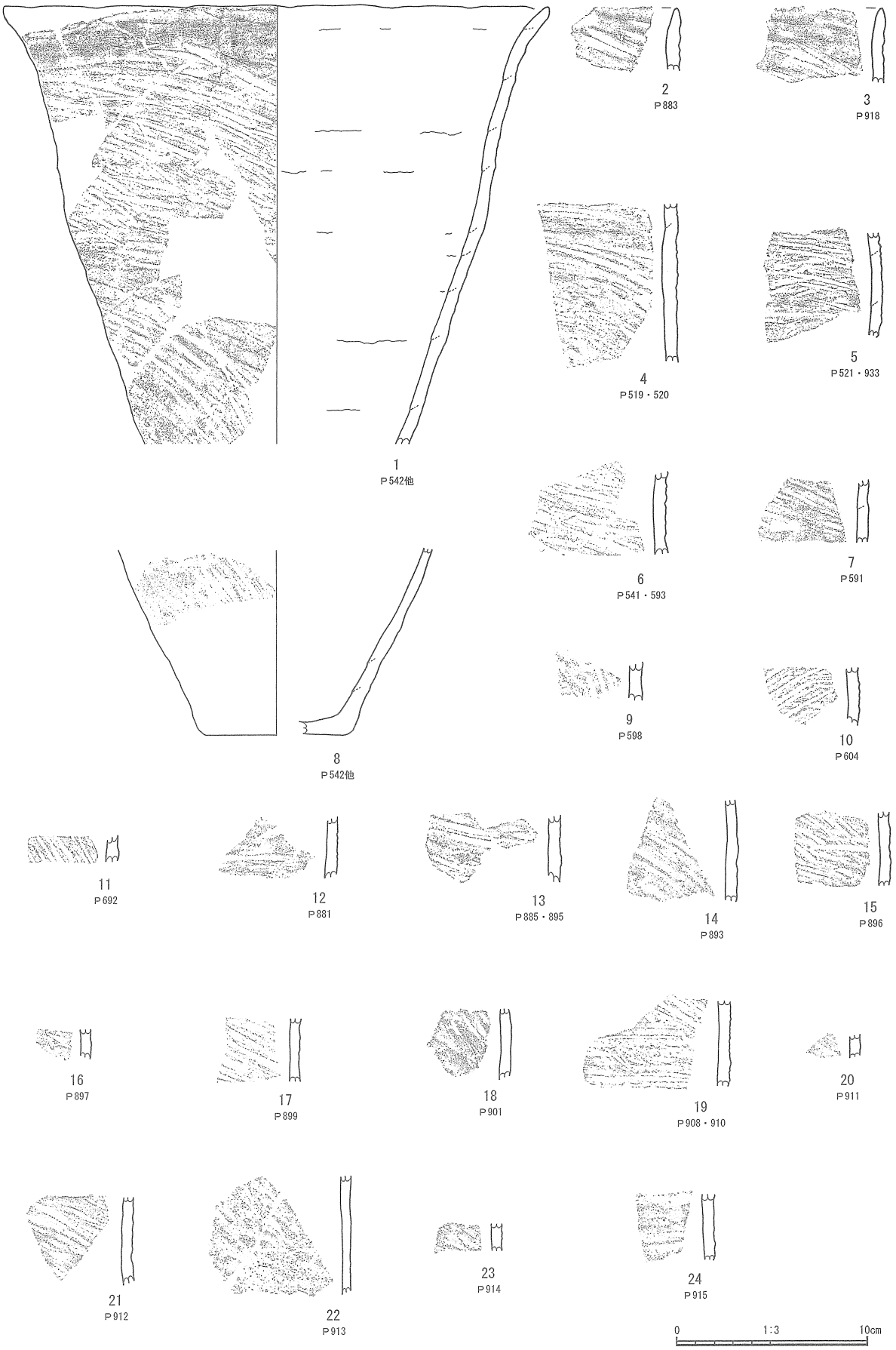
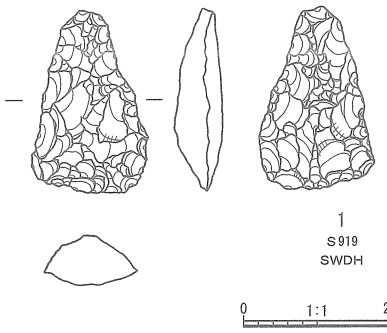
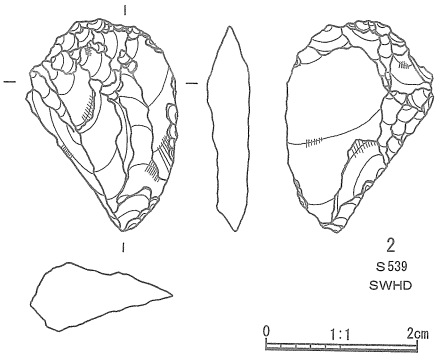
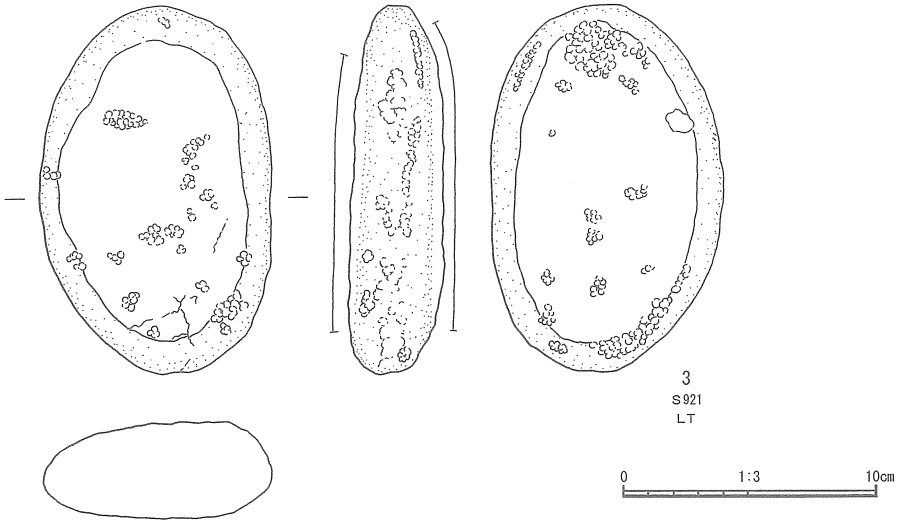


図26　2－2区 出土遺物（1）弥生土器







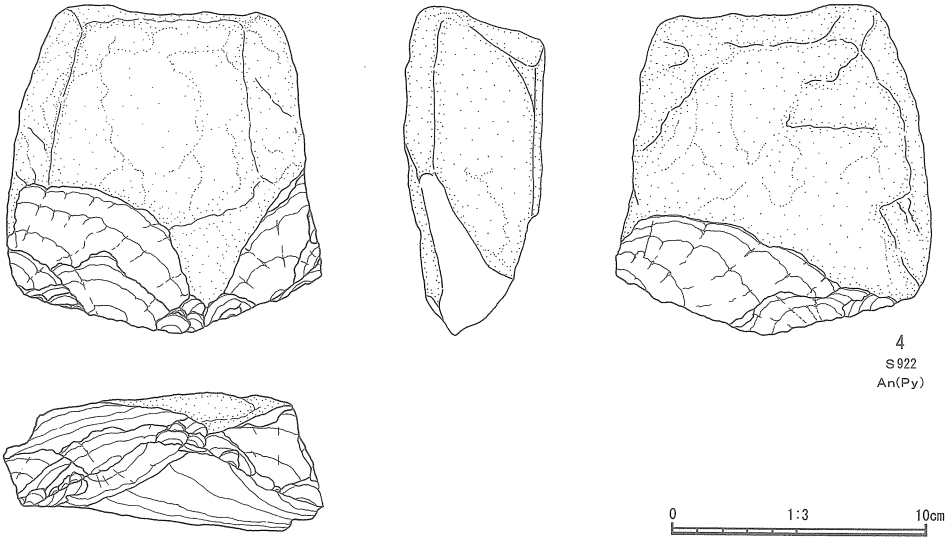


図27　2－2区 出土遺物（2）石器

表14　2－2区 弥生時代出土遺物観察表

土器

挿図	写真図版	番号	グリッド	層位	法量(cm) 口径底径	現存高	厚さ	焼成	色調	胎土	備考
26－1	12－1	542他	F－23	Ⅷ	(28.6)	23.0	0.6	良	にぶい黄褐　10YR 4/3	径0.5～1㎜の石英 径0.5㎜の雲母・長石	口縁
26－2	12－2	883	F－23	Ⅷ	—	3.3	0.7	良	黒褐　2.5Y 3/1	石英 雲母 径0.5～1.0㎜の白色粒子	口縁
26－3	12－2	918	F－24	Ⅷ	—	3.9	0.6	良	黒褐色　2.5Y 3/2	径0.5～2㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明・赤色・黒色粒子	口縁
26－4	12－2	519・520	F－23	Ⅷ	—	8.3	0.8	良	にぶい橙　7.5YR 6/4	径0.5㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明粒子 径0.5～1㎜の赤色粒子	胴部
26－5	12－2	521・933	F－23	Ⅷ	—	5.4	0.6	良	黒褐　2.5YR 3/1	石英 径0.5～1㎜の白色粒子 径0.5㎜の黒色・赤色粒子	胴部
26－6	12－2	541・593	F－23	Ⅷ	—	4.3	0.65	良	黒褐　2.5YR 3/2	径0.5～1㎜の白色・黒色・透明粒子 径0.5～2㎜の赤色粒子	胴部
26－7	12－2	591	F－24	Ⅷ	—	3.3	0.6	良	橙　7.5YR 6/6	径0.5～2㎜の白色 粒子 径0.5㎜の透明・黒色粒子	胴部
26－8	12－3	542他	F－23	Ⅷ	(7.3)	9.8	0.7	良	褐色　7.5YR 4/6	径0.5～3㎜の白色粒子 径0.2㎜の黒色粒子	底部
26－9	12－2	598	F－24	Ⅷ	—	1.9	0.65	良	橙　7.5YR 6/6	径0.5～2㎜の赤色・透明粒子 径0.5㎜の白色・黒色粒子	胴部
26－10	12－2	604	E－24	Ⅷ	—	2.05	0.6	良	にぶい赤褐　5YR 5/4	雲母 径0.5～1㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明粒子	胴部
26－11	12－2	692	E－24	Ⅷ	—	1.4	0.65	良	黒褐色　10YR 2/2	雲母 径0.5～1.5㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明・金色粒子	胴部
26－12	12－2	881	F－24	Ⅷ	—	3.01	0.6	良	にぶい黄褐　10YR 6/4	径0.5～1.5㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明・黒色粒子	胴部
26－13	12－2	885・895	F－23	Ⅷ	—	3.7	0.7	良	黒褐　2.5Y 3/2	黒雲母 径0.5～1㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明粒子	胴部
26－14	12－2	893	F－23	Ⅷ	—	5.31	0.65	良	にぶい黄褐　10YR 5/4	径0.5～1㎜の白色・透明粒子 径0.5～2㎜の黒色粒子	胴部
26－15	12－2	896	F－23	Ⅷ	—	3.9	0.6	良	暗灰黄　2.5Y 4/2	径0.5～1㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明粒子	胴部
26－16	12－2	897	F－23	Ⅷ	—	1.5	0.55	良	黒褐色　2.5Y3/2	径0.5～1.0㎜の白色粒子	胴部
26－17	12－2	899	F－23	Ⅷ	—	3.3	0.55	良	黒褐色　2.5Y 3/2	黒雲母 径0.5～1㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明・黒色粒子	胴部
26－18	12－2	901	F－24	Ⅷ	—	3.7	0.55	良	にぶい黄褐　7.5YR 6/4	径0.5～1㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明・黒色粒子	胴部
26－19	12－2	908・910	F－24	Ⅷ	—	4.5	0.65	良	にぶい黄褐　10YR 5/4	径0.5～1㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明・黒色粒子	胴部
26－20	12－2	911	F－24	Ⅷ	—	1.2	0.55	良	灰黄褐　10YR 4/2	径0.5～1㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明・黒色粒子	胴部
26－21	12－2	912	F－24	Ⅷ	—	4.4	0.65	良	明黄褐　10YR 6/6	径0.5～1㎜の白色・透明粒子 径0.5㎜の黒色粒子	胴部
26－22	12－2	913	F－24	Ⅷ	—	6.2	0.5	良	橙　7.5YR 6/6	径0.5～2㎜の白色粒子 径0.5～1㎜の透明粒子　黒色粒子	胴部
26－23	12－2	914	F－24	Ⅷ	—	1.3	0.55	良	にぶい黄褐　10YR 5/4	径0.5～1㎜の白色粒子 径0.5㎜の透明・黒色粒子	胴部
26－24	12－2	915	F－24	Ⅷ	—	3.4	0.65	良	にぶい黄 2.5YR 6/4	径0.5㎜の白色・透明粒子	胴部

石器

挿図	写真図版	番号	グリッド	層位	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	器種	石材	備考
27－1	12－5	919	F－23	Ⅷ	2.4	1.55	0.65	1.8	石鏃	黒曜石(諏訪星ヶ台群産)	未製品
27－2	12－5	539	F－23	Ⅷ	2.1	2.3	0.9	3.4	楔形石器	黒曜石(諏訪星ヶ台群産)	
27－3	12－6	921	F－23	Ⅷ	14.6	9.2	3.7	545.5	磨石	火山礫凝灰岩	
27－4	12－4	922	F－23	Ⅷ	13.1	12.4	5.55	1250	礫器	輝石安山岩	

2　中世から近世の遺構

２－２区では旧河川、溝状遺構、土坑、小穴が検出された。以下検出層位ごとに報告する。

（１）Ⅳ層検出の遺構

Ⅳ層では土坑２基を検出した。

土坑

ＳＦ138・ＳＦ139（図28）

ＳＦ138はＢ－24グリッドで検出された。規模は長径0.77m、短径0.61m、検出面から底面までの深さは0.05mである。平面形は楕円形を呈する。南側に一段低いピット状の窪みを有する。覆土からかわらけと骨片が出土している。

ＳＦ139もＢ－24グリッドで検出された。規模は長径1.12m、短径0.67m、検出面から底面までの深さは0.04mである。平面形は楕円形を呈する。覆土中に径20㎝前後の礫を含み、骨片が出土した。

ＳＦ138・ＳＦ139は今回の調査において骨片が出土した唯一の土坑である。

（２）Ⅴ層検出の遺構

Ⅴ層では溝状遺構１条を検出した。

溝状遺構

ＳＤ102（図28）

ＳＤ102はＧ－25グリッドで検出された。規模は長さ2.38m、最大幅0.60m、検出面から底面までの最大の深さは0.14mを計る。断面の形態は浅いＵ字状で、西側から東側に向かって傾斜している。遺物は出土しておらず時期・性格等は不明である。

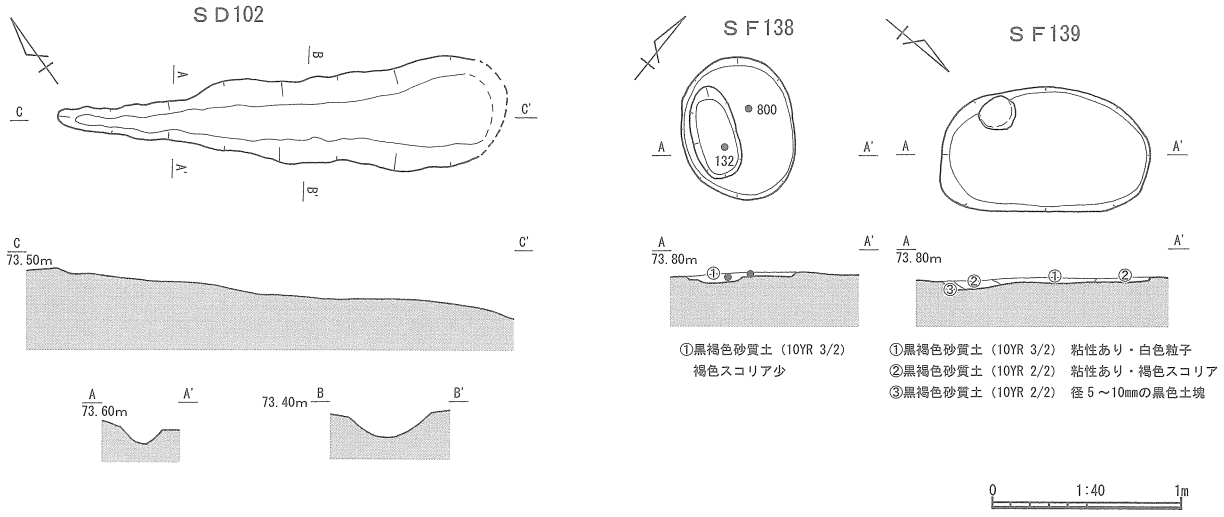


図28　２－２区Ⅳ・Ⅴ層　溝状遺構・土坑実測図

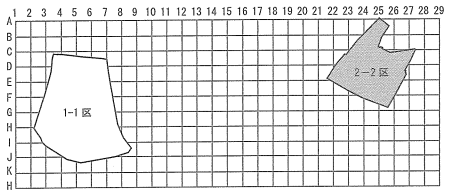
表15　２－２区Ⅳ・Ⅴ層土坑（ＳＦ）・溝状遺構（ＳＤ）計測表

ＳＦ

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	時期	形態	備考
28		ＳＦ138	２－２	Ｂ－24	Ⅳ	楕円形	Ⅳ層	0.77	0.61	0.05	かわらけ	中世	Ｄ－２	下面で骨出土
28		ＳＦ139	２－２	Ｂ－24	Ⅳ	楕円形	Ⅳ層	1.12	0.67	0.04	かわらけ	中世	Ｃ	下面で骨出土

ＳＤ

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	時期	備考
28		ＳＤ102	２－２	Ｇ－25	Ⅴ			2.38	0.60	0.14		中・近世	



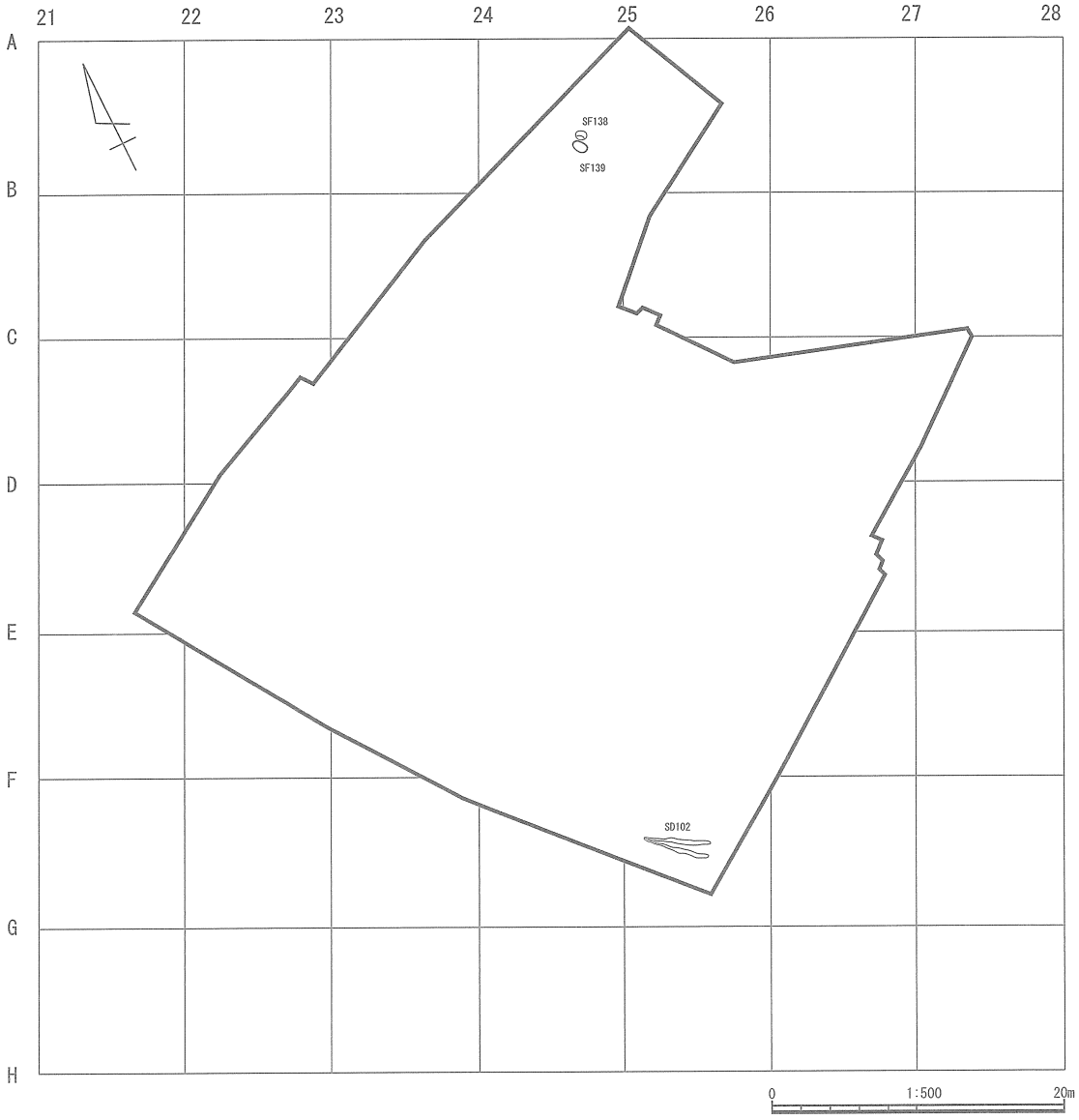


図29　2－2区 V層 遺構分布図

（３）Ⅶ層検出の遺構

Ⅶ層で検出された遺構は旧河川３基、溝状遺構１条、土坑19基、小穴13基である。

①　旧河川

ＳＲ03（図31）

ＳＲ03は調査区の東端を北東から南西向かって流れる旧河川で、検出された規模は長さ27.6m、幅4.1m、深さ1.5mである。粗粒の砂と細粒の砂が互層となって堆積している。その土層中位で径20cmから40cmの礫が組み合わされている様子が確認できたことから、ある時期に石組の護岸が新たに構築されたと考えられる。遺物は常滑３～４形式、９～11形式の甕、古瀬戸後Ⅳ新の擂鉢、古瀬戸後Ⅳ新～大窯１期の擂鉢、貿易陶磁青磁碗Ｂ４類、瀬戸美濃大窯４期の丸皿、15世紀後半のかわらけ等が出土している（写真図版15）。

ＳＲ04（図31）

ＳＲ04はＦ－25・Ｆ－26グリッドで検出された。北西から南東方向に向かう。検出された規模は、長さ約6.8m、幅約4.3m、深さ0.2mである。粒子の細かい砂とシルト質の砂が堆積しており、穏やかな流れを窺わせる河川である。遺物は古瀬戸後Ⅳの直縁大皿、常滑11形式の鉢、15世紀後半のかわらけが出土している（写真図版16－１）。

ＳＲ05（図32）

ＳＲ05は調査区の北端で検出された旧河川であるが、検出できたのはごく一部で主体は調査区の北側となる。検出された規模は長さ約25m、最大幅5.9m、検出面から底面までの深さは0.3mである。遺物は古瀬戸後Ⅲの平碗、常滑９～11形式の甕、15世紀後半のかわらけが出土している（写真図版16－１）。

②　溝状遺構

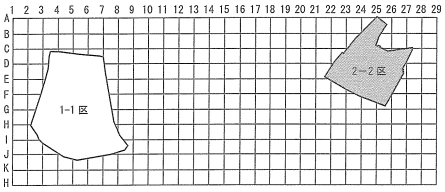
ＳＤ201

ＳＤ201はＦ－22グリッドで検出された。規模は長さ約1.06m、最大幅0.25m、検出面から底面までの最大の深さは0.09mである。断面の形態はＵ字状である。遺物は出土しておらず時期・性格等は不明である。

③　土坑

ＳＦ284・ＳＦ285・ＳＦ286・ＳＦ289・ＳＦ290・ＳＦ291・ＳＦ292・ＳＦ293・ＳＦ294・ＳＦ295
ＳＦ296・ＳＦ297（図33）
ＳＦ302・ＳＦ288・ＳＦ287・ＳＦ299・ＳＦ300・ＳＦ301・ＳＦ298（図34）

いずれも円形の土坑で、最大のもので長径1.27m、最小のもので長径0.53mを計る。ＳＦ284からＳＦ297については、前述の埋葬施設と農業用施設の双方の可能性がある円形土坑と判断した。ＳＦ289・ＳＦ290・ＳＦ291・ＳＦ292・ＳＦ294・ＳＦ296・ＳＦ287・ＳＦ299からは15世紀後半のかわらけが出土している。覆土は砂質の土に炭化物、鉄分を含むものが多い。ＳＦ287からＳＦ302はやや形態の異なる円形土坑である。ＳＦ302からは15世紀代の羽釜Ａ類が出土している。ＳＦ300は底部に礫が認められ、その下部で炭化物が検出された。ＳＦ298・ＳＦ301は人為的な埋め戻しの痕跡が認められた。



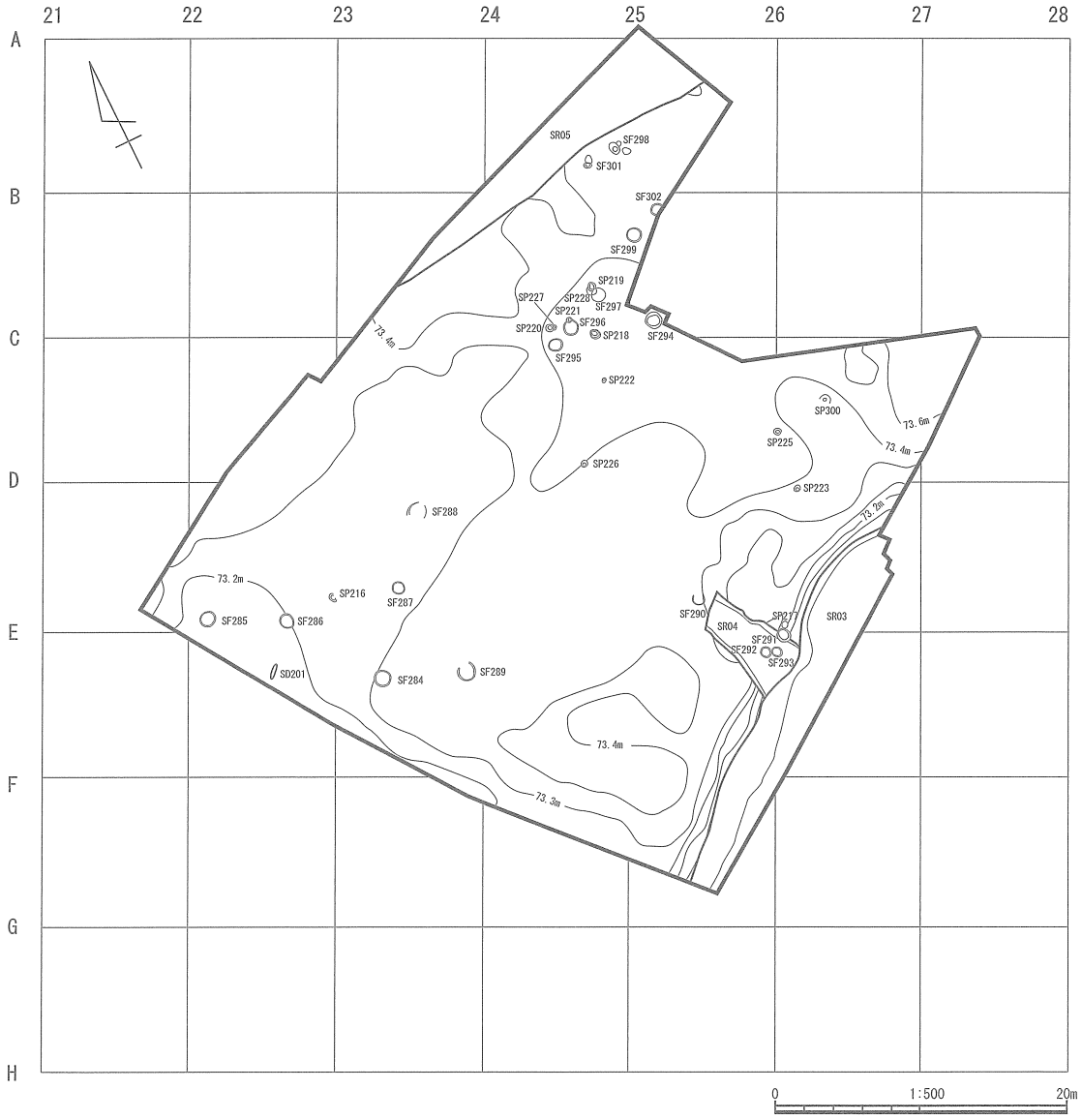


図30　2－2区 Ⅶ層 遺構分布図

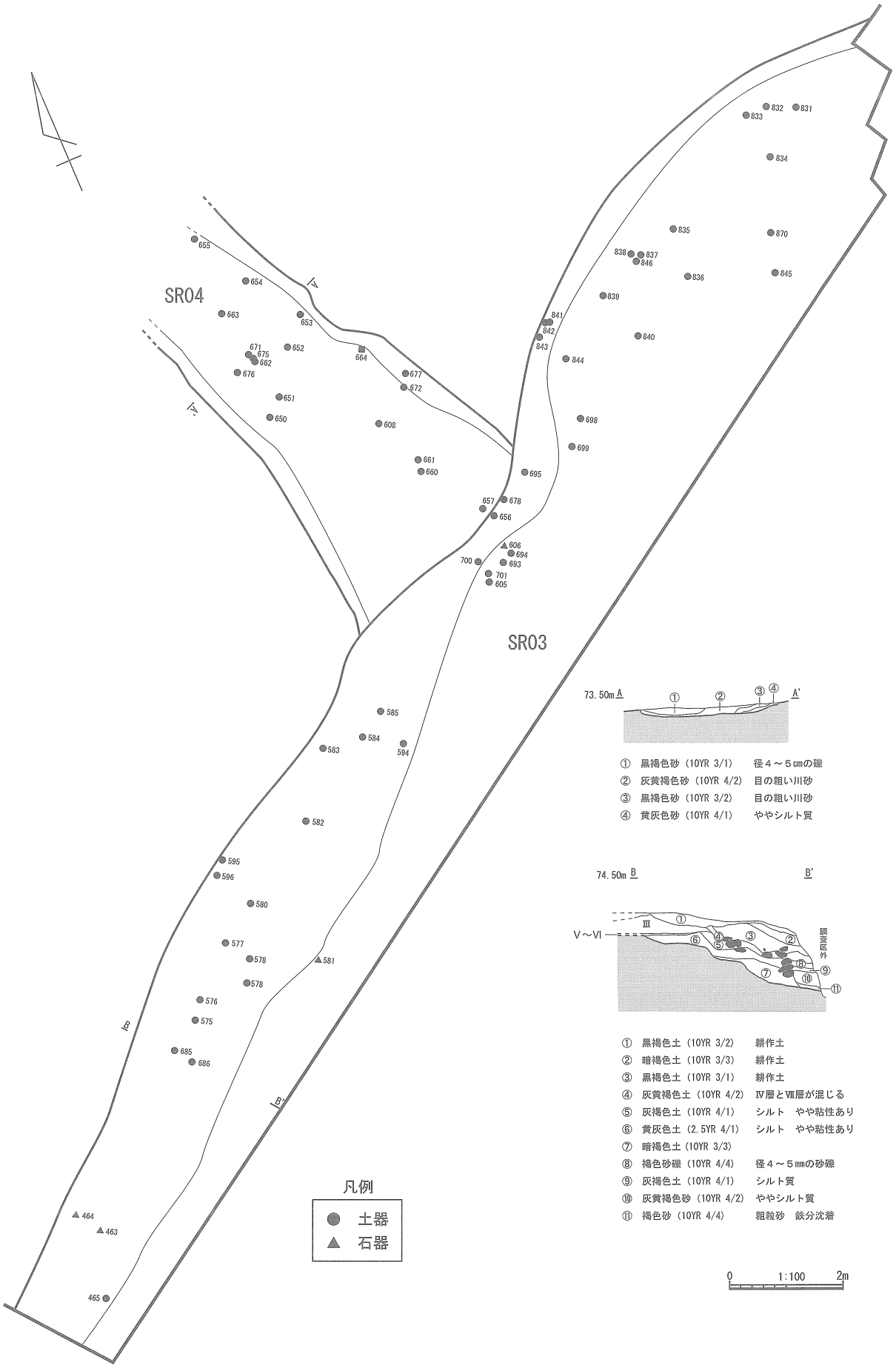


図31　２－２区 Ⅶ層 旧河川実測図（１）

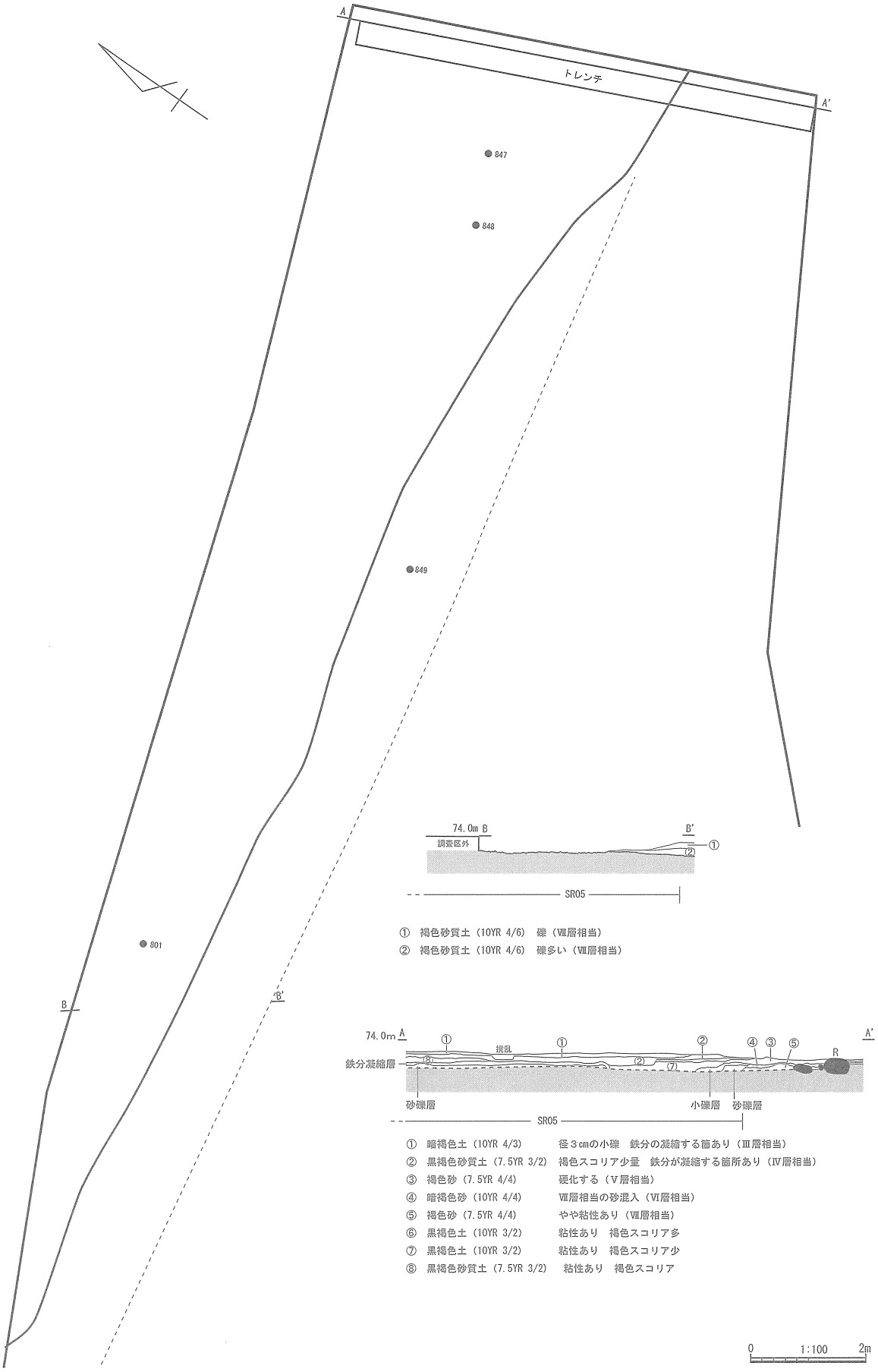


図32　２－２区 Ⅶ層 旧河川実測図（２）

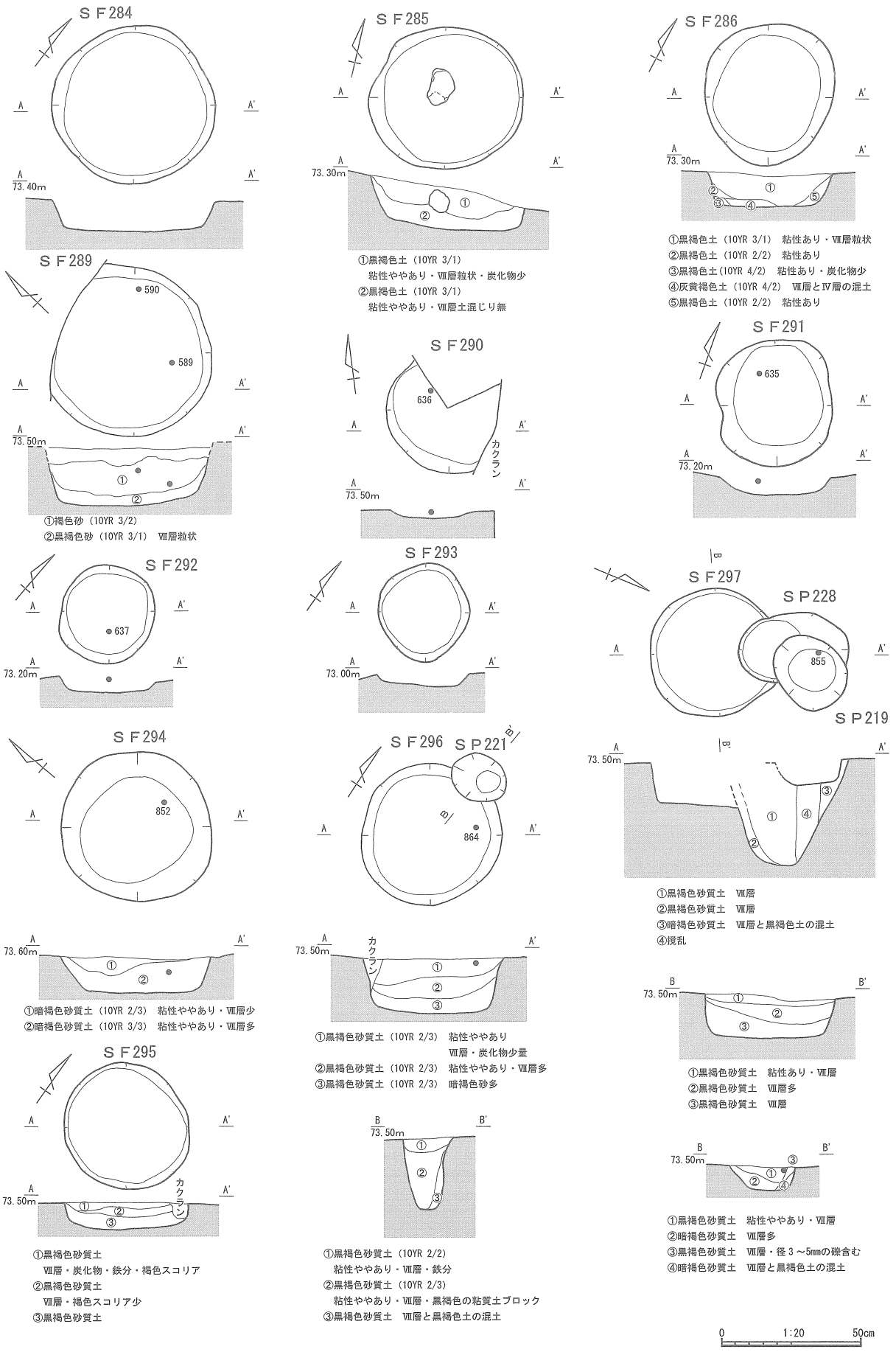


図33　2－2区 Ⅶ層 土坑実測図（1）

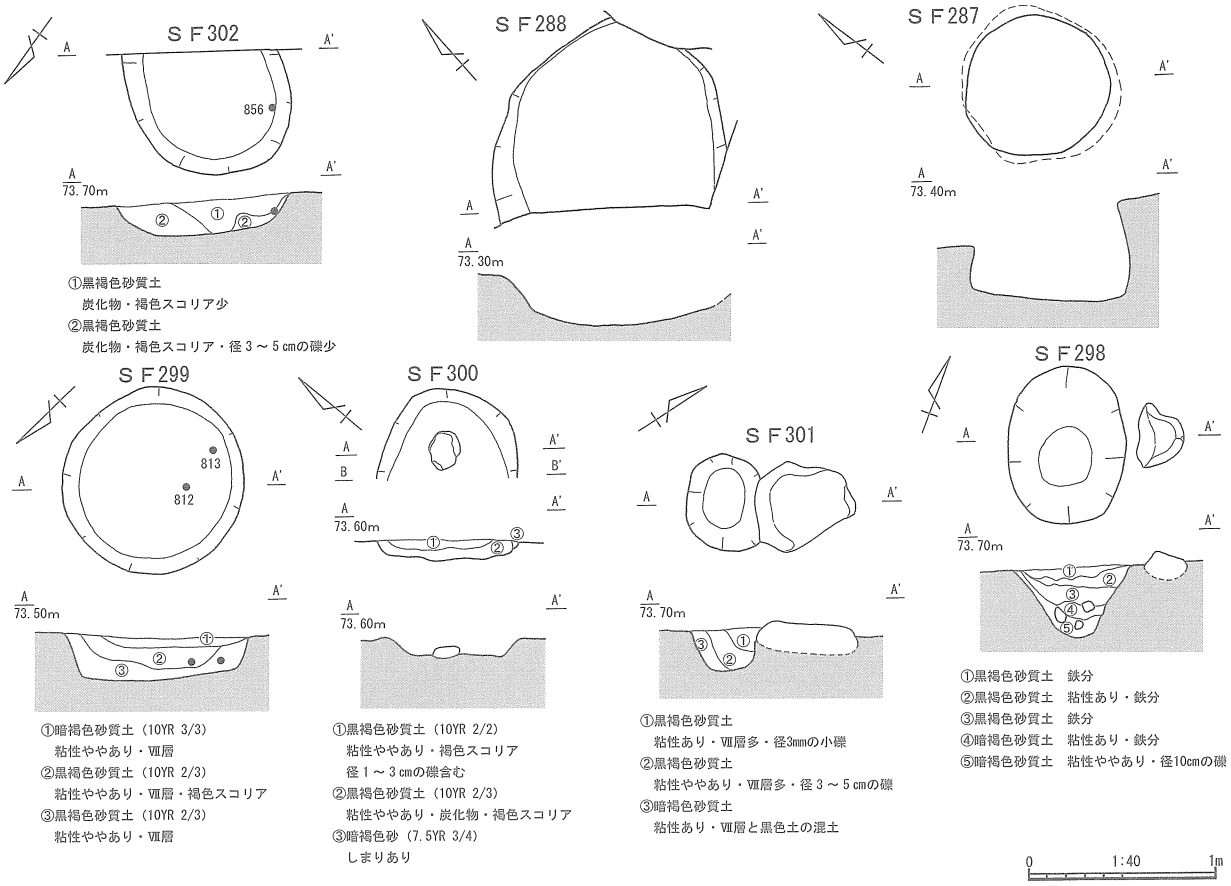


図34　２－２区 Ⅶ層 土坑実測図（２）

表16　２－２区 Ⅶ層 旧河川（ＳＲ）・溝状遺構（ＳＤ）・土坑（ＳＦ）計測表

ＳＲ

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	時期	備考
25		ＳＲ02	２－２	Ｅ－24	Ⅷ			19.50	6.83	0.86		弥生	弥生
31		ＳＲ03	２－２	Ｅ－26 Ｆ－26 Ｇ－25	Ⅶ		図参照	27.6	4.1	1.5	常滑３～４形式甕 常滑９～11形式甕 古瀬戸後Ⅳ新段階鉢 古瀬戸後Ⅳ新～大窯１段階鉢 貿易陶磁青磁碗Ｂ４ 瀬戸美濃大窯４期丸皿 かわらけ	中世～ 近世初頭	護岸用の石積み
31		ＳＲ04	２－２	Ｆ－25 Ｆ－26	Ⅶ		図参照	6.8	4.3	0.2	古瀬戸後Ⅳ直縁大皿 常滑11形式鉢？ かわらけ	中世～ 近世初頭	
32		ＳＲ05	２－２	Ｃ－23 Ｂ－24	Ⅶ		図参照	25.0	5.9	0.3	古瀬戸後Ⅲ期平碗 常滑９～11形式 かわらけ	中世	

ＳＤ

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	時期	備考
		ＳＤ201	２－２	Ｆ－22	Ⅶ			1.06	0.22	0.09		中・近世	

ＳＦ

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	時期	形態	備考
33	７－１	ＳＦ284	２－２	Ｆ－23	Ⅶ	円形	Ⅵ層	(1.17)	(1.13)	0.22		中・近世	Ｄ－１	
33	６－２	ＳＦ285	２－２	Ｅ－22	Ⅶ	円形	Ⅵ層	1.11	1.10	0.29		中・近世	Ｃ	
33		ＳＦ286	２－２	Ｅ－22	Ⅶ	円形	Ⅵ層	1.03	0.91	0.21		中・近世	Ｄ－１	
34		ＳＦ287	２－２	Ｅ－23	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.79	0.75	0.42	かわらけ	中・近世	Ｄ－１	
34		ＳＦ288	２－２	Ｅ－23	Ⅶ	円形	Ⅵ層	(1.2)	(1.13)	(0.29)		中・近世	Ｄ－１	
33	６－３	ＳＦ289	２－２	Ｆ－23	Ⅶ	円形	Ⅵ層	1.27	(1.15)	0.26	かわらけ	中・近世	Ｄ－１	
33		ＳＦ290	２－２	Ｅ－25	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.91	(0.85)	0.05	かわらけ	中・近世	Ｄ－１	
33		ＳＦ291	２－２	Ｅ－25・26	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.95	0.90	0.12	かわらけ	中・近世	Ｄ－１	
33	６－４	ＳＦ292	２－２	Ｆ－25	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.73	0.68	0.09	かわらけ	中・近世	Ｄ－１	
33	６－５	ＳＦ293	２－２	Ｆ－26	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.71	0.66	0.90		中・近世	Ｄ－１	
33		ＳＦ294	２－２	Ｄ－25	Ⅶ	円形	Ⅵ層	1.14	1.08	0.25	かわらけ	中・近世	Ｄ－１	
33		ＳＦ295	２－２	Ｄ－24	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.93	0.87	0.19		中・近世	Ｄ－１	
33	７－６	ＳＦ296	２－２	Ｃ－24	Ⅶ	円形	Ⅵ層	1.01	1.01	0.39	かわらけ	中・近世	Ｄ－１	
33		ＳＦ297	２－２	Ｃ－24	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.97	0.94	0.31		中・近世	Ｄ－１	
34	７－２	ＳＦ298	２－２	Ｂ－24	Ⅶ	楕円形	黒色土と黄色褐色土の互層	(0.83)	(0.62)	(0.37)		中・近世	Ｄ－２	人為的な埋戻し
34	７－３	ＳＦ299	２－２	Ｃ－24・25	Ⅶ	円形	Ⅵ層	1.00	0.96	0.22	かわらけ	中・近世	Ｄ－１	
34	７－４	ＳＦ300	２－２	Ｄ－26	Ⅶ	(楕円形)	Ⅵ層	(0.47)	(0.74)	0.11		中・近世	Ｃ	底面に石　炭化物
34	７－５	ＳＦ301	２－２	Ｂ－24	Ⅶ	円形	黒色土と黄色褐色土の互層	0.53	(0.35)	0.22		中・近世	Ｄ－２	人為的な埋戻し
34		ＳＦ302	２－２	Ｃ－25	Ⅶ	(楕円形)	Ⅵ層	(0.53)	0.82	0.18	羽釜Ａ類	中・近世	Ｃ	

④　小穴

ＳＰ218・ＳＰ220・ＳＰ227・ＳＰ222・ＳＰ225・ＳＰ217・ＳＰ224・ＳＰ226・ＳＰ216（図35）
ＳＰ219・ＳＰ228（図33）

ＳＰ218はＣ－24グリッドで検出された。規模は径0.66m、検出面から底面までの深さ0.79mである。底面で台石が出土、その下部に小穴が検出されており本遺跡で検出された小穴の中では唯一の形態である。また覆土中から、かわらけ、古瀬戸後期の平碗、15世紀代に比定される羽釜Ａ類が出土した。

ＳＰ222はＤ－24グリッドで検出された。規模は径0.31m、検出面から底面までの深さ0.14mである。中央に磨石と礫が樹立した状態で出土した。ＳＰ224はＤ・Ｅ－26グリッドで検出された。規模は径0.44m、検出面から底面までの深さ0.16mを計測した。覆土から古瀬戸後Ⅳ期新段階から大窯３期の擂鉢が出土している。ＳＰ219・ＳＰ220・ＳＰ225・ＳＰ226・ＳＰ227からはかわらけが出土している。かわらけの年代はいずれも15世紀後半の範疇に収まる。ＳＰ218以外の小穴については他の調査区で検出された小穴と形態が類似している。

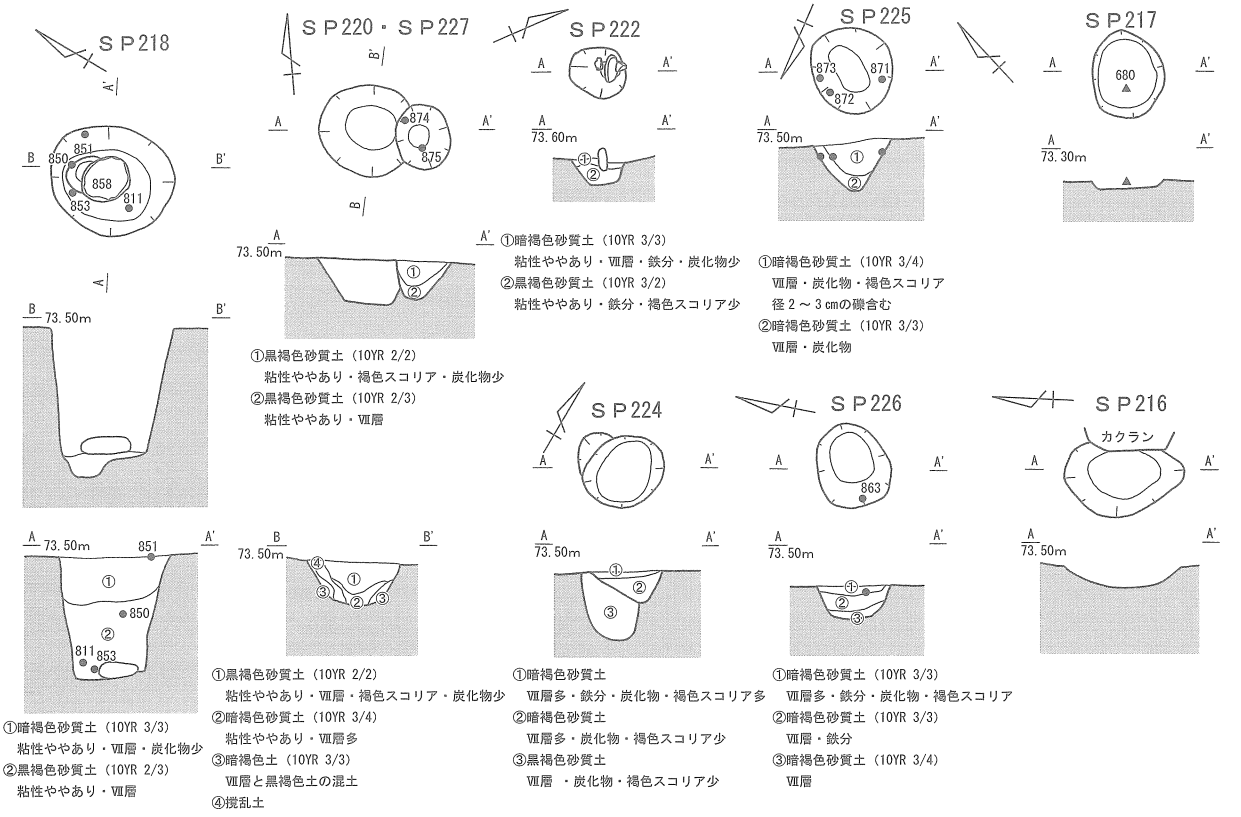


図35　２－２区 Ⅶ層 小穴実測図

0　1:40　1m

表17　２－２区 Ⅶ層 小穴（ＳＰ）計測表

挿図	図版	遺構名	区	グリッド	層位	平面形態	覆土	ＳＦ 長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺物	時期	備考
35		ＳＰ216	２－２	Ｅ－22	Ⅶ	楕円形	Ⅵ層	0.62	(0.35)	0.12		中世	
35	７－７	ＳＰ217	２－２	Ｄ－26	Ⅶ	楕円形	Ⅵ層	0.47	0.37	0.05	凹石	中世	
35		ＳＰ218	２－２	Ｃ－24	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.66	0.57	0.79	台石・かわらけ・羽釜Ａ類(851)・古瀬戸後期平碗(811)	中近世	
33		ＳＰ219	２－２	Ｃ－24	Ⅶ	楕円形	Ⅵ層	0.56	0.47	0.17	かわらけ	中近世	
35		ＳＰ220	２－２	Ｃ－24	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.50	0.50	0.24	かわらけ	中近世	
33	７－６	ＳＰ221	２－２	Ｃ－24	Ⅶ	楕円形	Ⅵ層	0.41	0.34	0.51		中近世	
35	７－８	ＳＰ222	２－２	Ｄ－24	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.31	0.27	0.14	磨石	中近世	磨石・礫が樹立した状態で出土
		ＳＰ223	２－２	Ｄ・Ｅ－26	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.44	(0.29)	0.36	陶器片	中近世	
35		ＳＰ224	２－２	Ｄ・Ｅ－26	Ⅶ	楕円形	Ⅵ層	0.44	0.37	0.16	古瀬戸後Ⅳ新～大窯３擂鉢(863)	中近世	
35		ＳＰ225	２－２	Ｄ－26	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.46	0.43	0.26	かわらけ	中近世	
35		ＳＰ226	２－２	Ｄ－24	Ⅶ	円形	Ⅵ層	0.45	0.38	0.18	かわらけ	中近世	
35		ＳＰ227	２－２	Ｃ－24	Ⅶ	楕円形	Ⅵ層	0.35	0.28	0.22	かわらけ	中近世	
33		ＳＰ228	２－２	Ｃ－24	Ⅶ	楕円形	Ⅵ層	0.79	(0.48)	0.74		中近世	

3　中世から近世の遺物

（1）中世の遺物

瀬戸美濃製品（図36、図37－1～7、写真図版13－1～3）

瀬戸美濃製品は85点出土した。内訳は古瀬戸段階が41点、大窯段階が19点、古瀬戸後Ⅳ新から大窯3期の擂鉢が25点である。その内26点を図化した。

図36－1は古瀬戸前期の瓶子。3～4は古瀬戸後Ⅲに比定される縁釉小皿、5も同じく後Ⅲの灰釉の平碗。6は後Ⅳ古段階の縁釉小皿。7は後Ⅳ段階の縁釉小皿である。8はＳＲ03出土の後Ⅳ新段階の縁釉小皿である。16は後Ⅳ新段階から大窯1期に比定される擂鉢、17～18は後Ⅳ新段階から大窯3期に比定される擂鉢である。

図37－1は大窯1～2期の灰釉の丸皿、2～5は大窯4期の志野丸皿、6～7はいずれも大窯4期から登窯1の志野丸皿である。

志戸呂製品（図37－8）

志戸呂の製品は大窯4期の灰釉の丸皿1点が出土した。

貿易陶磁器（図37－9～11、写真図版13－4）

貿易陶磁器は25点が出土した。内訳は青磁16点、白磁1点、染付8点である。内3点を図化した。図37－9～10は青磁連弁文碗で線描によって連弁を表現するＢ4群。11は染付皿Ｂ群、畳付に砂目が認められる。

常滑製品（図37－12～13、写真図版14－1）

常滑製品は50点が出土した。図37－12は9型式の甕、13は11形式の鉢の底部で自然釉が認められる。

内耳鍋　羽釜　瓦質陶器（図37－14～15、写真図版13－5）

内耳鍋は11点、羽釜は9点、瓦質陶器は2点出土した。図37－14は瓦質の燭台の脚部と判断した。15は内面に意図的に漆を塗布する瓦質陶器。漆を塗布する瓦質陶器については、天目茶碗が想起されるが器形から皿類としておく。

かわらけ（図37－16～22、写真図版14－2～5）

かわらけは369点出土した。接合後の破片数は229点である。小破片が多く図化できたものは6点である。口径が6cm前後の小型のもの（図37－18、19）、11cmの中型のもの（図37－20）、16cmの大型のものが出土している（図37－16）。1－1区出土のかわらけと同様、いずれも15世紀後半～16世紀頃に比定される。

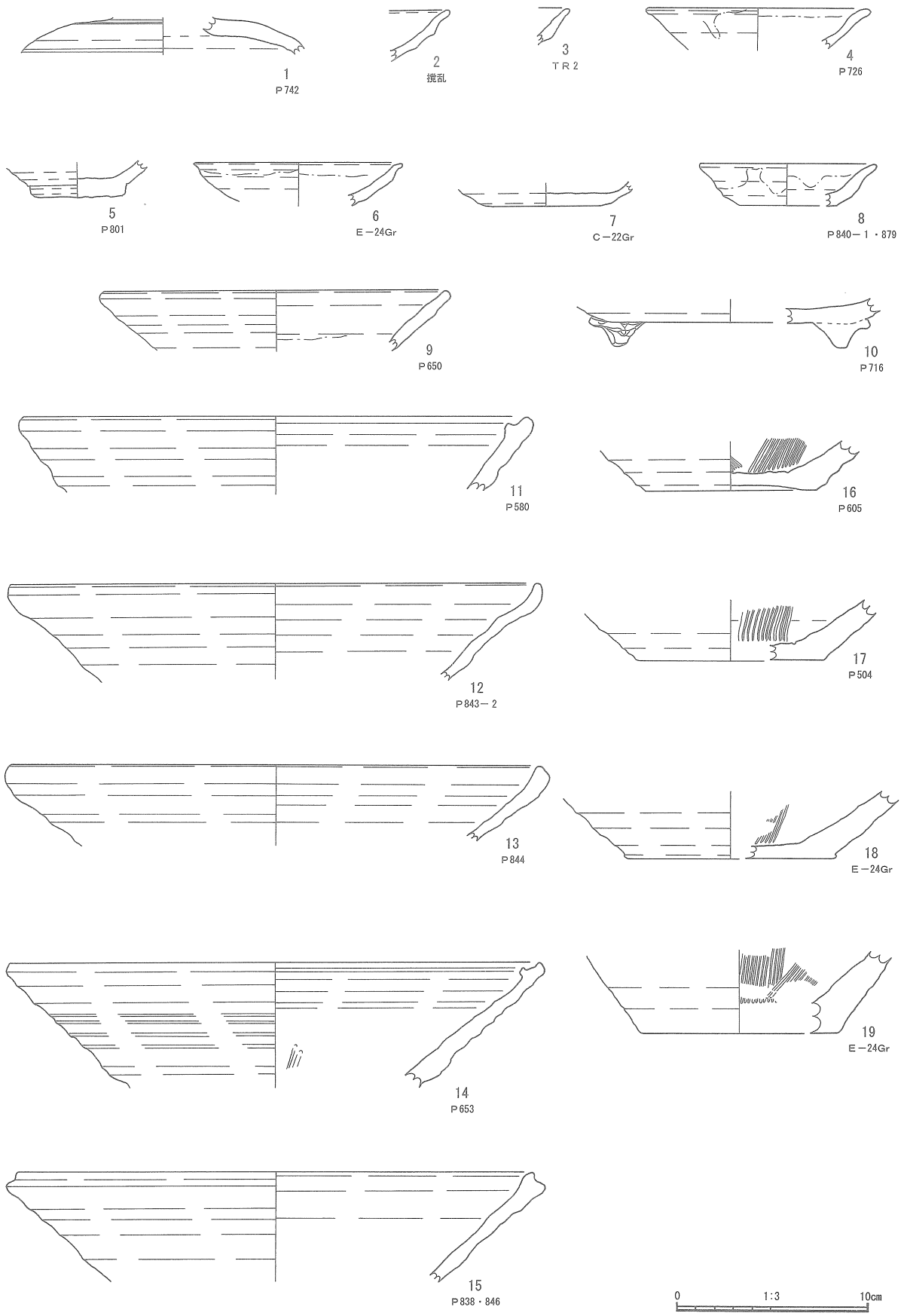


図36　2－2区 出土遺物（1）瀬戸美濃製品

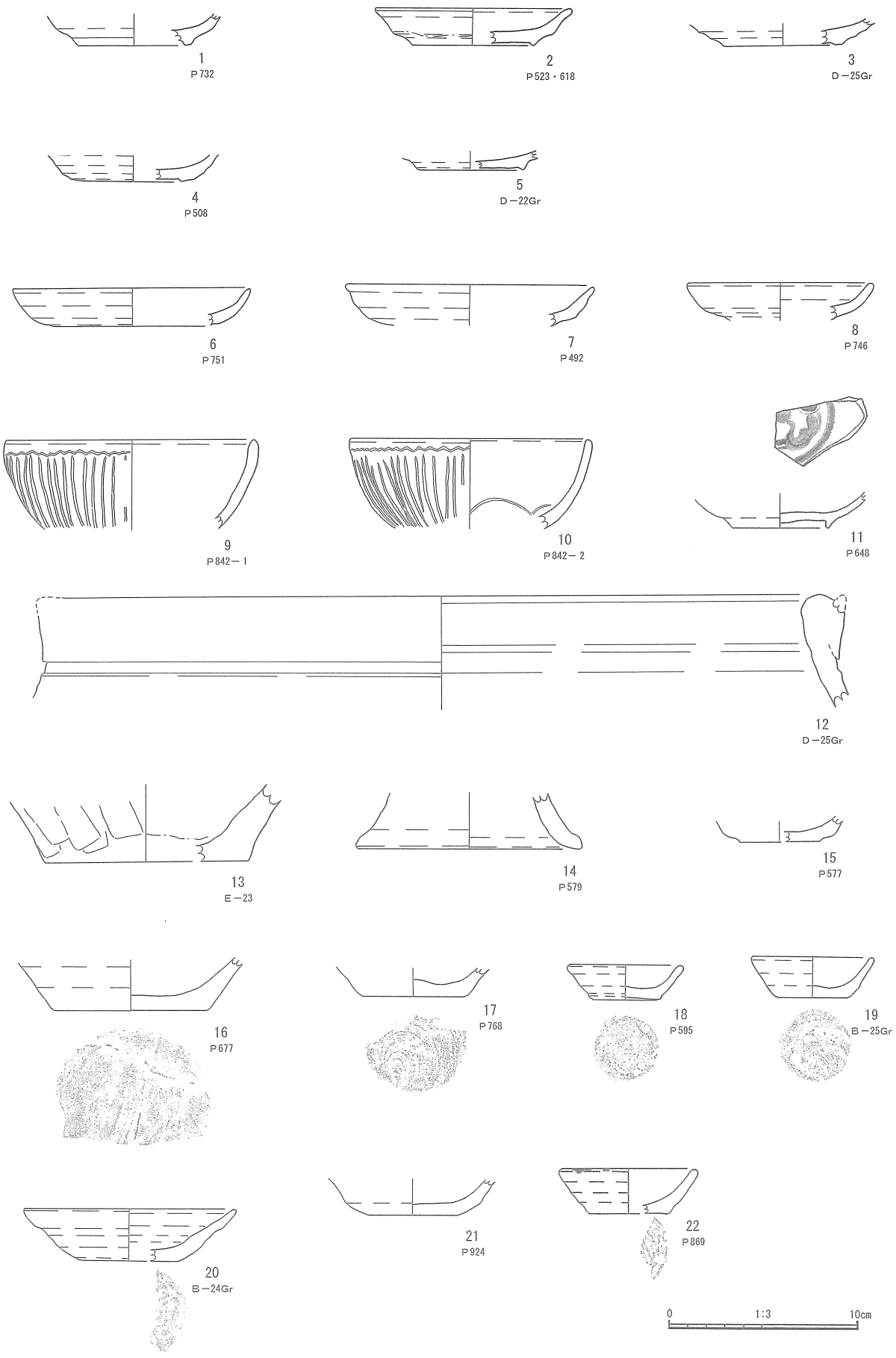


図37　2－2区 出土遺物（2）瀬戸美濃製品・志戸呂製品・貿易陶磁器・常滑製品・瓦質陶器・かわらけ

（２）近世の遺物（図38－１～10、写真図版14－６）

近世の陶磁器類は60cm×40cm×10cmのコンテナで約１箱分出土したが、１－１区と同様に図化できたものはわずかである。

図38－１は連房式登窯期の志野丸碗、４は肥前系陶器の碗、いわゆる唐津の刷毛目碗で18世紀代の製品、５は瀬戸美濃系の鉄釉の香炉。６は肥前系の仏飯器。７は肥前系の紅猪口、８も瀬戸美濃系の紅猪口でいずれも19世紀に下る製品。９は肥前系の筒型碗、10は肥前系の丸碗である。

近世の遺物は18世紀後半から19世紀の製品が出土遺物の中で高い割合を占めている。

（３）金属製品・石製品

金属製品（図38－11～16、写真図版14－７）

銭貨（図38－11～15）

図38－11は初鋳年代1038年の皇宋通寳（真書）、12は初鋳年代1054年の至和通寳（篆書）、13は初鋳年代1056年の嘉祐通寳（真書）である。12、13はそれぞれＳＲ02、ＳＲ03の出土である。14は初鋳年代1094年の紹聖元寳（行書）、15は初鋳年代1368年の洪武通寳である。

２－２区で出土した銭貨は旧河川及び包含層からの出土であるが、皇宋通寳、紹聖元寳、洪武通寳については第Ｉ期現地調査の３区において副葬品として土坑から出土している（註１）。また既述した通り、１－１区出土の銭貨は寛永通寳が主体であったのに対し、２－２区においては渡来銭が主体を成すという特徴が認められた。

註１　鈴木　譲　1998『大平遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　143頁

石製品（図38－18、写真図版15－２）

図38－18は流紋岩製の手持ちの砥石である。上下を欠損しているが現存する長さが10.7cm、幅が2.9cm、厚さは最大で1.4cmを計る。長軸の断面形は二等辺三角形を呈しており使用面を反転させながら使い込まれている。

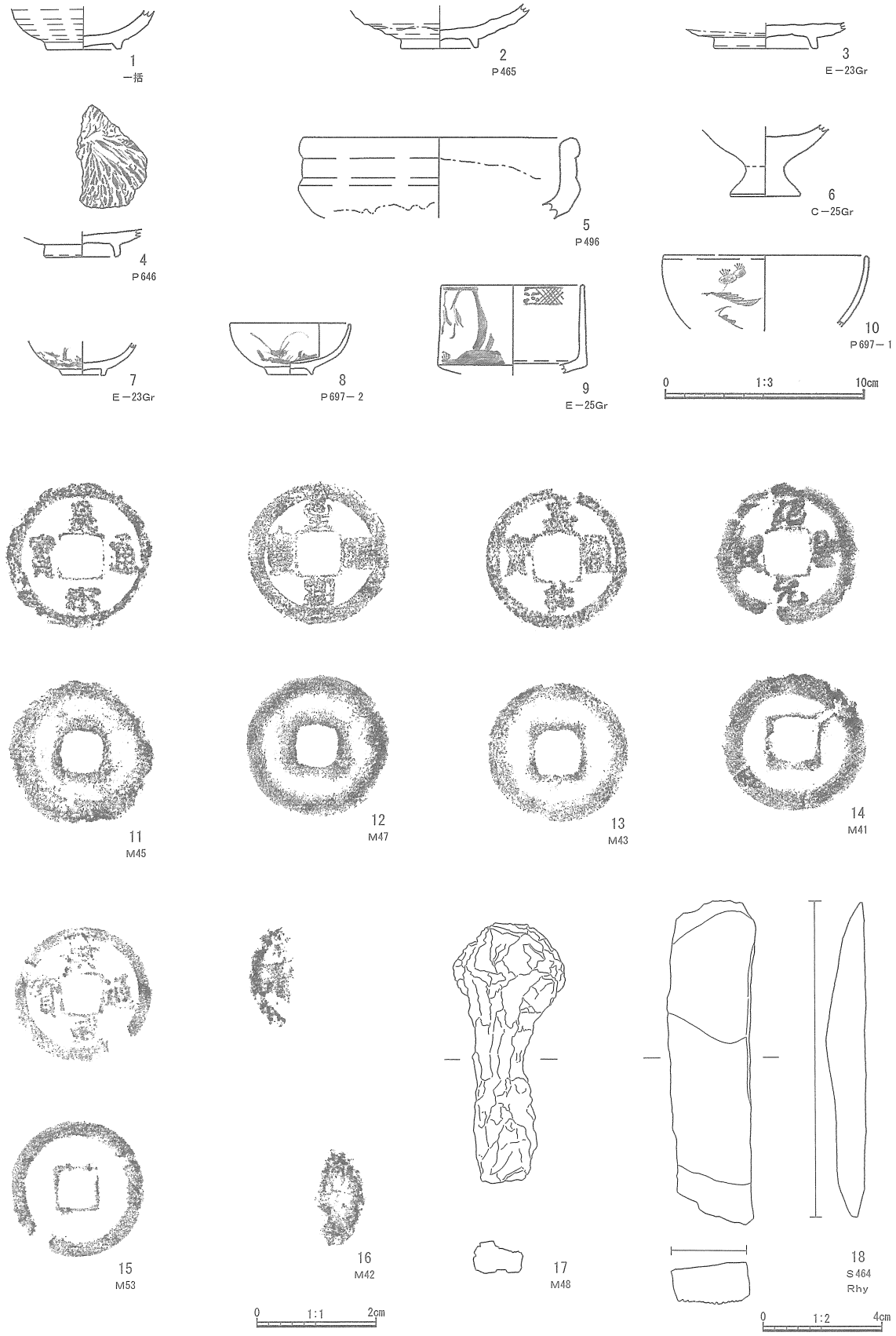


図38　2－2区 出土遺物（3）近世陶磁器・金属製品・石製品

表18　2－2区 出土遺物観察表

瀬戸美濃製品　観察表

挿図	写真図版	区	番号	器種	遺構・グリッド	層位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	時期	備考
36－1	13－1	2－2	742	瓶子	B－24	Ⅳ	－	－	－	オリーブ黄 7.5Y 6/3	古瀬戸前期	－
36－2	13－1	2－2	－	縁釉小皿	撹乱	－	－	－	－	黄橙 7.5YR 7/8	古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ	－
36－3	13－1	2－2	－	縁釉小皿	TR02	－	－	－	－	浅黄 5Y 7/3	古瀬戸後Ⅲ	－
36－4	13－1	2－2	726	縁釉小皿	C－24	Ⅳ	(11.4)	－	－	暗オリーブ 5Y 4/4	古瀬戸後Ⅲ	灰釉
36－5	16－1	2－2	801	平碗	SR05	－	－	4.6	－	浅黄 5Y 7/3	古瀬戸後Ⅲ	灰釉
36－6	13－1	2－2	－	縁釉小皿	E－24	－	(10.8)	－	－	明黄褐10YR 6/6	古瀬戸後Ⅳ古	灰釉
36－7	13－1	2－2	－	縁釉小皿	C－22	－	－	(5.4)	－	浅黄 2.5Y 7/3	古瀬戸後Ⅳ	－
36－8	15－1	2－2	840－1・879	縁釉小皿	SR03	－	(9.2)	(5.0)	(2.2)	オリーブ黄 7.5Y 6/3	古瀬戸後Ⅳ新	灰釉
36－9	16－1	2－2	650	直縁大皿	SR04	－	(18.0)	－	－	オリーブ黄 5Y 6/4	古瀬戸後Ⅳ	－
36－10	13－1	2－2	716	盤類	B－24	Ⅲ	－	(13.0)	－	灰白 10YR 8/2	古瀬戸後期	－
36－11	15－2	2－2	580	擂鉢	SR03	－	(26.5)	－	－	灰赤 10R 4/2	古瀬戸後Ⅳ新	－
36－12	15－2	2－2	843－2	擂鉢	SR03	－	(27.8)	－	－	暗赤灰10R 4/1	古瀬戸後Ⅳ新	－
36－13	15－2	2－2	844	擂鉢	SR03	－	(28.0)	－	－	暗赤灰10R 4/1	古瀬戸後Ⅳ新	－
36－14	15－2	2－2	653	擂鉢	SR04	－	(28.0)	－	－	灰褐7.5YR 4/2	古瀬戸後Ⅳ新	－
36－15	15－2	2－2	838・846	擂鉢	SR03	－	(27.2)	－	－	暗赤灰 5R 3/1	大窯1	－
36－16	15－2	2－2	605	擂鉢	SR03	－	－	(9.0)	－	紫灰 5RP 5/1	古瀬戸後Ⅳ新～大窯1	－
36－17	13－2	2－2	－	擂鉢	TR02	Ⅳ	(10.0)	－	－	暗褐10YR 3/4	古瀬戸後Ⅳ新～大窯3	－
36－18	13－2	2－2	504	擂鉢	D－22	Ⅳ	－	(10.6)	－	暗褐10YR 3/4	古瀬戸後Ⅳ新～大窯3	－
36－19	13－2	2－2	－	擂鉢	E－24	－	－	(10.2)	－	暗紫灰 5RP 4/1	大窯4	－
37－1	13－3	2－2	732	丸皿か端反皿	B－25	Ⅳ	－	(5.9)	－	灰白 10Y 8/2	大窯1～2	灰釉
37－2	13－3	2－2	523・618	志野丸皿	D－23	Ⅳ	(10.1)	－	－	灰白 5Y 8/2	大窯4	－
37－3	13－3	2－2	－	志野丸皿	D－25	－	－	(6.2)	－	灰白 2.5Y 8/2	大窯4	－
37－4	13－3	2－2	508	志野丸皿	E－22	Ⅴ	(9.1)	(5.2)	－	灰白 2.5Y 8/2	大窯4	－
37－5	13－3	2－2	－	志野丸皿	D－22	－	－	(5.6)	－	灰白 2.5Y 8/1	大窯4	－
37－6	13－3	2－2	751	志野丸皿	B－25	Ⅳ	(12.6)	－	－	灰白 2.5GY 8/1	大窯4～連房式登窯	－
37－7	13－3	2－2	492	志野丸皿	E－23	Ⅳ	(13.2)	－	－	灰白 5GY 8/1	大窯4～連房式登窯1	－

志戸呂製品　観察表

37－8		2－2	746	丸皿	B－25	Ⅳ	(9.6)	－	－	暗オリーブ 5Y 4/4	大窯4	灰釉

貿易陶磁器　観察表

37－9	15－1	2－2	842－1	青磁　連弁文碗	SR03	－	(13.1)	－	－	灰オリーブ 7.5Y 5/3	15C後半	越州窯系　B4
37－10	15－1	2－2	842－2	青磁　連弁文碗	SR03	－	(12.6)	－	－	明緑灰 10GY 7/1	15C後半	越州窯系　B4
37－11	13－4	2－2	648	染付皿	F－25	Ⅴ	－	(5.2)	－	灰白 5Y 8/1	16C中	B群　砂目

常滑製品　観察表

37－12	14－1	2－2	－	甕	D－25	－	(42.6)	－	－	灰褐 5YR 4/2	16C前～中	9型式
37－13	14－1	2－2	－	鉢か	E－23	表採	－	(10.6)	－	にぶい橙 2.5YR 6/4	16C前～中	11型式　自然釉

瓦質陶器　観察表

37－14	15－1	2－2	579	燭台	SR03	－	－	(11.8)	－	灰白 2.5Y 8/2	－	－
37－15	15－1	2－2	577	皿類	SR03	－	－	(4.2)	－	黒 2.5Y 2/1	－	漆塗りの痕跡

かわらけ　観察表

37－16	14－5	2－2	677	かわらけ	SR04	－	－	(8.3)	－	橙 7.5YR 7/6	15C後半～	－
37－17		2－2	768	かわらけ	B－25	Ⅵ	－	(5.3)	－	橙 5YR 6/6	15C後半～	－
37－18	14－4	2－2	595	かわらけ	SR03	－	(5.7)	(3.4)	1.85	橙 7.5YR 7/6	15C後半～	－
37－19	14－3	2－2	－	かわらけ	B－25	－	(6.2)	(3.8)	2.15	にぶい橙 5YR 6/3	15C後半～	－
37－20		2－2	－	かわらけ	B－24	－	(11.0)	(5.0)	2.7	橙 7.5YR 7/6	15C後半～	－
37－21		2－2	924	かわらけ	TR05	Ⅵ	－	(4.4)	－	橙 7.5YR 7/6	15C後半～	－
37－22		2－2	869	かわらけ	E－26	Ⅶ	(7.0)	(4.2)	2.4	橙 7.5YR 7/6	15C後半～	口縁部にすす

近世遺物　観察表

挿図	写真図版	区	番号	器種	遺構・グリッド	層位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	産地・時期等	備考
38－1	14－6	2－2	一括	志野丸碗	TR01/D－24	－	－	3.8	－	灰白 5Y 8/2	瀬戸美濃　17C代	－
38－2	15－1	2－2	465	丸碗	SR03	－	－	3.8	－	浅黄 2.5Y 7/3	瀬戸美濃　18C代	－
38－3	14－6	2－2	－	皿類	E－23	－	－	5.2	－	灰白 5GY 8/1	瀬戸美濃　18C代	－
38－4	14－6	2－2	646	刷毛目碗	F－25	Ⅴ	－	(3.6)	－	極暗褐 5YR 2/3	肥前系　18C代	－
38－5	14－6	2－2	496	香炉	G－25	Ⅳ	(13.6)	－	－	暗褐 10YR 3/3	瀬戸美濃	－
38－6	14－6	2－2	－	仏飯具	C－25	－	－	3.4	－	明緑灰 10GY 8/1	肥前系	－
38－7	14－6	2－2	－	紅猪口	E－23	－	－	(2.2)	－	灰白 N8/	肥前　19C代	－
38－8	14－6	2－2	697－2	紅猪口	G－24	Ⅴ	(6.1)	(2.3)	(2.6)	明青灰 5B 7/1	瀬戸美濃　19C中	－
38－9	14－6	2－2	－	筒型碗	E－25	－	(7.2)	－	－	灰白 2.5Y 8/1	肥前　18C中	－
38－10	14－6	2－2	697－1	丸碗	G－24	Ⅴ	(10.3)	－	－	灰白 N8/	肥前	－

銭貨　観察表

挿図	写真図版	区	番号	名称	遺構・グリッド	層位	法量(cm) 直径	重量	孔径	書体	初鋳年代	備考
38－11	14－7	2－2	M45	皇宋通寶	G－25	Ⅴ	2.4	2.7	0.7	真書	1038	－
38－12	14－7	2－2	M47	至和通寶	SR02	Ⅴ	2.4	2.8	0.7	篆書	1054	－
38－13	14－7	2－2	M43	嘉祐通寶	SR03	－	2.4	2.3	0.8	真書	1056	－
38－14	14－7	2－2	M41	紹聖元寶	D－23	Ⅴ	2.4	2.3	0.75	行書	1094	－
38－15	14－7	2－2	M53	洪武通寶	D－25	撹乱	2.3	2.0	0.7	－	1368	－
38－16	14－7	2－2	M42	不明	SR03	－	(2.4)	0.5	－	－	－	－

石製品　観察表

挿図	写真図版	区	番号	種別	遺構・グリッド	層位	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	色調	石材	備考
38－18	15－2	2－2	S464	砥石	SR03	－	10.7	2.9	1.4	灰黄 2.5Y 7/2	流紋岩	－

その他　観察表

挿図	写真図版	区	番号	種別	遺構・グリッド	層位	法量(cm) 長さ	幅	重量(g)	断面形	分類	備考
38－17	14－7	2－2	M48	－	F－25	Ⅴ	8.8	3.8	56.5	－	－	－

表19　2－2区 中世出土遺物一覧表

2－2区　瀬戸美濃　出土一覧

器種名		古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期					古瀬戸計	古瀬戸後IV～大窯3	大窯製品									合計
		I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV古	IV新			1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後	大窯計	
碗類	天目茶碗														0										0	0
	鉄釉丸碗														0								1		1	1
	灰釉平碗											4			5										0	5
										1															0	
皿類	灰釉腰折皿													2	2										0	2
	灰釉縁釉小皿											3	7	3	16										0	16
										1			1													
										1																
	灰釉丸皿														0					1			14		15	15
	鉄絵皿														0								2		2	2
	端反皿か丸皿														0			1							1	1
	鉄釉縁釉小皿												2		2										0	2
盤類	灰釉直縁大皿												1		1										0	1
	灰釉折縁深皿													1	1										0	1
	灰釉卸目付大皿												3		3										0	3
	灰釉盤類											3			3										0	3
	鉄釉直縁大皿												1		1										0	1
卸皿	灰釉卸皿							1							1										0	1
擂鉢	擂鉢														0	25									0	25
																									0	
壺甕類	灰釉瓶子			1											1										0	1
	灰釉小壺							1							1										0	1
	合子か双耳小壺														1										0	1
	灰釉壺か瓶											3			3										0	3
合計															41	25									19	85

2－2区　志戸呂　出土一覧

器種名		古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期					古瀬戸計	古瀬戸～大窯	大窯製品									合計
		I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV古	IV新			1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後	大窯計	
皿類	灰釉丸皿														0								1		1	1
	灰釉縁釉小皿														0										0	0
碗類	鉄釉天目茶碗														0										0	0
	灰釉平碗														0										0	0
不明	灰釉不明														0										0	0
合計															0										0	1

2－2区　貿易陶磁器　出土一覧

種別	器種名	産地	分類	年代	破片数
青磁	碗類	同安窯系	C類	12C後～13C前	1
		同安窯系	不明	不明	1
		龍泉窯系	A６類	13C前	1
		龍泉窯系	B１類	13C中～14C前	7
		龍泉窯系	B２類	15C	1
		龍泉窯系	B４類	15C後	3
		龍泉窯系	D１類	14C後	1
		不明	不明	不明	1
白磁	皿類		B群	15C前	1
染付	碗類		B２群	16C中	1
			C群	15C後～16C前	1
		漳州窯系	C群		1
	皿類		B１群	15C中	3
	不明			不明	2
合計					25

2－2区　かわらけ　出土一覧

器種	部位	年代	破片数
かわらけ	破片数	15C末～16C	369
	接合後破片数	15C末～16C	229
合計			369

2－2区　内耳鍋　出土一覧

器種	部位	年代	破片数
内耳鍋	口縁部	16C位	2
	体部	16C位	9
合計			11

2－2区　渥美　出土一覧

産地	器種	部位	型式	年代	破片数
渥美	甕	体部	不明	不明	0
合計					0

2－2区　常滑　出土一覧

産地	器種	部位	型式	年代	破片数
常滑	甕	体部	３～４形式か	12C後～13C前	4
			８形式	14C中～15C初	0
			９～11形式	16C初～16C中	29
			９型式	16C初～16C中	1
			11形式	16C初～16C中	0
	鉢	口縁部	11形式	16C初～16C中	2
		体部	８形式	14C中～15C初	1
	甕か鉢	体部	11形式	16C初～16C中	13
合計					50

2－2区　羽釜　出土一覧

器種	部位	型式	年代	破片数
羽釜	口縁部	A類	15C位	2
	体部	A類	15C位	7
合計				9

2－2区　瓦質陶器　出土一覧

種別	器種	部位	型式	年代	破片数
瓦質	燭台	脚部		16Cか	1
瓦質	皿類	底部	漆付着	16Cか	1
合計					2

参考文献

愛知考古学談話会　1988 『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題－縄文から弥生－』資料編Ⅰ
愛知考古学談話会　1988 『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題－縄文から弥生－』資料編Ⅱ・研究編
池本正明・谷口雅夫・藤澤良祐・松澤和人　1987 『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅵ』 瀬戸市歴史民俗資料館
市川正史・恩田勇・谷口肇　1994 『宮ヶ瀬遺跡Ⅳ』 神奈川県立埋蔵文化財センター
小野真一　1970 「駿東郡長泉町南一色出土の弥生式土器」『駿豆考古　第10号』 駿豆考古学会
小野正敏・藤澤良祐編　2005 『中世の伊豆・駿河・遠江－出土遺物が語る社会』 高志書院
金子健一　2000 「土師質煮炊具からみた中世の東海と東国」『研究紀要第８輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
甲元真之・山崎純男　1984 『弥生時代の知識』 考古学シリーズ５　東京美術
菊川シンポジウム実行委員会　2005 『静岡県の中世社会』〈資料編〉
菊川シンポジウム実行委員会　2005 『静岡県の中世社会』〈発表要旨・論考編〉
（財）愛知県埋蔵文化財センター　1996 『平成７年度　年報』
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　1996 『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター設立５周年企画展図録
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　1997 『瀬戸・美濃系大窯とその周辺　大窯生産の成立と展開』
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　2002 『江戸時代の瀬戸窯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　2003 『江戸時代の美濃窯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　2004 『江戸時代の瀬戸・美濃窯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　2005 『江戸時代の瀬戸・美濃－三都と名古屋－』
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録
（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　2006 『江戸時代のやきもの－生産と流通－』 シンポジウム資料集
（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　2006 『江戸時代のやきもの－生産と流通－』 企画展図録
佐賀県立九州陶磁文化館　1984 『国内出土の肥前陶磁器　古唐津・伊万里の流通をさぐる』
設楽博己　1995 「東日本における弥生時代の始まり」『展望考古学』 考古学研究会
関俊彦　1985 『弥生土器の知識』 考古学シリーズ16　東京美術
中世土器研究会　1995 『概説　中世の土器・陶磁器』
突帯文土器研究会　1993 『突帯文土器から条痕文土器へ－伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まり－』
中野晴久　1986 「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館　研究紀要Ⅱ』 常滑市教育委員会
長泉町郷土誌増補版編さん委員会　1992 『長泉町史』 上巻　長泉町
原茂光・池谷初恵　2002 『史跡北条氏邸発掘調査報告Ⅰ－御所之内遺跡第13次発掘調査－』 韮山町教育委員会
平井　勝　1992 『弥生時代の石器』 考古学ライブラリー64　ニューサイエンス社
藤澤良祐　1988 『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅶ』 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　1989 『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅷ』 瀬戸市歴史民俗資料館
山川一年・藤澤良祐・山下峰司　1991 『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅹ』 瀬戸市歴史民俗資料館
弥生土器を語る会　1996 『YAY!（やいっ）弥生土器を語る会20回到達記念論文集』

第Ⅳ章　ま　と　め

第１節　弥生時代の遺構・遺物について

大平遺跡では、弥生時代前期末に比定される遺構、遺物が発見されており、これは当該期の検出例としては、静岡県東部に限らず県内全域を通してみても稀少な事例と言える。また本遺跡周辺から遠賀川系土器の出土例が報告されていることと併せても、本遺跡の遺構、遺物は注目できると思われる。

そこで本節では、本遺跡で検出された弥生時代前期末の遺構、遺物について若干の考察を行う。

１　検出された遺構

本遺跡から検出された弥生時代前期末の遺構は、第Ⅱ期現地調査時において４区Ｊ－20グリッドで検出された住居１軒（１号住居跡）（図39）である。住居の規模は、一辺が約3.9mで、平面形は円形あるいは隅丸方形を呈する。住居内からは、柱穴の可能性がある小穴11基が検出され、また中央付近では50cm×30cmの炉址も検出されている（註１）。

覆土から出土した押圧剥離に伴う貝殻状の剥片は、石器の製作が行われていたことを示唆し、焼土の堆積が浅いこと、小穴が浅いことと併せると、この住居が定住用というより狩猟や移動の際の一次的なキャンプ地として利用されていたことを推測させる。

また、Ｈ－21・Ｊ－20グリッドでは、黒曜石製の剥片が半径１ｍの範囲に集中して出土した箇所が２カ所確認されている（ＳＸ03、ＳＸ04）。さらに周囲径３ｍからは、土器と炭化物が集中して出土しており、１号住居の検出状況と類似性が認められることから、これらの遺構についても住居の可能性が指摘されている。

２　出土した遺物

遺物は、第Ⅱ期現地調査時、上述の１号住居跡から出土した条痕文系の甕形土器、黒曜石製の石鏃及び剥片、輝石安山岩製の石皿、炭化物、黒曜石集中箇所（ＳＸ03、ＳＸ04）とその周辺から出土した土器と黒曜石製の石鏃及び剥片、そして第Ⅲ期現地調査において包含層から出土した甕形土器（図26）および黒曜石製の石鏃と楔形石器、火山礫凝灰岩製の磨石、輝石安山岩製の礫器（図27）である。

１号住居で検出された炭化物については、『大平遺跡Ⅱ』において、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施している。その測定結果によると、１号住居で検出された炭化物の^{14}Ｃ年代は、2350±25yrBP、歴年代較正値ではcal BC 400を示した（註２）。

（１）甕型土器について

１号住居から出土した甕形土器は、口縁部から胴下部までの約１／３が残存する。口径は約28cmで、口縁部に山形突起、口縁端部に楕円形の押捺が施される。山形突起は４単位が残存し、推定で８単位となる。外面はナデ調整の後、４本単位の茎束状原体による条痕を、口縁部は斜方向、胴部は縦方向に施す。内面は口縁部がミガキ、胴中位がケズリ、胴下位はケズリの後ナデ調整を行う。

包含層から出土した甕形土器は、外面の調整は同様であるが胴部が緩やかに外反する。また、別個体と思われる波状口縁の破片が１点出土しており、少なくとも数個体の甕形土器が出土している。

第Ⅲ期調査において出土した甕型土器も口縁部から胴下部までの約１／３が残存し、さらに底部の一部も出土した。口縁部から胴部の形状、調整から上記の土器と同様のものと判断できる。しかし、第Ⅱ期現地調査で出土した土器に比してやや器壁が薄いことや口唇部に違いが認められること、接合関係に

あるものが認められなかったことから別個体の土器であると考えられる。いずれも弥生時代前期末に比定される縄文時代晩期の氷式土器の流れを引くものである。

（2）黒曜石製の石鏃・剥片について

1号住居からは、黒曜石製の石鏃と剥片、輝石安山岩製の石皿が出土している。石鏃は飛行機型で、長さ24㎜、幅14㎜、厚さ4㎜、重さ0.5ｇを計る。欠損は認められない。その他3点の石鏃が包含層から出土しているがいずれも欠損している。

第Ⅲ期現地調査においても黒曜石製石鏃1点および楔形石器、使用痕剥片、その他石器制作に伴うと考えられる剥片が出土した。石鏃は長さ24㎜、幅15.5㎜、厚さ6.5㎜、重さ1.8ｇを計り、形態は平面がやや不整な三角形で未製品の可能性が高い。

これらの黒曜石については、独立行政法人沼津工業高等専門学校の望月明彦教授に蛍光X線による原産地推定分析を依頼した。分析結果の詳細は別表によるが（表20)、第Ⅱ期現地調査時の包含層出土の石鏃1点を除いて（註3)、全て長野県諏訪星ヶ台群の黒曜石を使用していることが判明した。

3　遺構と遺物から

大平遺跡で検出された住居は、形態、検出状況から狩猟や移動の際の一時的なキャンプ地と推測される。その住居から出土した甕形土器は、長野県小諸市氷遺跡を指標とする氷式土器の流れを引くものである。また、石鏃と剥片類は長野県諏訪地方の星ヶ台群産の黒曜石を石材としていた。

黒曜石に注目すると、静岡県東部においては、旧石器時代から縄文時代の遺跡が富士山の南方に位置する愛鷹山南麓に数多く点在する。近年、新東名高速道路の建設に伴って発掘調査が行われ、蛍光X線の原産地推定分析により、当時の石器の製作に関わる人の移動が徐々に明らかにされつつある。黒曜石の入手先については、和田峠、霧ヶ峰、蓼科などの信州系、天城峠などの伊豆半島系、恩馳島などの神津島系、柏峠などの箱根系といった産地があり、各遺跡や時期により出土傾向に特色が認められる。特に信州産の黒曜石は、旧石器、縄文時代を通して出土量が多く、当地域と信州との関わりの深さを示唆している。石材の入手地である信州と石材の消費地である静岡県東部へのルートは、富士西麓を南北に流れる富士川が想定されている。

一方、条痕文系土器の出土傾向に注目すると、樫王式、水神平式が主体となって出土するのは、静岡県中部に位置する天王山遺跡（静岡市清水区）あたりを東限とし、東部の山王遺跡（富士川町）では氷Ⅰ式系土器が主体を占め、後続する丸子式の内容に影響を与えている可能性が指摘されている（註4)。

また、土器の胎土に含まれる雲母については、在地の土器には類例がなく、丹沢・箱根山系あるいは富士川流域から甲府盆地のいずれかの土地から搬入されたものと考えられるが、本遺跡で出土した弥生土器にも雲母が含まれており搬入品の可能性が高いと考えられる。

さらに、本遺跡から出土した弥生時代の石器の器種は、縄文時代の様相と大きな差違が認められない。長野県においても条痕文系土器の段階では、弥生石器に加えて縄文時代の様相を示す石器が継続して使用されていることが指摘されている（註4)。

こうしてみると、本地域周辺における弥生時代前期の条痕文系土器の出土傾向は、旧石器、縄文時代から続く黒曜石の原産地と消費地の関係に関連があるように思われる。

大平遺跡から出土した黒曜石製の石器と剥片のほとんどが長野県諏訪星ヶ台群産であること、氷式の流れをくむ条痕文系土器が出土したこと、胎土に雲母を含む土器が富士川流域からの搬入品である可能性があることは、本地域における該期の人とモノの移動について示唆的であり、少なくとも信州地方との深い関わりを想起させるには十分であろう。

また、1号住居から検出された炭化物の年代測定の結果を併せると、本地域において縄文時代の文化を主体としていた人々の生活が、弥生時代の文化を受容し、移行していくという過程が想起される。このような時期の様子を考える上で、大平遺跡は貴重な一例になったと言えよう。

註1　佐野暢彦・水上綾子　2001 『大平遺跡Ⅱ』 第7図参照
註2　佐野暢彦・水上綾子　2001 『大平遺跡Ⅱ』 36頁 参照
註3　佐野暢彦・水上綾子　2001 『大平遺跡Ⅱ』 第9 図－15参照
註4　愛知考古談話会　1985 『＜条痕文土器＞文化をめぐる諸問題　資料編Ⅰ』
図出典 図39 佐野暢彦・水上綾子　2001 『大平遺跡Ⅱ』 第6 図に加筆・修正

参考文献

愛知考古学談話会　1988 『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題-縄文から弥生-』 資料編Ⅰ
愛知考古学談話会　1988 『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題-縄文から弥生-』 資料編Ⅱ・研究編
小野真一　1970 「駿東郡長泉町南一色出土の弥生式土器」『駿豆考古　第10号』 駿豆考古学会
設楽博己　1995 「東日本における弥生時代の始まり」『展望考古学』 考古学研究会
関俊彦　1985 『弥生土器の知識』 考古学シリーズ16　東京美術
突帯文土器研究会　1993 『突帯文土器から条痕文土器へ－伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まり－』
長泉町郷土誌増補版編さん委員会　1992 『長泉町史』 上巻　長泉町
平井　勝　1992 『弥生時代の石器』 考古学ライブラリー64　ニューサイエンス社

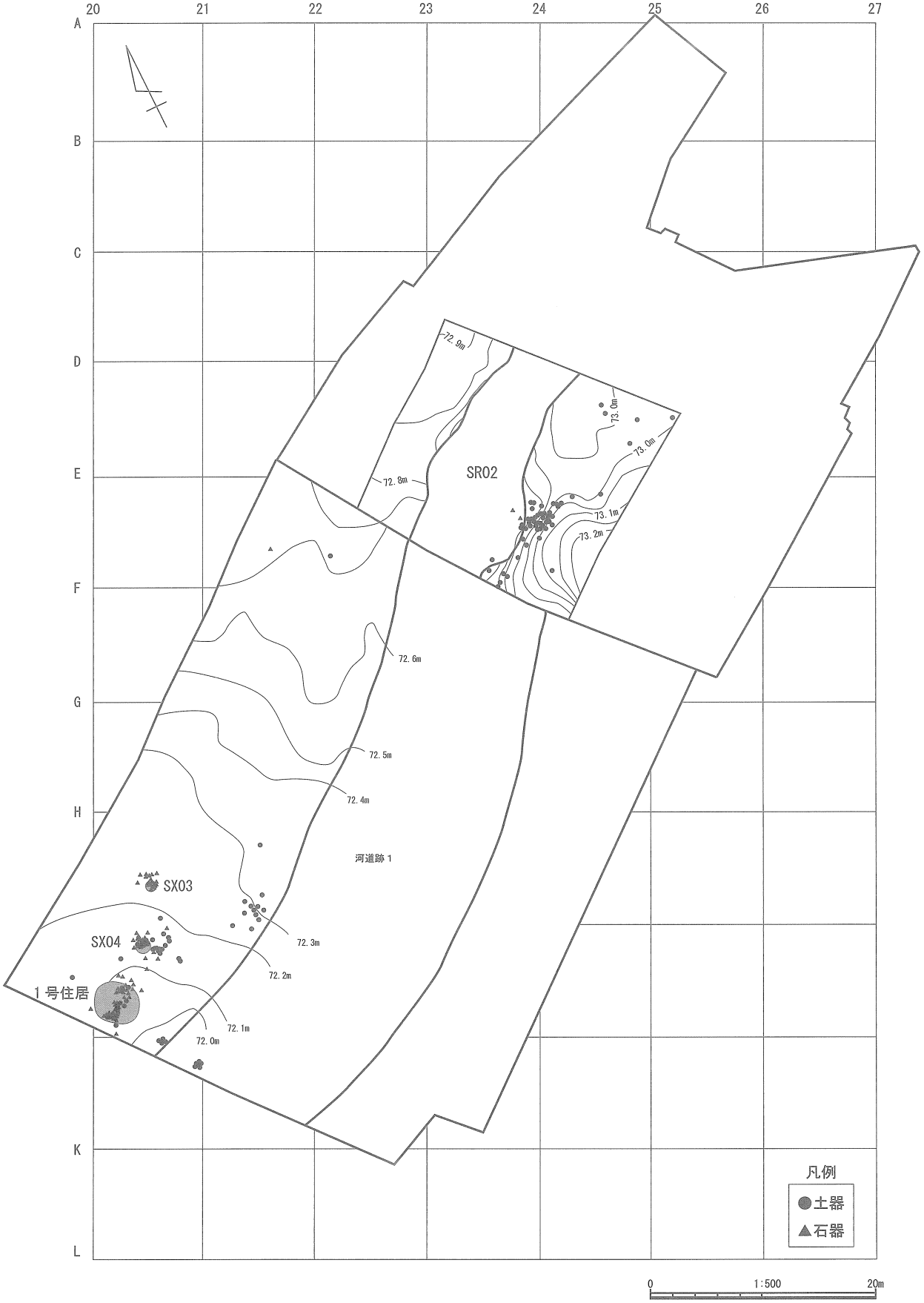


図39　弥生時代　遺物出土状況

表20　黒曜石原産地推定分析結果

分析番号	遺物番号	報告書	挿図	遺構・グリッド	器種	重量（g）	推定産地
ＳＯＤ－１	Ｓ２	大平Ⅱ		１号住居	剥片	※	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－２	Ｓ３	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.5	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－３	Ｓ４	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－４	Ｓ５	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	推定不可
ＳＯＤ－５	Ｓ11	大平Ⅱ		１号住居	剥片	※	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－６	Ｓ16	大平Ⅱ		１号住居	剥片	※	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－７	Ｓ17	大平Ⅱ		１号住居	剥片	※	推定不可
ＳＯＤ－８	Ｓ19	大平Ⅱ		１号住居	剥片	※	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－９	Ｓ27	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－10	Ｓ28	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－11	Ｓ32	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	推定不可
ＳＯＤ－12	Ｓ33	大平Ⅱ		１号住居	剥片	※	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－13	Ｓ34	大平Ⅱ	８－５	ＳＸ02	石鏃	0.5	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－14	Ｓ35	大平Ⅱ		１号住居	剥片	※	推定不可
ＳＯＤ－15	Ｓ37	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.5	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－16	Ｓ39	大平Ⅱ		１号住居	剥片	※	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－17	Ｓ40	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	推定不可
ＳＯＤ－18	Ｓ41	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.4	推定不可
ＳＯＤ－19	Ｓ42	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	推定不可
ＳＯＤ－20	Ｓ46	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－21	Ｓ55	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－22	Ｓ55	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	推定不可
ＳＯＤ－23	Ｓ56	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	推定不可
ＳＯＤ－24	Ｓ59	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－25	Ｓ62	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－26	Ｓ63	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－27	Ｓ93	大平Ⅱ		１号住居	剥片	※	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－28	Ｓ106	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－29	Ｓ108	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－30	Ｓ115	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－31	Ｓ122	大平Ⅱ		１号住居	剥片	0.1	推定不可
ＳＯＤ－32	Ｓ２	大平Ⅱ		ＳＸ03	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－33	Ｓ４	大平Ⅱ		ＳＸ03	剥片	※	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－34	Ｓ11	大平Ⅱ		ＳＸ03	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－35	Ｓ22	大平Ⅱ		ＳＸ03	剥片	0.2	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－36	Ｓ24	大平Ⅱ		ＳＸ03	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－37	Ｓ35	大平Ⅱ		ＳＸ03	剥片	※	推定不可
ＳＯＤ－38	Ｓ43	大平Ⅱ		ＳＸ03	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－39	Ｓ１	大平Ⅱ		ＳＸ04	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－40	Ｓ４	大平Ⅱ		ＳＸ04	剥片	0.2	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－41	Ｓ５	大平Ⅱ		ＳＸ04	剥片	※	推定不可
ＳＯＤ－42	Ｓ７	大平Ⅱ		ＳＸ04	剥片	※	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－43	Ｓ16	大平Ⅱ		ＳＸ04	剥片	0.1	推定不可
ＳＯＤ－44	Ｓ17	大平Ⅱ		ＳＸ04	剥片	※	推定不可
ＳＯＤ－45	Ｓ18	大平Ⅱ		ＳＸ04	剥片	※	推定不可
ＳＯＤ－46	Ｓ19	大平Ⅱ		ＳＸ04	剥片	0.1	推定不可
ＳＯＤ－47	Ｓ１	大平Ⅱ		Ｊ－20	剥片	1.3	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－48	Ｓ２	大平Ⅱ		Ｊ－20	剥片	0.1	推定不可
ＳＯＤ－49	Ｓ３	大平Ⅱ		Ｊ－20	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－50	Ｓ４	大平Ⅱ		Ｊ－20	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－51	Ｓ11	大平Ⅱ		Ｊ－20	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－52	Ｓ12	大平Ⅱ		Ｊ－20	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－53	Ｓ13	大平Ⅱ	９－13	ＳＸ04	石鏃	0.3	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－54	Ｓ14	大平Ⅱ		Ｊ－20	剥片	0.1	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－55	Ｓ21	大平Ⅱ	９－15	Ｆ－21	石鏃	0.4	神津島恩馳島群
ＳＯＤ－56	Ｓ22	大平Ⅱ	９－14	Ｊ－20	石鏃	0.4	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－57	Ｓ24	大平Ⅱ		Ｉ－20	剥片	※	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－58	539	大平Ⅲ	27－２	Ｆ－23	楔形石器	3.4	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－59	898	大平Ⅲ		Ｆ－23	使用痕剥片	0.8	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－60	919	大平Ⅲ	27－１	Ｆ－23	石鏃	1.8	諏訪星ヶ台群
ＳＯＤ－61	929	大平Ⅲ		Ｆ－23	剥片	※	推定不可
ＳＯＤ－62	930	大平Ⅲ		Ｆ－23	剥片	1.1	諏訪星ヶ台群

※0.1ｇ以下

出土地点	出土点数	分析点数※	分析可能点数	諏訪星ヶ台峠群	神津島恩馳島群
１号住居	118	30	20	20	0
ＳＸ02	1	1	1	1	0
ＳＸ03	40	4	4	4	0
ＳＸ04	21	9	5	5	0
グリッド	23	16	14	13	1

※一辺が５㎜　厚さが１㎜以上の製品、剥片を分析の対象とした

第２節　大平遺跡における中世墓の形態と分布について

大平遺跡では三回の調査で371基の土坑が検出された。既刊の２冊の報告書では遺物を伴った土坑を中世墓として報告し、当該期の墓地として本遺跡の性格を示した。しかし各報告書で述べられているように、全ての土坑を中世墓と断定することは難しい。そこで大平遺跡の土坑について、その形態と遺物の出土状況、分布状況について検討を行うことにより、墓となりうる土坑を抽出し、大平遺跡の中世墓について若干の考察を行いたい。

まず、本遺跡で検出された土坑の中で、墓とした根拠を確認しておきたい。第Ⅰ期現地調査において墓としたのは、骨、銭貨、かわらけ等が出土した土坑である。（註１）集石を伴うものと伴わないものがあり、集石を伴う土坑については、木村弘之氏が一の谷中世墳墓群遺跡において行った形態分類（註２）に準じている。また遺物を伴わない土坑についても、検出状況から墓の可能性がある土坑として報告されたものがある。第Ⅱ期、第Ⅲ期現地調査も基本的にこの基準に準じている。

１　土坑の形態

大平遺跡で検出された土坑の形態は、集石を伴う土坑と伴わない土坑に大きく分けることができる。本遺跡においては、自然礫が散在する河原に構築されている点や後世の削平等により上部構造が不明瞭なものが多い点を考慮した上で、以下の分類を行った。礫を伴う土坑をＡ～Ｃ類、礫を伴わない土坑をＤ・Ｅ類とし、Ａ・Ｄについてはさらに２つに細分した。

Ａ類　大型の礫が土坑の中央に配されるもの。
　　Ａ－１類　大型の礫のみが認められるもの。
　　Ａ－２類　大型の礫の周囲に小型の礫を充填するもの。
Ｂ類　礫を充填したもの。
Ｃ類　覆土に少量の礫が含まれるもの。
Ｄ類　礫を含まないもの。
　　Ｄ－１類　直径１ｍ前後の円形を呈するもの。
　　Ｄ－２類　Ｄ－１類以外のもの。
Ｅ類　礫を含まないが、大型の礫に近接して構築されたもの。

さらにＡ－２類及びＢ類の土坑の規模については、１ｍを超える大型のものと50㎝以下の小型のものが認められる。また集石についても自然礫を使用するものと破砕礫を使用したものが認められる。

大平遺跡で検出された土坑371基の内328基を検討の対象とした（註３）。上記の形態に分類した内訳は表21の通り、Ａ－１類は６基、Ａ－２類は９基、Ｂ類は34基、Ｃ類は68基、Ｄ－１類は44基、Ｄ－２類は133基、Ｅ類は34基である。第Ⅲ期の各土坑の形態については遺構計測表（表６・９・15・16）を、過去二回の調査については表22を参照されたい。

２　土坑の形態と出土遺物について

本遺跡で検出された土坑328基中、遺物を伴っていたものは全部で48基あり、遺物が出土した土坑が全体に占める割合は14.6％である。遺物の種類と遺物を出土した土坑の数、全体に占める割合については以下の通りである。

骨が出土した土坑は16基（4.8％）、銭貨が出土した土坑は６基（1.8％）、かわらけが出土した土坑は

21基（6.4%）、陶磁器などが出土した土坑は14基（4.2%）、覆土に炭化物を含んでいた土坑が12基（3.6%）であった。

上述の形態分類において遺物が出土した土坑の数の割合は、A－1類が6基中0基（0%）、A－2類が9基中5基（55.5%）、B類が34基中15基（44.1%）、C類が68基中11基（16.1%）、D－1類が44基中8基（18.2%）、D－2類が133基中2基（1.5%）、E類が34基中7基（20.6%）であった。

また出土遺物の内訳は、A－2類は銭貨4点、かわらけ2点、その他（陶器など）4点。B類は銭貨13点、かわらけ4点、その他9点。C類はかわらけ3点、その他2点。D－1類はかわらけ9点。D－2類は人骨1点、炭化物1点。E類は銭貨5点、かわらけ3点、その他1点であった。

土坑の形態と遺物について概観すると、B類において遺物の出土が最も顕著に認められ、続いてC類で多く認められた。またA－2類は検出数が少ないものの約半数において遺物が出土しており、遺物を伴う確率が高かった。一方、A－1類からは1点も出土しておらず、D類についても遺物を含まないものがほとんどであった。C類については『大平遺跡』において報告されているように、B類の上部構造が流出した可能性もあることから、総じて礫が充填されている形態の土坑で遺物の出土割合が高いと考えられる。

続いて遺物の種類に注目すると、A－1類以外の全ての土坑から骨・歯牙が出土しており、特にA－2類とE類で出土割合が高かった。また、かわらけも同様に、A－1類以外の全ての土坑から出土した。割合もほぼ同様の傾向であるが、B類でやや高い割合を示している。銭貨についてはC類、D類において出土が認められなかった。A－2類、B類、E類では骨・銭貨・かわらけがセットで出土した土坑が認められた。

3　土坑の形態と分布状況について

『大平遺跡』『大平遺跡Ⅱ』で述べられたように、本遺跡は、黄瀬川とその支流によって形成された地形に立地しており、東西に長い調査区内には数段に渡る段丘面、段丘崖、旧河道面が認められる。ここでは土坑の形態と地形との関係について確認したい。

まず、形態に関わらず、多くの土坑が段丘面に等高線に沿って帯状に構築されているという特徴が挙げられる。特に、A－2類、B類、E類については2～5基程度の土坑が、段丘面の緩やかな傾斜地のほぼ同一等高線上に集中する傾向が顕著に認められ、そのまとまりがさらに幾つかの大きなグループを構成しているように思われる。

ただし、A－2類については2－1区西側や3区東側に見られるように単独で営まれるものも存在する。B類とE類については1－1区南側、2－1区北西側、3区北東側に多く分布しており、分布傾向が類似しているという特徴が看取されるが、4区東側にはB類のみが集中する箇所が認められる。

C類は1－2区北側や2－1区北西側のように集中する箇所、2－1区西側のように散在する箇所、3区北東側のように少数ではあるが連接して営まれる箇所に分かれそうである。

D－1類は散在して構築されており、1－2区（註4）のように河道にも分布している点に特徴がある。D－2類は数基が集中して構築される。

4　大平遺跡の中世墓

本遺跡で検出された土坑は、遺物の出土が少ないことや検出状況が明確でないことから、全てを墓と断定することは難しい。しかし、これまでに行った検討から判断すると、A－2類、B類、E類については、遺物等の出土が認められない土坑についても墓である可能性が高いと思われる。またC類についても、B類の上部構造の流出を考慮すると墓の可能性があり、特に上述の1－2区北東側、2－1区北

西側、３区東側に分布するものについてはその可能性が高いと指摘できよう。一方Ｄ－１類については、周辺の遺跡において指摘されているように、墓よりはむしろ農業用施設等、異なる用途を想定すべきであろう。

Ｄ－２類については遺物が出土したものは墓とし、遺物を出土していないものについても、１－１区でＢ類・Ｅ類に近接して営まれているものは墓の可能性が高いと考えたい。

以上の検討から、ここでは墓とする土坑をＡ－２類・Ｂ類・Ｅ類とし、Ｃ類及びＤ－２類の一部としておきたい。さらに墓とした形態の分布状況を考えると、墓地として利用されたエリアは単独に営まれるものもあり全てを網羅できないが、１－１区南東、１－２区東～２－１区西端、４区東、３区北東の４つのエリアに分けられることも指摘しておきたい。(註５)

次に本遺跡で検出された中世墓について検討を加えたい。まず形態の差異についてであるが、一般に埋葬方法の違い、年齢差、時期差、階層差等が想定される。

墓として用いられた場合、火葬と土葬が想定されるが、土坑の規模が小さい点、炭化物の出土が多い点、火葬施設と考えられる遺構が検出されている点等から、本遺跡の集石墓はその多くが火葬骨を納めていたと思われる。しかし２－１区で検出されたＢ類の土坑（ＳＸ21011）からは火葬骨と土葬と考えられる歯牙が出土しており、一部では土葬も行われていたことが窺われる。

浜松医科大法医学教室の分析によれば、火葬骨は青年、歯牙は15歳から20歳前後の青年と成人男性の２体分の可能性が指摘されており、同一の土坑においても火葬と土葬という違った埋葬方法が行われたことが分かる。また３区のＣ類（ＳＸ3001）から出土した歯牙は、20歳前後の女性と５～10歳ほどの子供の可能性が高く、この２体は土葬されたようである。一方、別のＣ類からは火葬骨が出土しており、同形態の土坑においても土葬、火葬の両方の埋葬方法があったことが分かる。骨の出土数が少ないので断定的なことは言えないが、Ａ－２類・Ｅ類からは火葬骨のみが出土しており、両類は火葬という埋葬方法に限定されていた可能性がある。

年齢差についても、既述した通り、20歳前後の女性と５～10歳ほどの子供、青年と成人男性という埋葬状況から判断すると、形態によって明らかな差違は認められないようである。

時期差については遺物を参考にしてみたい。本遺跡出土の陶磁器は、第Ⅲ期現地調査においては１－１区、２－２区ともに古瀬戸後Ⅳ期に出土のピークが認められた。２－２区においては古瀬戸前期から中期の遺物が出土しており、銭貨は渡来銭が中心であるのに対し、１－１区では寛永通寶が多く出土する等、包含層出土の遺物については出土傾向に若干の相違が認められた。しかし、墓から出土した遺物については、ほぼ全ての形態において15世紀後半から16世紀にかけての在地のかわらけが出土しており、形態の差違が明確な時期差を示しているとは言い難い。

また、遺物を出土している墓が少なく、出土していても内容的には貧弱であることから、明確な階層差もないといえよう。

こうした墓の形態差が、埋葬方法、性別、時期、階層といった違いを明確に示していないことは、むしろ同時期において異なった埋葬形態を採用する集団が存在していた可能性を想起させる。具体的な例を挙げるならば、Ⅰエリア、Ⅱエリア、ⅣエリアではＡ－２類、Ｂ類、Ｅ類の３つの形態のまとまりが認められる。特にⅡ・Ⅳエリアでは同一形態のものが２～３基連接して構築されている様子が認められ、集団が採択した埋葬形態と集団の規模を具現しているのかもしれない。またⅡエリアのＢ類では、集石の下部に炭化物及び人骨が出土する大型の土坑を有する例が多く、同じＢ類でもⅢエリアでは遺物が全く出土していない小型の土坑が用いられているという違いも認められ、形態のみならず、埋葬方法にも集団間での相違があったことを示している。

最後に大平遺跡の中世墓について簡単にまとめておきたい。本遺跡が墓地として利用されたのは、出

土したかわらけの年代観から15世紀後半から16世紀である。墓の分布状況から４つのエリアが墓地として利用されていたと考えられる。墓は後世の削平等による形状の変化はあるものの、集石墓（Ａ－２類・Ｂ類・Ｃ類）と土坑墓（Ｄ－２類・Ｅ類）の２種類が造られていた。

埋葬方法は集石墓も土坑墓も火葬を主体にするものの、一部は土葬と考えられるもの、さらには火葬と土葬が併用されているもの（複数遺体の同一墓坑埋葬）の３種類が認められた。副葬品の量は極めて少量で、かわらけの他、銭貨や陶磁器があったが明確な階層差を示すものはなく、当該期の庶民の墓と考えるのが妥当であろう。

黄瀬川の河岸段丘上という立地条件や、複雑な層位、また後世の削平等から検出状況が不良だったものもあり、本遺跡における中世墓群の全容を明らかにはできなかったかもしれない。しかし、３回の調査を総括することにより、従来明確ではなかった駿東地域における中世墓を考える上で貴重な事例になったと言えよう。

註１　鈴木　譲　1998『大平遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　162～165頁

註２　木村弘之氏の中世墓の形態分類は以下の通りである。

①　塚墓…盛土によって塚を築いた墓。

②　コの字形区画墓…コの字形の溝によって区画した墓。

③　土坑墓…土葬墓といわれるもので、地面を掘りくぼめ、遺体を埋葬した墓。

④　集石墓…石を集積してつくった火葬墓。

⑤　地下式壙…地下に縦穴を掘り、底面からさらに横に掘り広げて地下室を築いた墓。

⑥　標を持つ墓…墓標を立て、下部に遺体、遺骨を埋葬した墓（墓標は主に石塔を指す）。

さらに集石墓については以下の五形態に細分類している。

Ⅰ類　縁石（区画石）を有し、平面形が方形または長方形をなす。

Ⅱ類　縁石（区画石）はないが、方形または長方形をなすように石が並べられたもの。

Ⅲ類　縁石（区画石）はなく、形状も不整形で石が集積しただけのもの。

Ⅳ類　小穴を穿って骨蔵器を埋蔵しただけのもの。

Ⅴ類　小穴に火葬骨を埋葬しただけのもの。

註３　過去２回の調査で報告されず、様相を把握できなかったものや明らかに近世に所属し用途が異なるものは対象から除外した。

註４　ここでは第三期調査の１－１区と区別するため、第Ⅰ期調査で１区とした調査区を１－２区とする。

註５　それぞれⅠエリア・Ⅱエリア・Ⅲエリア・Ⅳエリアとしておきたい。

参考文献

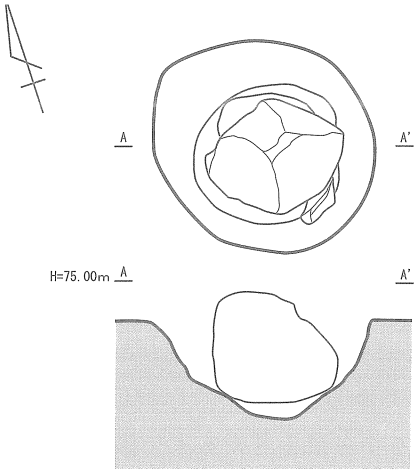
上井久義編　1979　『葬送墓制研究集成』　第五巻

木村弘之　1997　「中世墓の種類と変遷」『静岡県における中世墓』

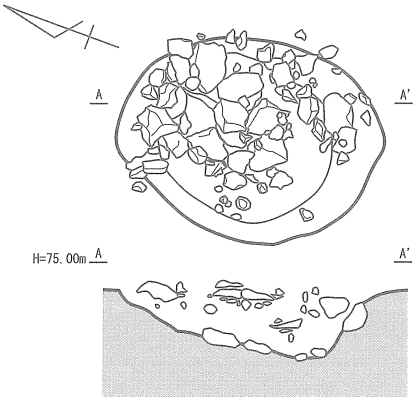
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　1994　『東海の中世墓』

土井卓治・佐藤米司編　1979　『葬送墓制研究集成』　第一巻

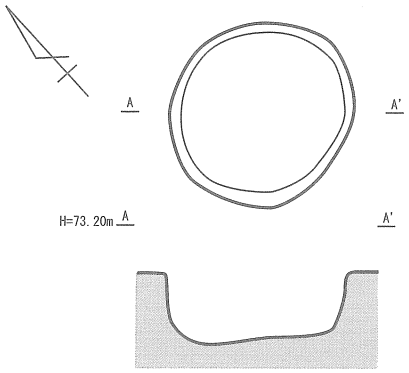
山崎克巳・木村弘之・伊藤美鈴・加藤恵子　1993　『一の谷中世墓群遺跡』　磐田市教育委員会



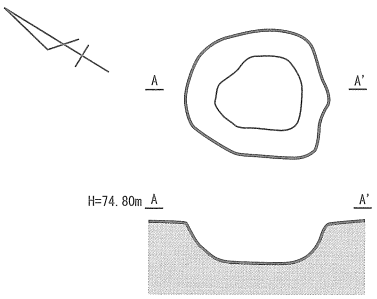
Ａ類　大型の礫が土坑の中央に配されるもの
Ａ－１類　大型の礫のみが認められるもの



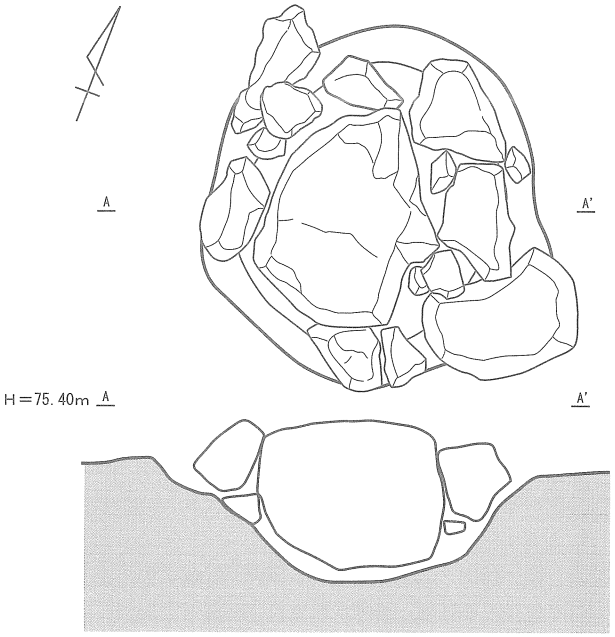
Ｂ類　礫を充填したもの



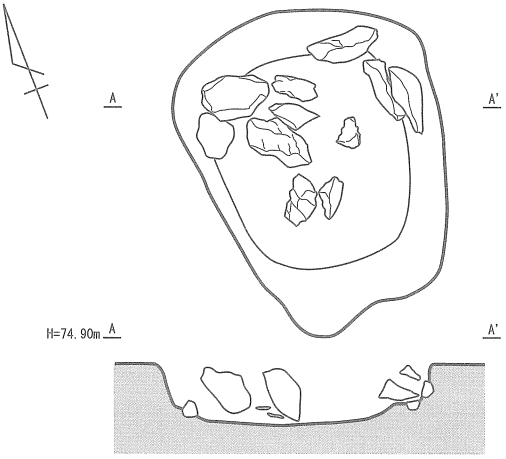
Ｄ－１類　礫を含まない
（直径１ｍ前後の円形を呈するもの）



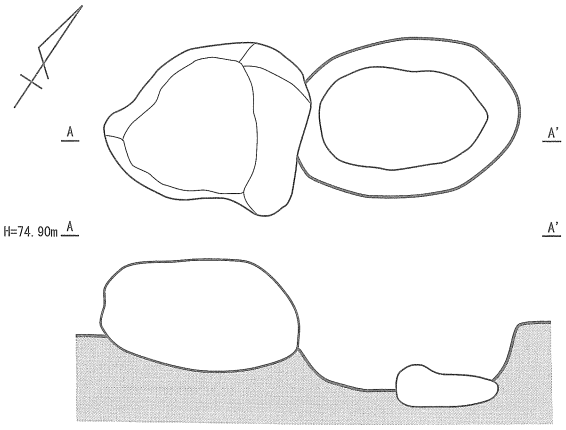
Ｄ－２類　礫を含まない
（Ｄ－１類以外のもの）



Ａ類　大型の礫が土坑の中央に配されるもの
Ａ－２類　大型の周囲に小型の礫を充填するもの



Ｃ類　覆土に少量の礫が含まれるもの



Ｅ類　礫を含まないが
大型の礫に近接して構築されたもの

0　1:40　1m

図40　大平遺跡検出の土坑の形態

表21　土坑集計表

区	土坑数	A－1類	A－2類	B類	C類	D－1類	D－2類	E類
1区	42	3 (7.1)	0	0	21(50.0)	4 (9.5)	14(33.3)	0
1－1区	117	2 (1.7)	2 (1.7)	6 (4.3)	3 (2.6)	5 (4.3)	82(70.0)	17(14.3)
2－1区	85	0	4 (4.7)	13(15.3)	37(43.5)	3 (3.5)	17(20.0)	11(8.7)
2－2区	21	0	0	0	4 (19.1)	13(61.9)	4 (19.0)	0
2－3区	5	0	0	0	0	3 (60.0)	2 (40.0)	0
3区	26	1 (3.9)	3 (11.5)	6 (23.1)	3 (11.5)	0	7 (26.9)	6 (23.1)
4区	32	0	0	9 (27.3)	0	16(50.0)	7 (21.9)	0
計	328	6 (1.8)	9 (2.7)	34(10.4)	68(20.7)	44(13.4)	133(40.5)	34(9.2)

(　)内は土坑数に占める各形態の割合

各形態において遺物が出土した土坑の数と種類

	土坑数	遺物出土土坑数	人骨(歯を含む)	銭貨	かわらけ	その他	炭化物
A－1	6	0	0	0	0	0	0
A－2	9	5 (55.5)	2	1	2	3	0
B	34	15(44.1)	2	2	4	9	5
C	68	11(16.1)	5	0	3	2	6
D－1	44	8 (18.2)	0	0	9	0	0
D－2	133	2 (1.5)	1	0	0	0	1
E	34	7 (20.6)	6	3	3	1	0
計	328	48(14.6)	16	6	21	14	12

(　)内は土坑数に占める各遺物出土土坑の割合

各形態の土坑から出土した銭貨・かわらけ・その他の遺物の点数

	土坑数	遺物出土土坑数	銭貨	かわらけ	その他
A－1	6	0	0	0	0
A－2	9	5	4	2	4
B	34	12	13	4	9
C	68	5	0	3	2
D－1	44	8	0	9	0
D－2	133	2	0	0	0
E	34	4	5	3	1
計	328	36	22	21	15

表22　大平遺跡 土坑一覧表（第Ⅰ期・第Ⅱ期）

区	遺構番号	層位	形状	規模(m)		分類	遺物	報告書	挿図
				長径	短径				
1	ＳＦ1012	Ⅳ	不整円形	1.76	1.55	C	×	大平Ⅰ	第９図
1	ＳＦ1013	Ⅳ	半円形	1.60	(0.62)	C	×	大平Ⅰ	第９図
1	ＳＦ1014	Ⅳ	半円形	1.35	(0.75)	C	×	大平Ⅰ	第９図
1	ＳＦ1103	Ⅳ	隅丸方形	1.20	(0.85)	C	×	大平Ⅰ	第９図
1	ＳＦ1002	Ⅴ	楕円形	1.30	1.00	A－1	×	大平Ⅰ	第10図
1	ＳＦ1003	Ⅴ	楕円形	1.17	0.76	C	×	大平Ⅰ	第10図
1	ＳＦ1004	Ⅴ	楕円形	1.35	0.90	C	×	大平Ⅰ	第11図
1	ＳＦ1006	Ⅴ	楕円形	0.85	0.68	D－2	×	大平Ⅰ	第11図
1	ＳＦ1007	Ⅴ	隅丸方形	1.00	0.70	D－2	×	大平Ⅰ	第11図
1	ＳＦ1008	Ⅴ	楕円形	1.11	0.68	C	×	大平Ⅰ	第11図
1	ＳＦ1009	Ⅴ	隅丸方形	1.23	0.98	A－1	×	大平Ⅰ	第11図
1	ＳＦ1015	Ⅴ	楕円形	0.97	0.62	C	×	大平Ⅰ	第10図
1	ＳＦ1016	Ⅴ	楕円形	(0.95)	(0.19)	C	×	大平Ⅰ	第10図
1	ＳＦ1088	Ⅴ	不整楕円形	1.35	1.07	D－2	×	大平Ⅰ	第12図
1	ＳＦ1090	Ⅴ	楕円形	0.80	0.53	D－2	×	大平Ⅰ	第12図
1	ＳＦ1091	Ⅴ	瓢箪形	0.74	0.41	D－2	×	大平Ⅰ	第12図
1	ＳＦ1024	Ⅶ	円形	1.08	1.02	D－2	×	大平Ⅰ	第15図
1	ＳＦ1025	Ⅶ	楕円形	0.80	0.69	C	×	大平Ⅰ	第18図
1	ＳＦ1026	Ⅶ	楕円形	1.00	0.86	D－2	×	大平Ⅰ	第18図
1	ＳＦ1027	Ⅶ	不整形	0.95	0.60	C	×	大平Ⅰ	第16図
1	ＳＦ1029	Ⅶ	隅丸方形	1.17	0.91	C	×	大平Ⅰ	第17図
1	ＳＦ1037	Ⅶ	不整形	1.82	1.18	A－1	×	大平Ⅰ	第17図
1	ＳＦ1040	Ⅶ	隅丸方形	0.98	0.65	C	×	大平Ⅰ	第17図
1	ＳＦ1044	Ⅶ	不整楕円形	1.70	1.33	D－2	×	大平Ⅰ	第18図
1	ＳＦ1045	Ⅶ	半円形	(0.78)	(0.19)	D－2	×	大平Ⅰ	第18図
1	ＳＦ1047	Ⅶ	円形	0.94	0.86	D－1	×	大平Ⅰ	第15図
1	ＳＦ1049	Ⅶ	楕円形	1.48	1.03	D－2	×	大平Ⅰ	第16図
1	ＳＦ1061	Ⅶ	楕円形	1.30	1.03	C	×	大平Ⅰ	第17図
1	ＳＦ1067	Ⅶ	半円形	(0.88)	(0.48)	C	×	大平Ⅰ	第16図
1	ＳＦ1070	Ⅶ	不整円形	0.71	0.59	D－2	×	大平Ⅰ	第16図
1	ＳＦ1071	Ⅶ	不整楕円形	0.91	0.64	C	×	大平Ⅰ	第16図
1	ＳＦ1073	Ⅶ	楕円形	1.43	1.05	D－2	×	大平Ⅰ	第19図
1	ＳＦ1074	Ⅶ	円形	1.04	1.00	D－2	×	大平Ⅰ	第15図
1	ＳＦ1075	Ⅶ	楕円形	0.71	0.55	C	×	大平Ⅰ	第19図
1	ＳＦ1076	Ⅶ	歪んだ円形	0.93	0.88	D－2	×	大平Ⅰ	第20図
1	ＳＦ1077	Ⅶ	楕円形	1.24	0.93	C	×	大平Ⅰ	第20図
1	ＳＦ1079	Ⅶ	円形	1.03	1.00	C	×	大平Ⅰ	第15図
1	ＳＦ1082	Ⅶ	円形	1.08	1.00	D－1	×	大平Ⅰ	第15図
1	ＳＦ1083	Ⅶ	楕円形	(1.10)	0.78	C	×	大平Ⅰ	第20図
1	ＳＦ1084	Ⅶ	不整円形	0.94	0.79	C	×	大平Ⅰ	第19図
1	ＳＦ1085	Ⅶ	歪んだ円形	0.73	0.64	D－2	×	大平Ⅰ	第19図
1	ＳＦ1086	Ⅶ	不整円形	1.70	1.58	C	×	大平Ⅰ	第19図
1	ＳＦ1087	Ⅶ	隅丸方形	1.12	1.04	C	×	大平Ⅰ	第20図
1	ＳＦ1092	Ⅶ	楕円形	1.25	1.07	D－2	×	大平Ⅰ	第18図
1	ＳＦ1094	Ⅶ	楕円形	0.78	0.47	C	×	大平Ⅰ	第16図
1	ＳＦ1095	Ⅶ	不整形	2.57	1.22	C	×	大平Ⅰ	第20図
2－1	ＳＸ21007	Ⅶ	円形	0.75	0.71	B	×	大平Ⅰ	第29図
2－1	ＳＸ21010	Ⅶ	隅丸方形	0.50	0.45	B	×	大平Ⅰ	
2－1	ＳＸ21011	Ⅶ	楕円形	1.85	1.20	B	歯・人骨	大平Ⅰ	第25図
2－1	ＳＸ21013	Ⅶ	楕円形	1.70	1.20	C	×	大平Ⅰ	第28図
2－1	ＳＸ21016	Ⅶ	不整楕円形	1.27	0.85	E	人骨・銭貨(熙寧元寶)・かわらけ	大平Ⅰ	第26図
2－1	ＳＸ21021	Ⅶ	隅丸方形	3.05	2.20	A－2	×	大平Ⅰ	第28図
2－1	ＳＸ21029	Ⅶ	楕円形	4.86	(1.44)	C	×	大平Ⅰ	第32図
2－1	ＳＸ21031	Ⅶ	楕円形	1.25	0.84	C	×	大平Ⅰ	第30図
2－1	ＳＸ21038	Ⅶ	楕円形	1.10	0.80	B	×	大平Ⅰ	第30図
2－1	ＳＸ21040	Ⅶ	楕円形	1.45	1.30	A－2	×	大平Ⅰ	第31図
2－1	ＳＸ21123	Ⅶ	楕円形	6.00	1.50	C	炭化物	大平Ⅰ	
2－1	ＳＸ21196	Ⅶ	不整形	1.23	0.45	C	炭化物	大平Ⅰ	第42図
2－1	ＳＸ21197	Ⅶ	楕円形	0.73	0.48	C	炭化物	大平Ⅰ	第42図
2－1	ＳＸ21344	Ⅶ	不整円形	1.00	0.69	E	人骨・銭貨(元祐通寶・大観通寶・永楽通寶)	大平Ⅰ	第27図
2－1	ＳＸ21345	Ⅶ	隅丸方形	0.55	0.39	C	人骨	大平Ⅰ	第27図
2－1	ＳＸ21350	Ⅶ	不整形	1.60	1.40	B	×	大平Ⅰ	第30図
2－1	ＳＸ21351	Ⅶ	不整形	2.20	(1.00)	B	×	大平Ⅰ	第30図
2－1	ＳＸ21356	Ⅶ	不整形	0.80	0.45	B	×	大平Ⅰ	第29図
2－1	ＳＸ21357	Ⅶ	不整形	0.73	0.65	B	行平(19C)	大平Ⅰ	第29図
2－1	ＳＸ21361	Ⅶ	不整形	1.90	(0.65)	B	人骨・土師器破片	大平Ⅰ	第25図
2－1	ＳＸ21366	Ⅶ	楕円形	1.95	1.30	A－2	×	大平Ⅰ	第31図
2－1	ＳＸ21375	Ⅶ	隅丸方形	0.75	0.69	B	×	大平Ⅰ	第38図
2－1	ＳＸ21378	Ⅶ	半円形	(0.45)	(0.35)	C	人骨・かわらけ	大平Ⅰ	第26図
2－1	ＳＸ21381	Ⅶ	隅丸方形	1.40	1.36	A－2	×	大平Ⅰ	第47図
2－1	ＳＸ21382	Ⅶ	楕円形	1.00	0.60	E	人骨・かわらけ	大平Ⅰ	第26図
2－1	ＳＸ21385	Ⅶ	隅丸方形	0.40	0.35	E	人骨・かわらけ	大平Ⅰ	第27図
2－1	ＳＸ21387	Ⅶ	楕円形	1.40	0.65	E	人骨	大平Ⅰ	第27図

区	遺構番号	層位	形状	規模(m)		分類	遺物	報告書	挿図
				長径	短径				
2－1	SF21004	Ⅶ	不整形	0.90	0.42	E	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21006	Ⅶ	楕円形	1.17	0.60	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21012	Ⅶ	不整形	1.30	0.80	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21020	Ⅶ	隅丸方形	1.26	0.70	E	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21022	Ⅶ	楕円形	1.15	0.96	B	×	大平Ⅰ	第35図
2－1	SF21024	Ⅶ	隅丸方形	0.94	0.77	E	×	大平Ⅰ	第33図
2－1	SF21027	Ⅶ	楕円形	0.81	0.53	C	×	大平Ⅰ	第33図
2－1	SF21028	Ⅶ	楕円形	0.81	0.60	C	×	大平Ⅰ	第33図
2－1	SF21030	Ⅶ	不整楕円形	1.33	1.05	C	×	大平Ⅰ	第33図
2－1	SF21034	Ⅶ	不整形	0.90	0.61	C	×	大平Ⅰ	第33図
2－1	SF21035	Ⅶ	楕円形	1.00	0.59	C	×	大平Ⅰ	第34図
2－1	SF21046	Ⅶ	不整楕円形	0.80	0.53	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21047	Ⅶ	隅丸方形	0.90	0.88	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21054	Ⅶ	不整形	0.72	0.42	E	×	大平Ⅰ	第39図
2－1	SF21056	Ⅶ	楕円形	1.16	0.73	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21059	Ⅶ	不整楕円形	1.14	0.96	C	×	大平Ⅰ	第38図
2－1	SF21060	Ⅶ	不整形	1.00	0.80	C	×	大平Ⅰ	第38図
2－1	SF21065	Ⅶ	不整形	1.00	0.77	C	×	大平Ⅰ	第38図
2－1	SF21070	Ⅶ	不整方形	1.40	1.00	C	古瀬戸後期	大平Ⅰ	第39図
2－1	SF21074	Ⅶ	半円形	(1.02)	(0.35)	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21076	Ⅶ	楕円形	0.82	0.35	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21077	Ⅶ	楕円形	0.72	0.46	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21078	Ⅶ	楕円形	0.82	0.40	E	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21079	Ⅶ	円形	0.90	0.85	D－1	×	大平Ⅰ	第37図
2－1	SF21080	Ⅶ	楕円形	0.76	0.33	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21084	Ⅶ	楕円形	1.32	0.95	C	×	大平Ⅰ	第39図
2－1	SF21091	Ⅶ	不整形	0.85	0.65	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21092	Ⅶ	不整形	0.82	0.50	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21101	Ⅶ	半円形	0.70	(0.22)	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21103	Ⅶ	瓢箪形	0.76	0.38	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21104	Ⅶ	円形	0.85	0.78	D－1	×	大平Ⅰ	第37図
2－1	SF21106	Ⅶ	隅丸方形	1.04	0.88	D－2	×	大平Ⅰ	第35図
2－1	SF21118	Ⅶ	不整形	0.74	0.39	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21128	Ⅶ	隅丸方形	0.76	0.40	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21133	Ⅶ	楕円形	1.14	0.46	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21141	Ⅶ	楕円形	0.76	0.36	D	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21151	Ⅶ	楕円形	0.82	0.67	D	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21178	Ⅶ	隅丸方形	0.91	(0.46)	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21179	Ⅶ	隅丸方形	0.70	(0.30)	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21187	Ⅶ	不整楕円形	1.46	0.93	D－1	×	大平Ⅰ	第46図
2－1	SF21190	Ⅶ	円形	1.00	0.93	D－1	×	大平Ⅰ	第46図
2－1	SF21192	Ⅶ	楕円形	1.04	0.86	D－2	×	大平Ⅰ	第46図
2－1	SF21193	Ⅶ	楕円形	0.78	0.43	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21205	Ⅶ	楕円形	1.36	0.97	C	×	大平Ⅰ	第39図
2－1	SF21216	Ⅶ	楕円形	1.43	1.00	C	×	大平Ⅰ	第46図
2－1	SF21223	Ⅶ	不整円形	1.25	1.18	C	×	大平Ⅰ	第45図
2－1	SF21225	Ⅶ	不整形	0.80	0.65	C	×	大平Ⅰ	第45図
2－1	SF21233	Ⅶ	楕円形	0.80	0.36	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21235	Ⅶ	円形	1.10	1.05	C	×	大平Ⅰ	第44図
2－1	SF21236	Ⅶ	不整円形	0.80	0.65	E	×	大平Ⅰ	第45図
2－1	SF21240	Ⅶ	楕円形	1.00	0.80	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21242	Ⅶ	隅丸方形	0.80	0.69	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21243	Ⅶ	楕円形	0.83	0.46	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21244	Ⅶ	円形	1.02	0.92	D－1	×	大平Ⅰ	第44図
2－1	SF21246	Ⅶ	円形	0.94	0.87	C	×	大平Ⅰ	第42図
2－1	SF21247	Ⅶ	円形	1.09	1.04	C	×	大平Ⅰ	第42図
2－1	SF21248	Ⅶ	不整円形	0.97	0.90	C	×	大平Ⅰ	第42図
2－1	SF21249	Ⅶ	不整円形	1.00	94	D	×	大平Ⅰ	第43図
2－1	SF21251	Ⅶ	楕円形	1.03	0.83	C	×	大平Ⅰ	第43図
2－1	SF21252	Ⅶ	楕円形	0.98	0.76	E	×	大平Ⅰ	第43図
2－1	SF21253	Ⅶ	円形	0.75	0.72	C	×	大平Ⅰ	第45図
2－1	SF21256	Ⅶ	円形	1.00	0.96	C	×	大平Ⅰ	第43図
2－1	SF21271	Ⅶ	楕円形	0.95	0.75	C	×	大平Ⅰ	第45図
2－1	SF21276	Ⅶ	不整形	0.73	0.56	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21277	Ⅶ	不整形	0.75	0.56	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21290	Ⅶ	不整円形	0.75	0.63	C	×	大平Ⅰ	第47図
2－1	SF21291	Ⅶ	隅丸方形	1.00	0.73	C	×	大平Ⅰ	第47図
2－1	SF21312	Ⅶ	不整楕円形	1.40	1.20	C	×	大平Ⅰ	第47図
2－1	SF21335	Ⅶ	不整隅丸台形	0.71	0.51	C	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21338	Ⅶ	半円形	1.07	(0.65)	D－2	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21347	Ⅶ	隅丸方形	1.12	0.62	B	×	大平Ⅰ	
2－1	SF21358	Ⅶ	不整形	1.02	0.80	E	×	大平Ⅰ	
2－3	SF23003	Ⅶ	隅丸方形	1.13	0.70	D－2	×	大平Ⅰ	第50図
2－3	SF23004	Ⅶ	不整形	0.77	0.66	D－2	×	大平Ⅰ	第50図
2－3	SF23005	Ⅶ	円形	0.98	0.92	D－1	×	大平Ⅰ	第50図
2－3	SF23006	Ⅶ	円形	0.92	0.88	D－1	×	大平Ⅰ	第50図

区	遺構番号	層位	形状	規模(m)		分類	遺物	報告書	挿図
				長径	短径				
3	ＳＸ3002	Ⅳ	歪んだ円形	1.06	0.84	B	常滑・炭化物	大平Ⅰ	第55図
3	ＳＸ3003	Ⅳ	歪んだ円形	1.11	0.84	B	常滑・炭化物	大平Ⅰ	第56図
3	ＳＸ3043	Ⅳ	不整隅丸方形	4.40	4.25	A－2	馬歯・陶器片・人骨	大平Ⅰ	第56図
3	ＳＸ3191	Ⅳ	円形	0.70	0.60	B	常滑・炭化物	大平Ⅰ	第56図
3	ＳＸ3194	Ⅳ	不明	1.20	1.10	E	常滑	大平Ⅰ	第56図
3	ＳＸ3001	Ⅵ	楕円形	(1.26)	(0.83)	A－2	歯・銭貨(開元通寶・皇栄通寶・元豊通寶・景徳元寶)かわらけ	大平Ⅰ	第58図
3	ＳＸ3026	Ⅶ	隅丸方形	0.64	0.64	B	炭化物	大平Ⅰ	第59図
3	ＳＸ3037	Ⅶ	方形	0.54	0.50	C	骨粉・炭化物	大平Ⅰ	第59図
3	ＳＸ3041	Ⅶ	不整楕円形	2.00	(1.30)	B	凹石	大平Ⅰ	第61図
3	ＳＸ3188	Ⅶ	楕円形	1.12	0.80	C	かわらけ・炭化物	大平Ⅰ	第60図
3	ＳＸ3192	Ⅶ	隅丸方形	2.26	2.20	E	人骨・銭貨(洪武通寶)	大平Ⅰ	第58図
3	ＳＸ3193	Ⅶ	不整楕円形	4.25	2.07	D－2	炭化物	大平Ⅰ	第61図
3	ＳＸ3195	Ⅶ	不整楕円形	1.56	1.20	C	骨粉・炭化物	大平Ⅰ	第60図
3	ＳＦ3004	Ⅳ	楕円形	0.90	0.77	E	×	大平Ⅰ	第57図
3	ＳＦ3019	Ⅳ	楕円形	0.80	0.53	A－2	×	大平Ⅰ	第57図
3	ＳＦ3016	Ⅶ	不整楕円形	0.88	0.74	D－2	×	大平Ⅰ	第63図
3	ＳＦ3035	Ⅶ	楕円形	0.86	0.54	E	×	大平Ⅰ	第64図
3	ＳＦ3042	Ⅶ	隅丸三角形	1.38	0.97	A－1	×	大平Ⅰ	第62図
3	ＳＦ3044	Ⅶ	不整方形	1.15	0.90	E	×	大平Ⅰ	第64図
3	ＳＦ3045	Ⅶ	楕円形	1.40	1.00	E	×	大平Ⅰ	第64図
3	ＳＦ3143	Ⅶ	円形	0.73	0.66	B	×	大平Ⅰ	第62図
3	ＳＦ3145	Ⅶ	楕円形	1.30	0.84	D－2	×	大平Ⅰ	第62図
3	ＳＦ3173	Ⅶ	不整形	0.75	0.67	D－2	×	大平Ⅰ	第62図
3	ＳＦ3174	Ⅶ	不整隅丸方形	0.92	0.55	D－2	×	大平Ⅰ	第62図
3	ＳＦ3190	Ⅶ	楕円形	1.60	1.30	D－2	×	大平Ⅰ	第63図
3	ＳＦ3197	Ⅶ	不整形	1.50	0.65	D－2	×	大平Ⅰ	第63図
4	1号墓	註	不明	1.20	1.05	B	銭貨(皇栄通寶・熙寧通寶・大観通寶・政和通寶・元豊通寶・紹聖通寶・元祐通寶)かわらけ	大平Ⅱ	第11図
4	2号墓	註	楕円形	0.80	75	B	かわらけ	大平Ⅱ	第11図
4	3号墓	註	楕円形	0.80	60	B	かわらけ	大平Ⅱ	第12図
4	4号墓	註	楕円形	1.05	90	B	×	大平Ⅱ	第12図
4	5号墓	註	不明	0.70	0.65	B	銭貨(景徳元寶・皇栄通寶・大観通寶・至和元寶・聖宋元寶・元祐通寶)かわらけ	大平Ⅱ	第13図
4	6号墓	註	不明	0.90	0.75	B		大平Ⅱ	第13図
4	6号墓b	註	不明	0.75	0.55	B	×	大平Ⅱ	第13図
4	7号墓	註	楕円形	0.90	0.88	B	×	大平Ⅱ	第14図
4	8号墓	註	楕円形	0.77	0.70	B	×	大平Ⅱ	第14図
4	ＳＦ1	註	円形	1.22	1.10	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ2	註	円形	1.15	1.04	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ3	註	円形	0.58	0.56	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ4	註	円形	0.60	0.58	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ5	註	円形	1.09	1.04	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ6	註	円形	1.02	0.92	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ7	註	円形	0.98	0.94	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ8	註	円形	1.12	0.98	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ9	註	円形	1.11	1.04	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ10	註	円形	0.73	0.68	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ11	註	円形	0.92	0.82	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ12	註	楕円形	0.98	0.92	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ13	註	楕円形	0.63	0.51	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ14	註	円形	1.02	1.00	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ15	註	円形	0.90	0.82	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ16	註	円形	1.15	1.00	D－1	×	大平Ⅱ	第20図
4	ＳＦ17	註	楕円形	0.54	0.30	D－2	×	大平Ⅱ	第18図
4	ＳＦ19	註	楕円形	0.92	0.80	D－2	×	大平Ⅱ	第18図
4	ＳＦ20	註	円形	0.46	0.35	D－2	×	大平Ⅱ	第18図
4	ＳＦ21	註	円形	0.70	0.52	D－2	×	大平Ⅱ	第18図
4	ＳＦ22	註	円形	0.39	0.32	D－2	×	大平Ⅱ	第18図
4	ＳＦ23	註	円形	0.32	0.26	D－2	×	大平Ⅱ	第18図
4	ＳＦ25	註	円形	0.52	0.46	D－2	×	大平Ⅱ	第18図
4	ＳＦ26	註	円形	0.44	0.36	D－2	×	大平Ⅱ	第18図

註　4区の墓や土坑の検出層位については『大平遺跡Ⅱ』を参照。

あとがき

本書の作成にあたっては多くの方々にご指導、ご教示いただきました。記して感謝申し上げます。
（敬称省略　五十音順）
池谷初恵　市原壽文　片桐英生　加藤芳郎　水上綾子　望月明彦

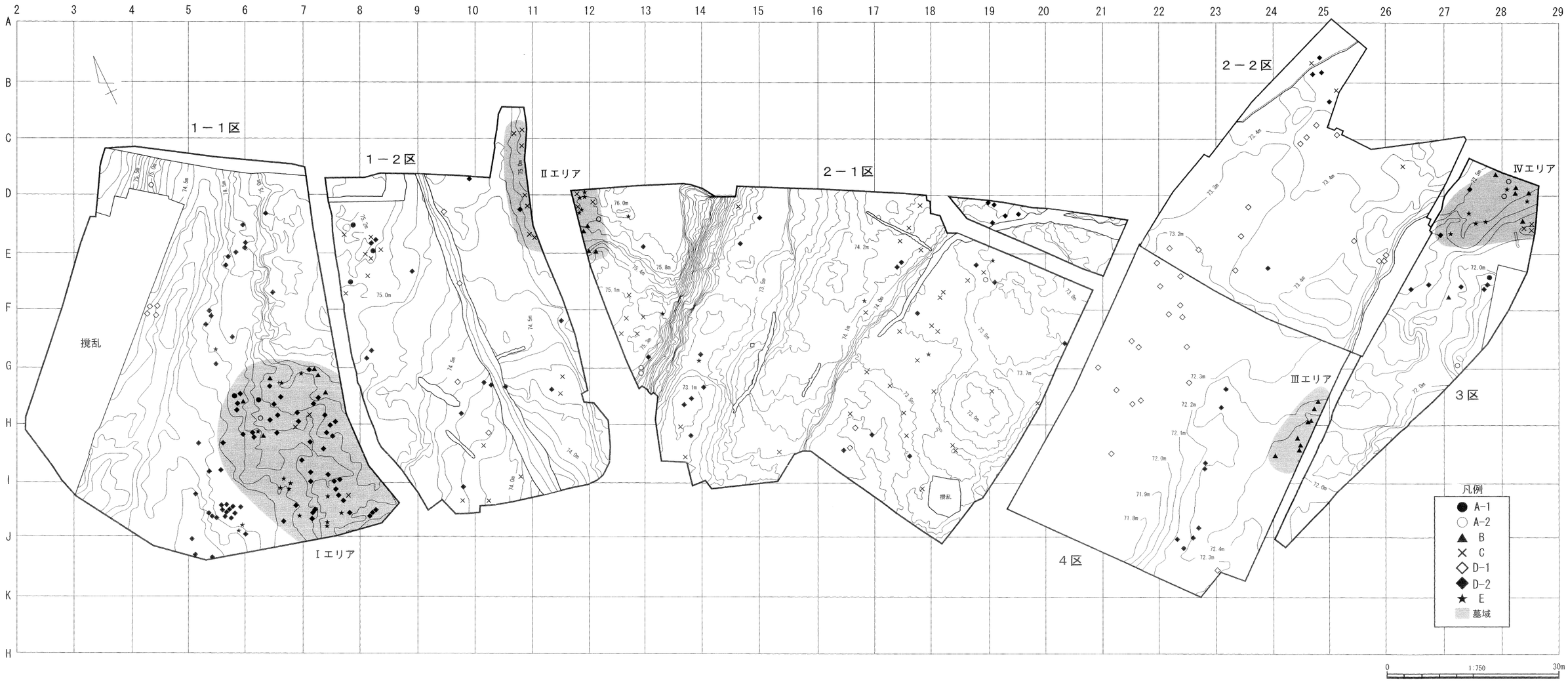
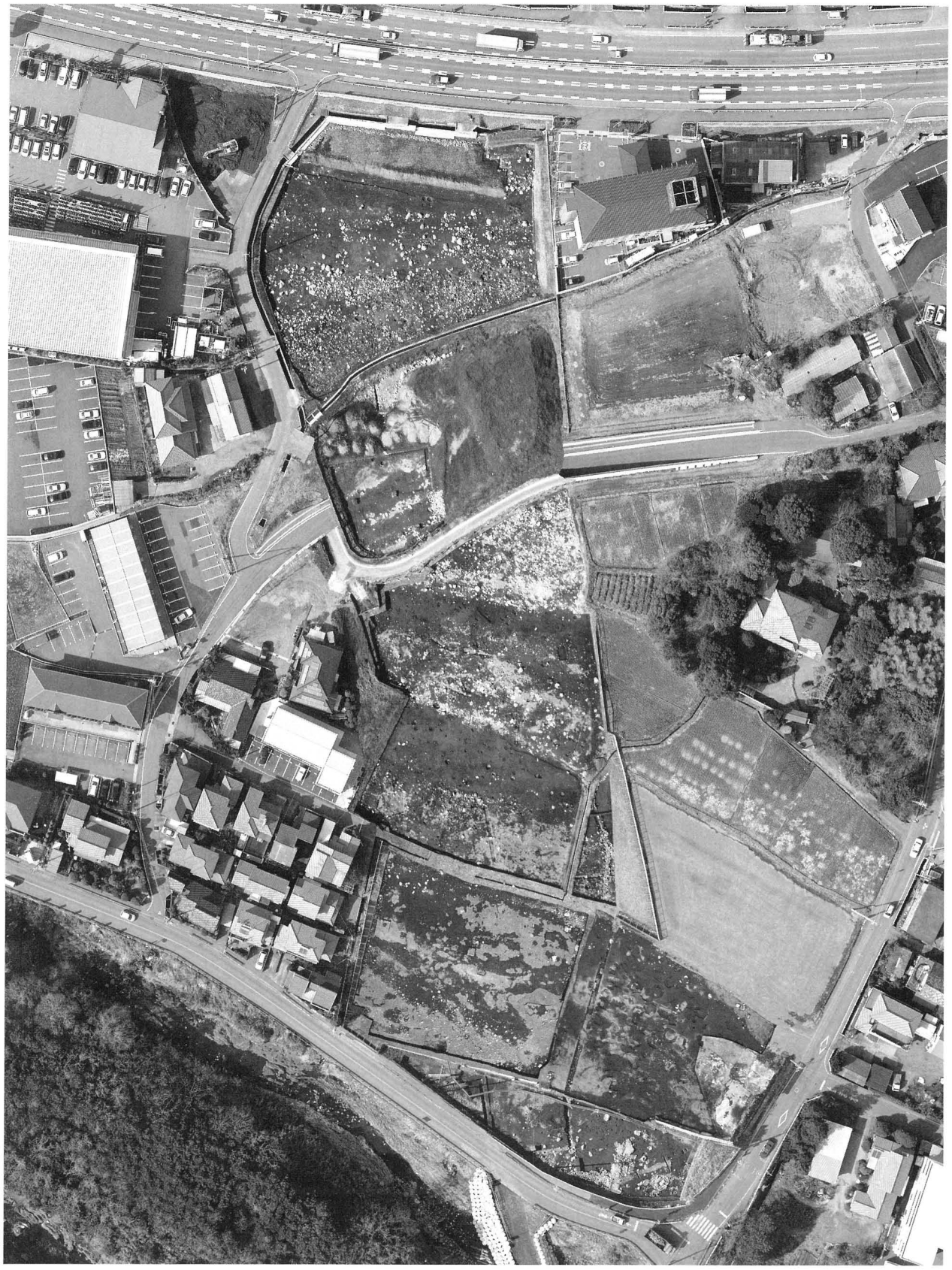


図41　大平遺跡　土坑分布図

写真図版

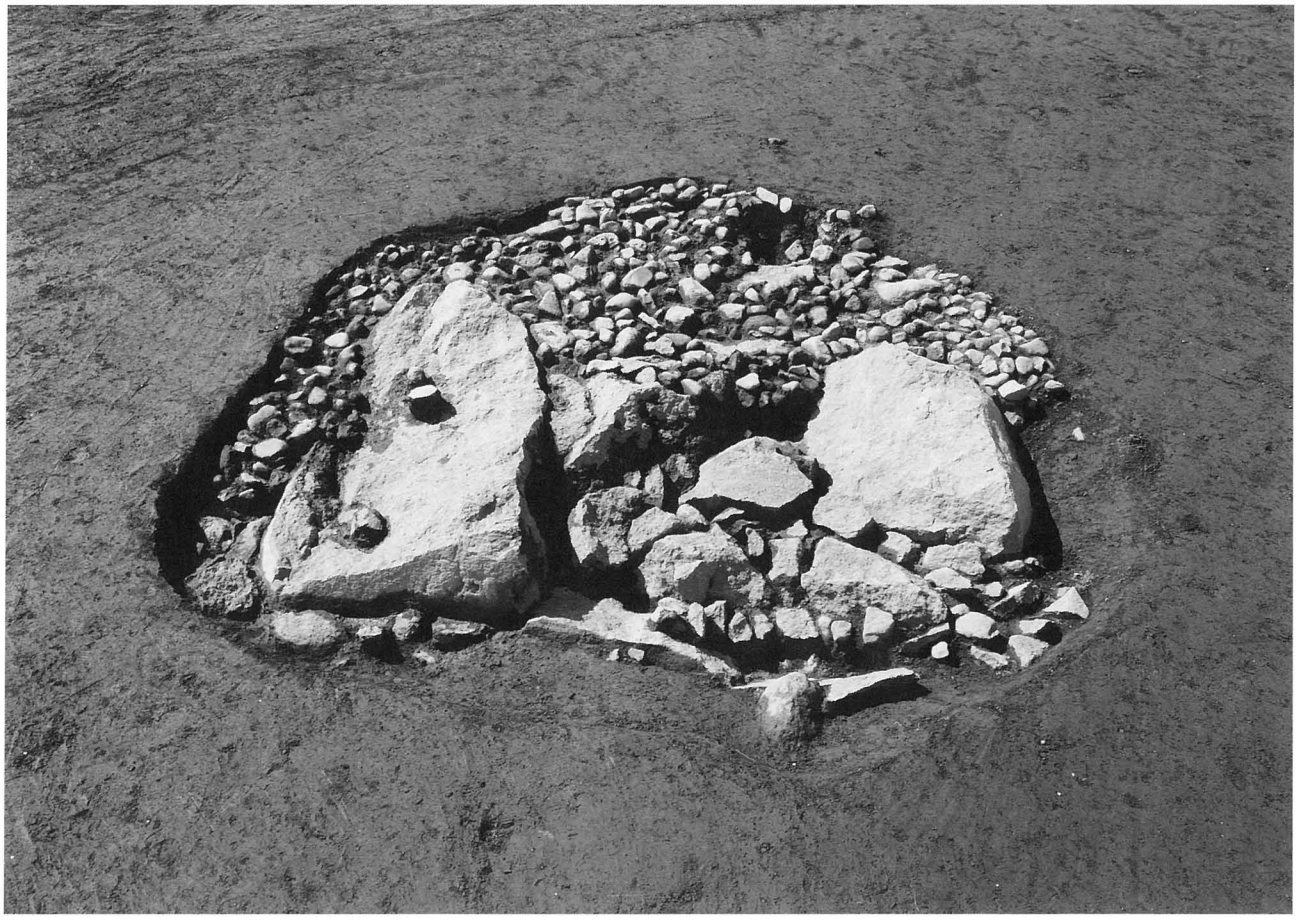
図版 1



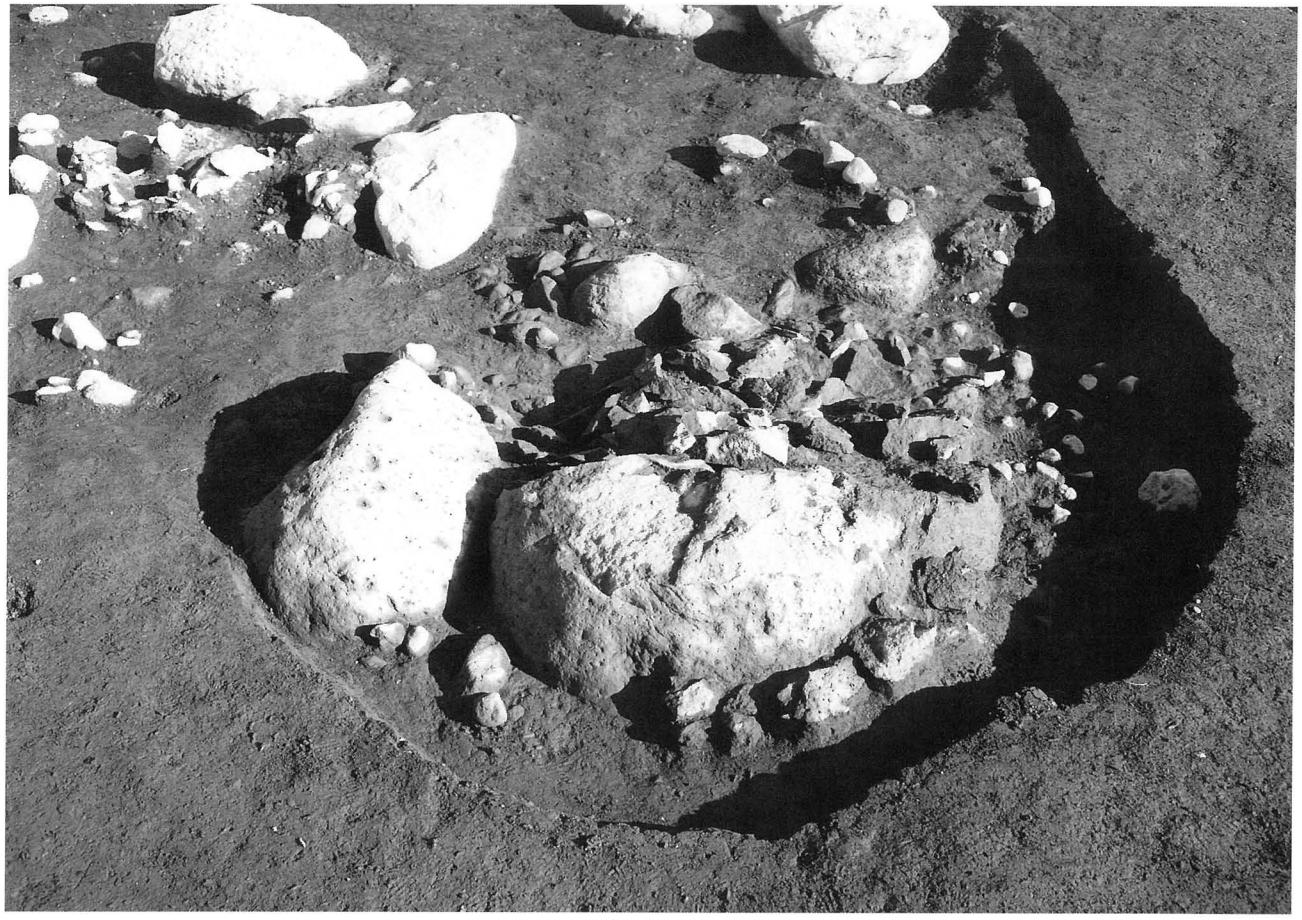
調査区全景（合成写真）

図版 2

1　1－1区　調査区全景（南より）



2　ＳＦ101検出状況（東より）



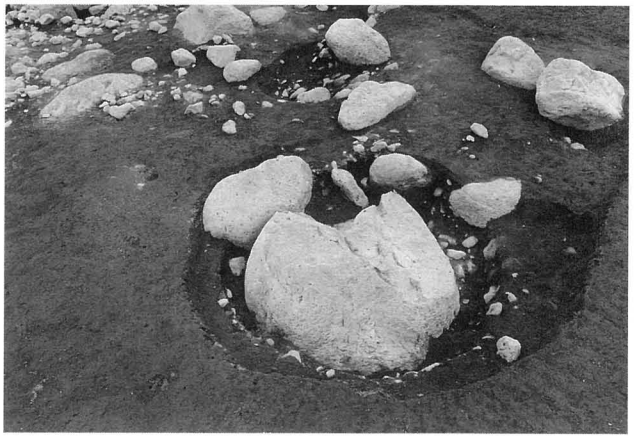
1　ＳＦ105検出状況（北より）

2　ＳＦ104検出状況（北より）

図版４

１　ＳＦ108検出状況（北東より）

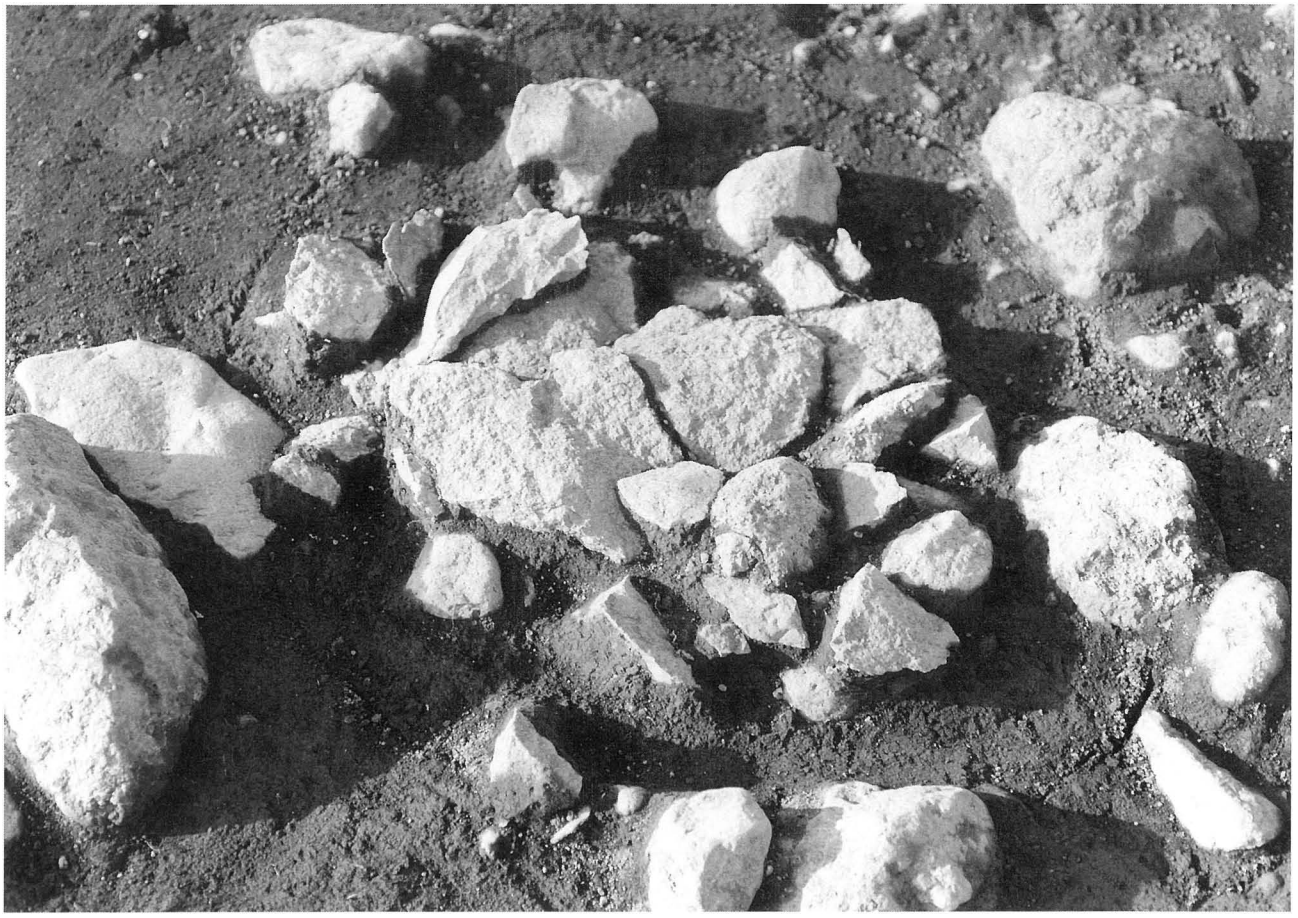
２　ＳＦ106検出状況（北より）



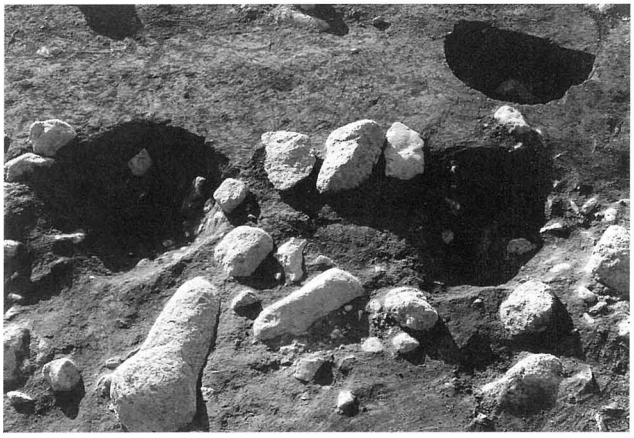
３　ＳＦ105・ＳＦ106完掘状況（西より）

４　ＳＦ114検出状況（西より）

５　ＳＦ222検出状況（南より）



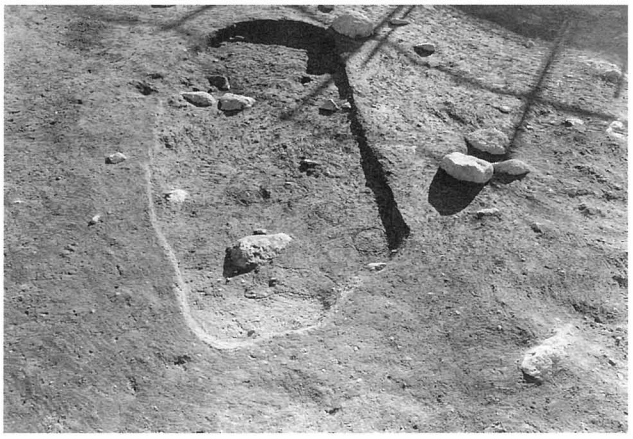
1　ＳＦ223検出状況（南東より）



2　ＳＦ222・ＳＦ223完掘状況（東より）

3　ＳＦ201・ＳＦ202・ＳＦ234・ＳＦ235完掘状況（南東より）

4　ＳＰ212・ＳＰ213完掘状況（東より）



5　ＳＸ204完掘状況（北より）

図版 6

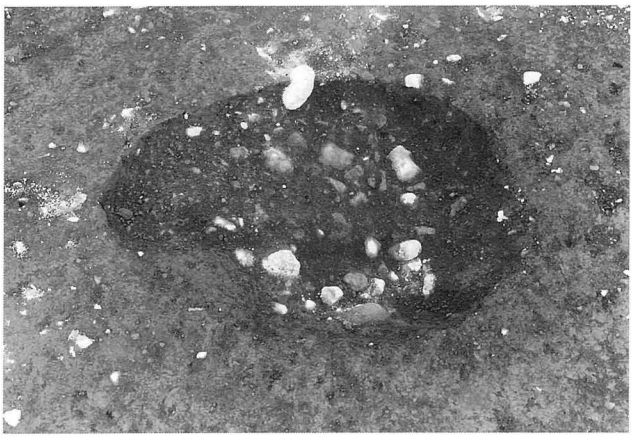
1　2－2区　調査区全景（西より）

2　ＳＦ285完掘状況（南より）

3　ＳＦ289完掘状況（東より）

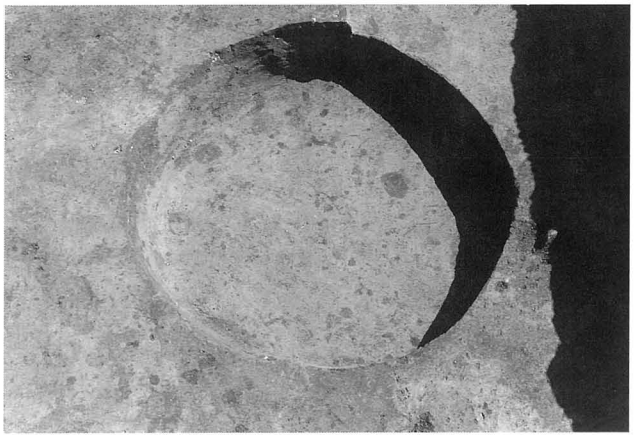
4　ＳＦ292完掘状況（北より）

5　ＳＦ293完掘状況（南西より）



1　ＳＦ284完掘状況（南より）

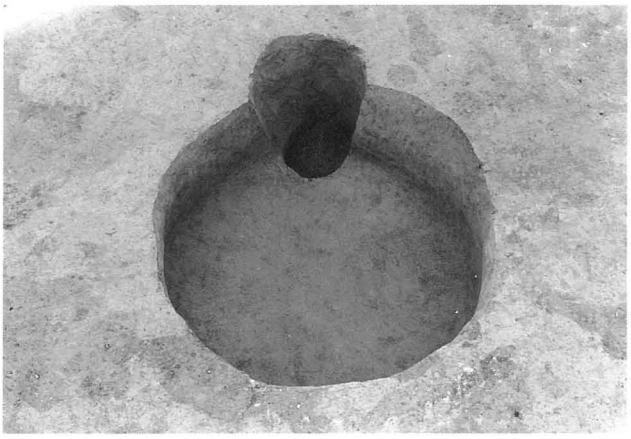
2　ＳＦ298完掘状況（南より）



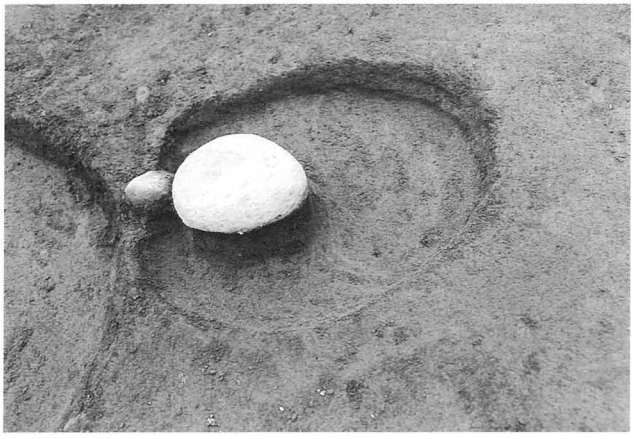
3　ＳＦ299完掘状況（西より）

4　ＳＦ300完掘状況（南西より）

5　ＳＦ301完掘状況（南東より）



6　ＳＦ296・ＳＰ221完掘状況（西より）

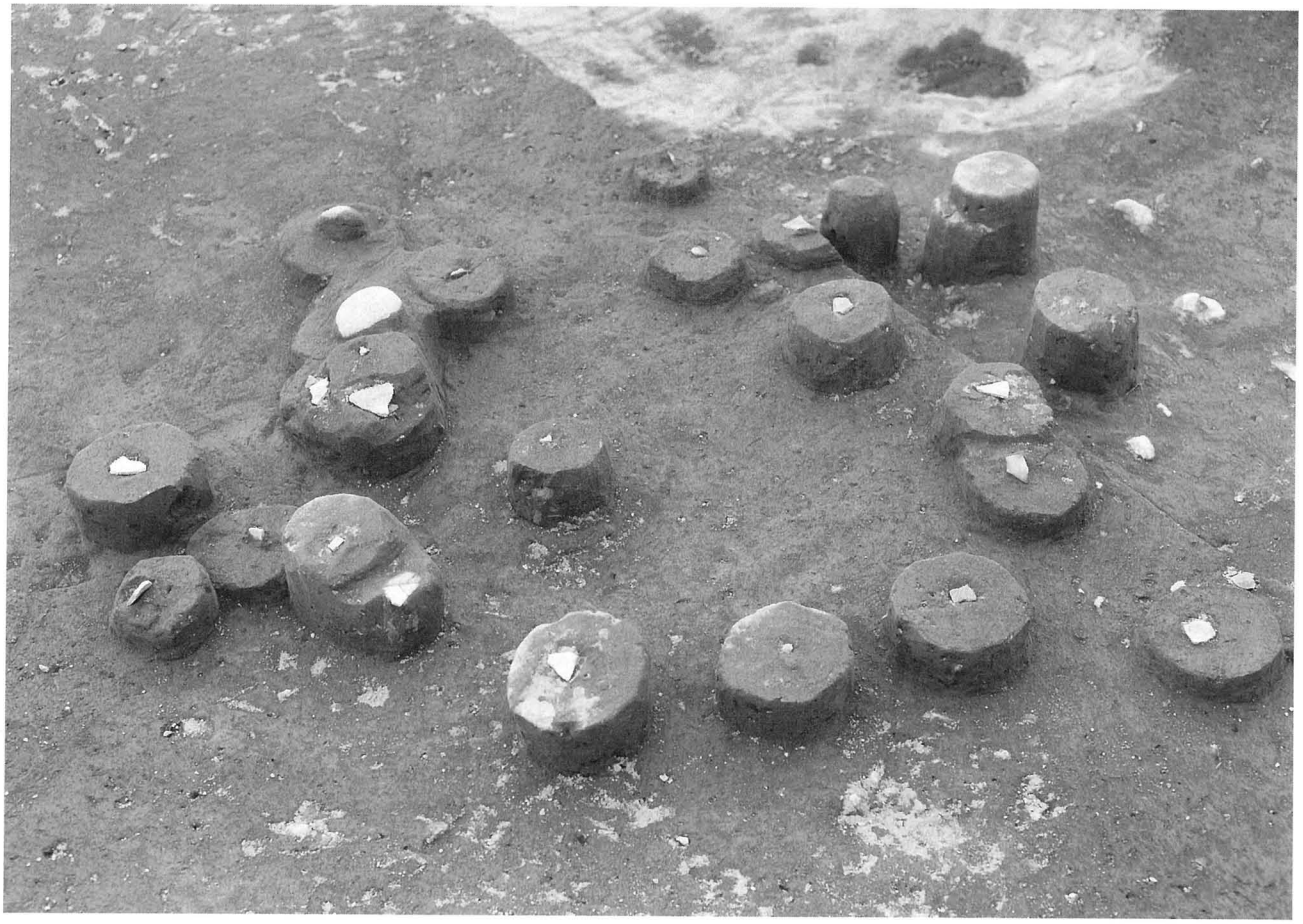


7　ＳＰ217完掘状況（南東より）

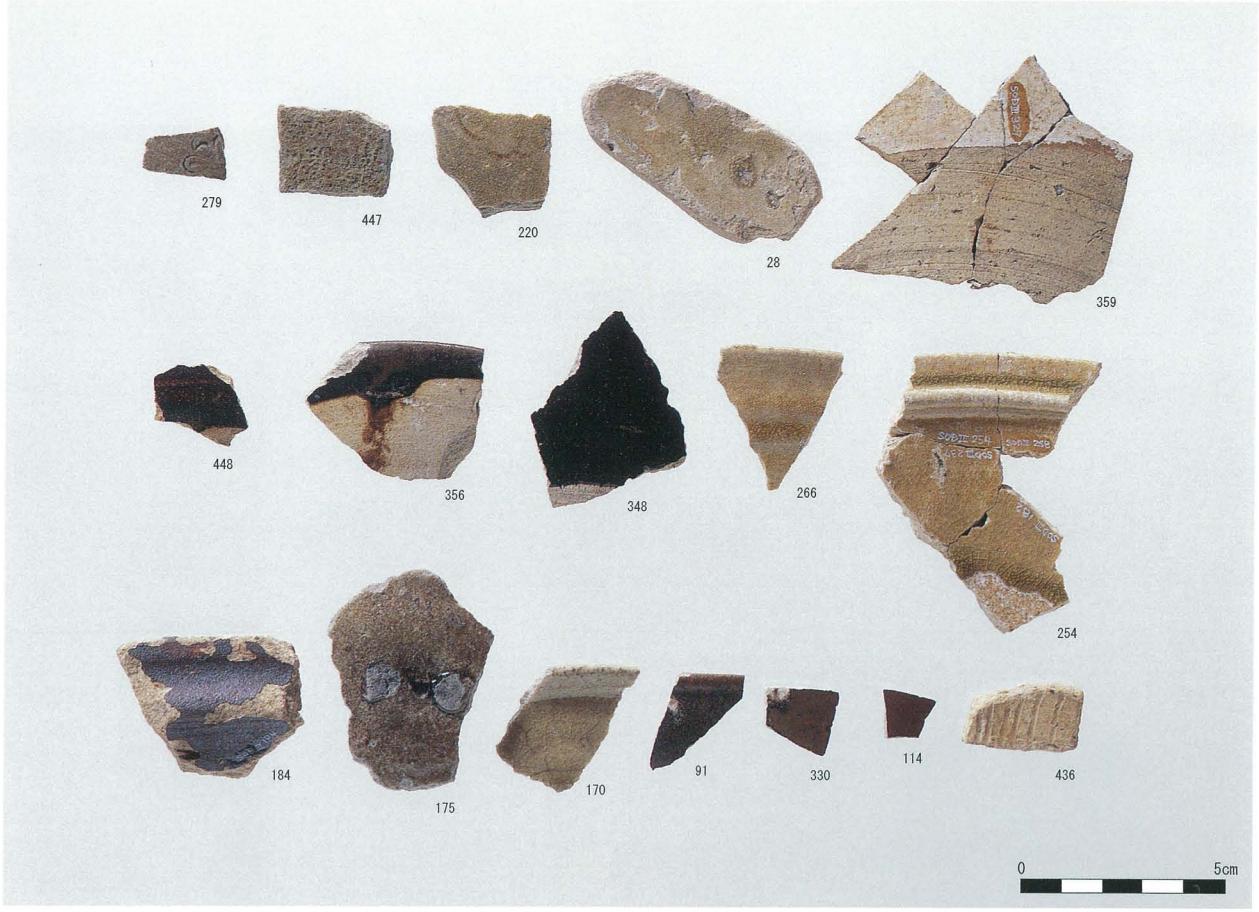
8　ＳＰ222完掘状況（南より）

図版 8

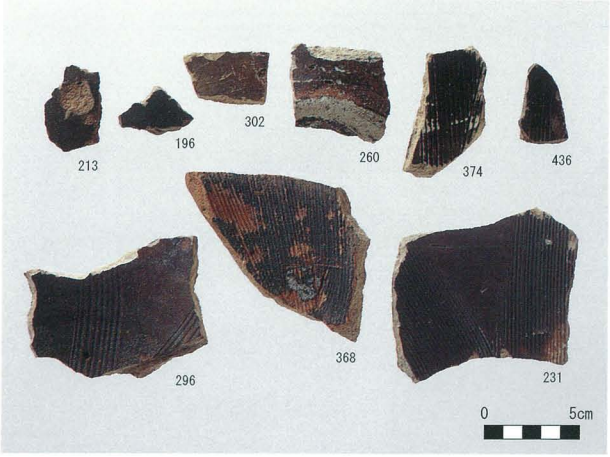
1　弥生土器等　遺物出土状況（1）（東より）



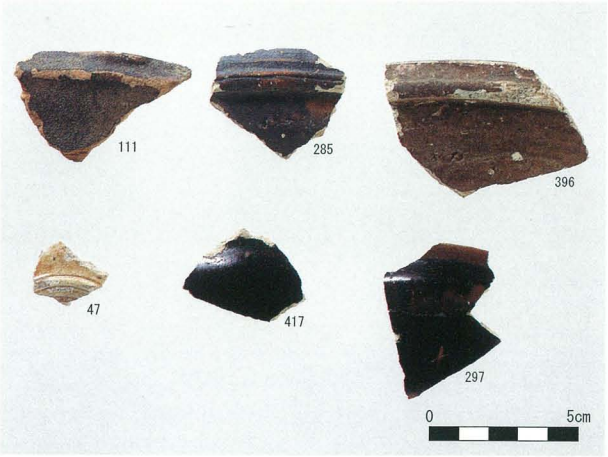
2　弥生土器等　遺物出土状況（2）（北より）



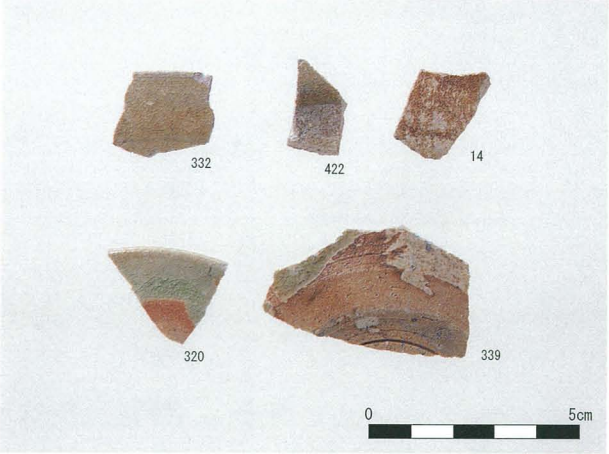
１　１－１区　古瀬戸



２　１－１区　古瀬戸擂鉢



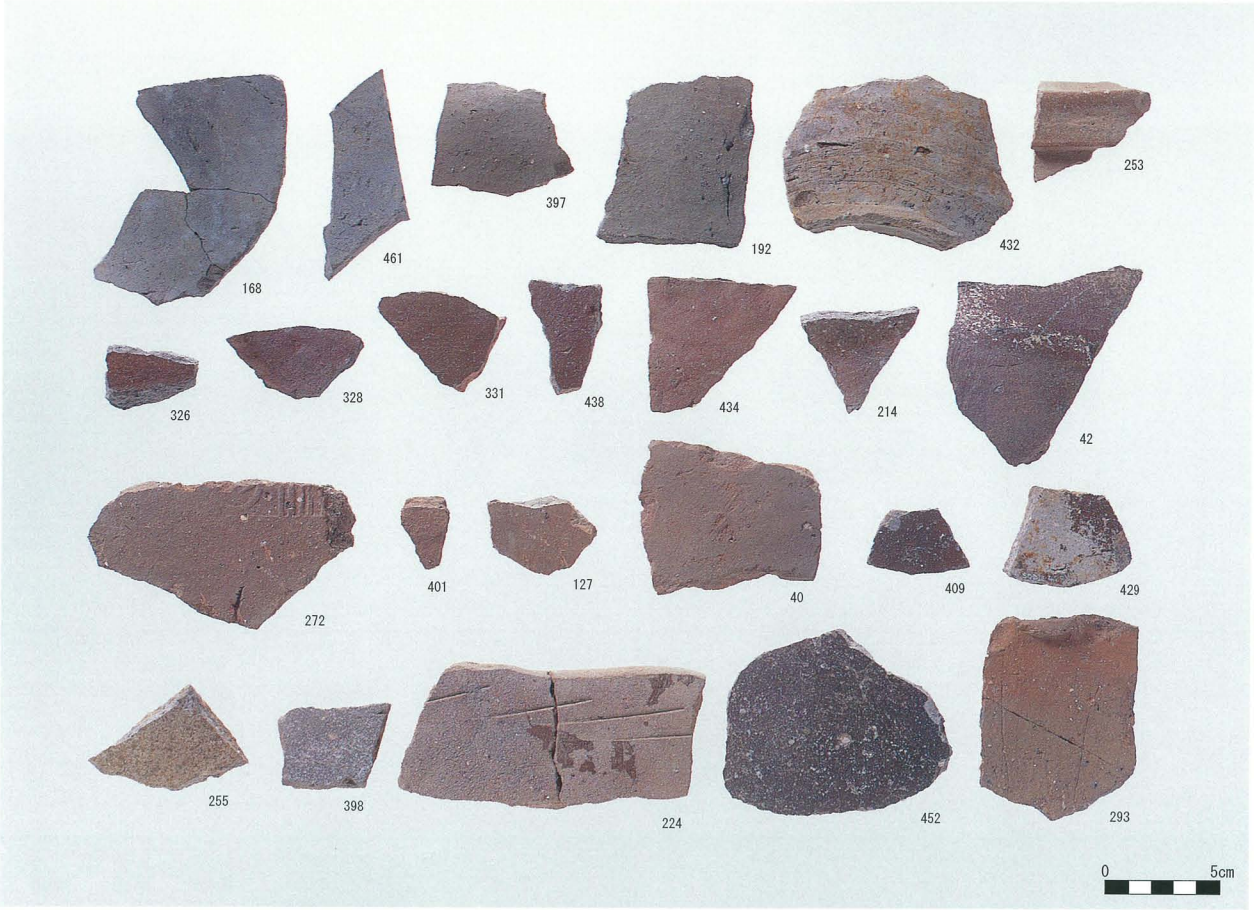
３　１－１区　瀬戸美濃大窯



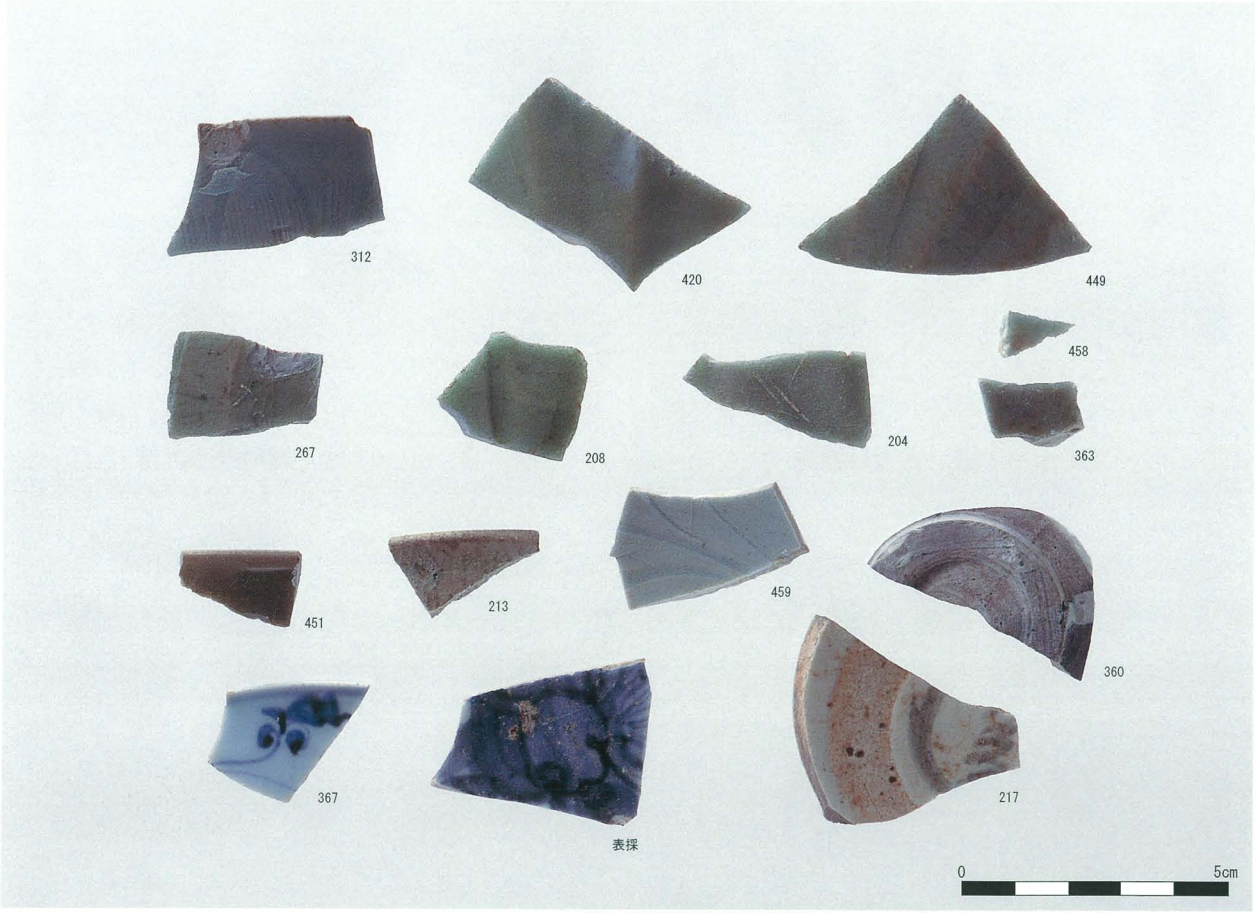
４　１－１区　志戸呂

５　１－１区　羽釜・内耳鍋・瓦質陶器

図版10　1－1区



1　1－1区　常滑



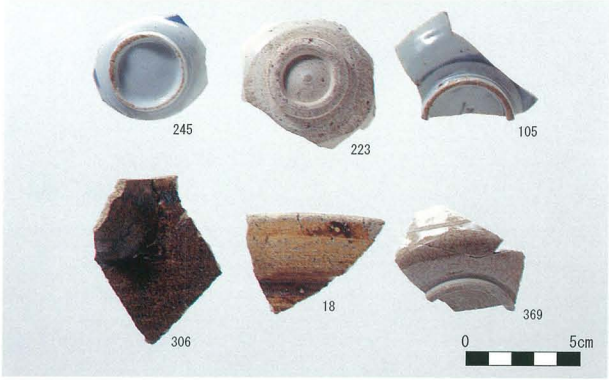
2　1－1区　貿易陶磁器

1　1－1区　古瀬戸縁釉小皿

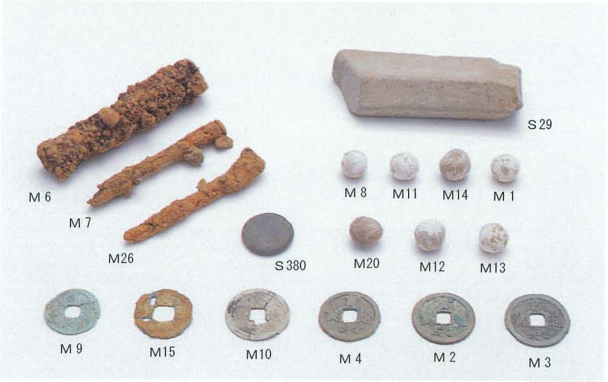
2　1－1区　志戸呂縁釉小皿

3　1－1区　かわらけ

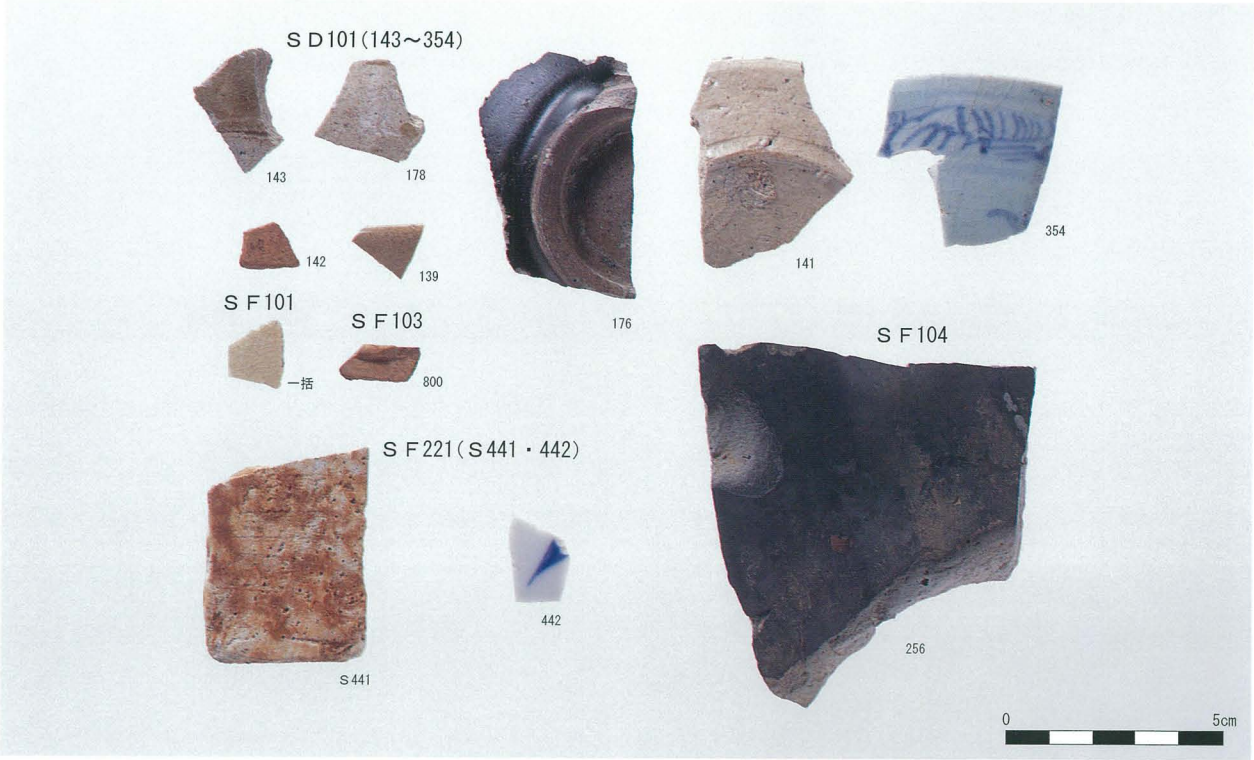
4　1－1区　灯明皿



5　1－1区　近世遺物



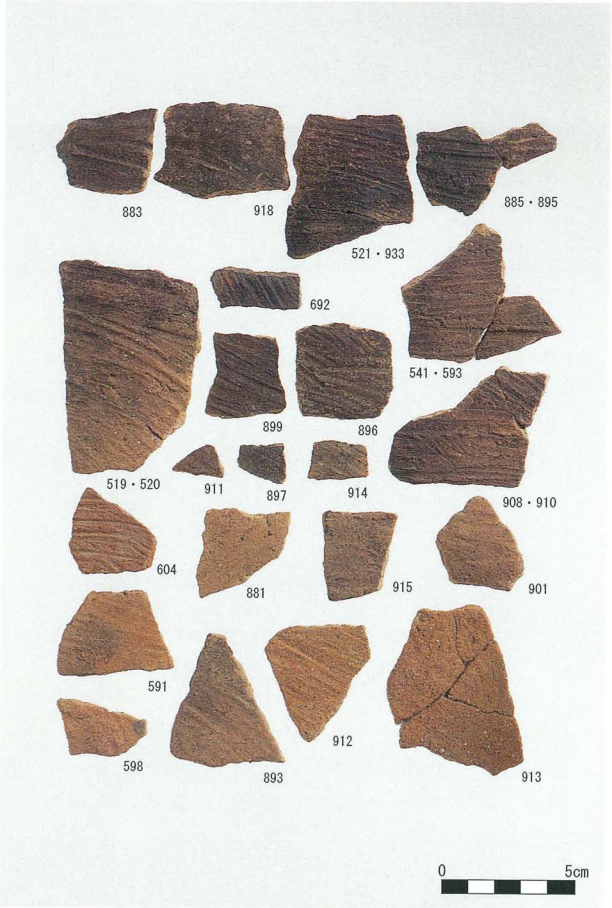
6　1－1区　金属製品・石製品



7　1－1区　遺構出土遺物

図版12　2－2区

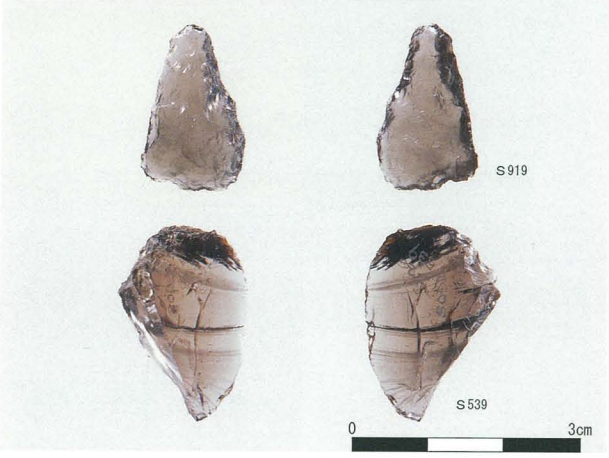
1　2－2区　弥生土器（1）



2　2－2区　弥生土器（2）

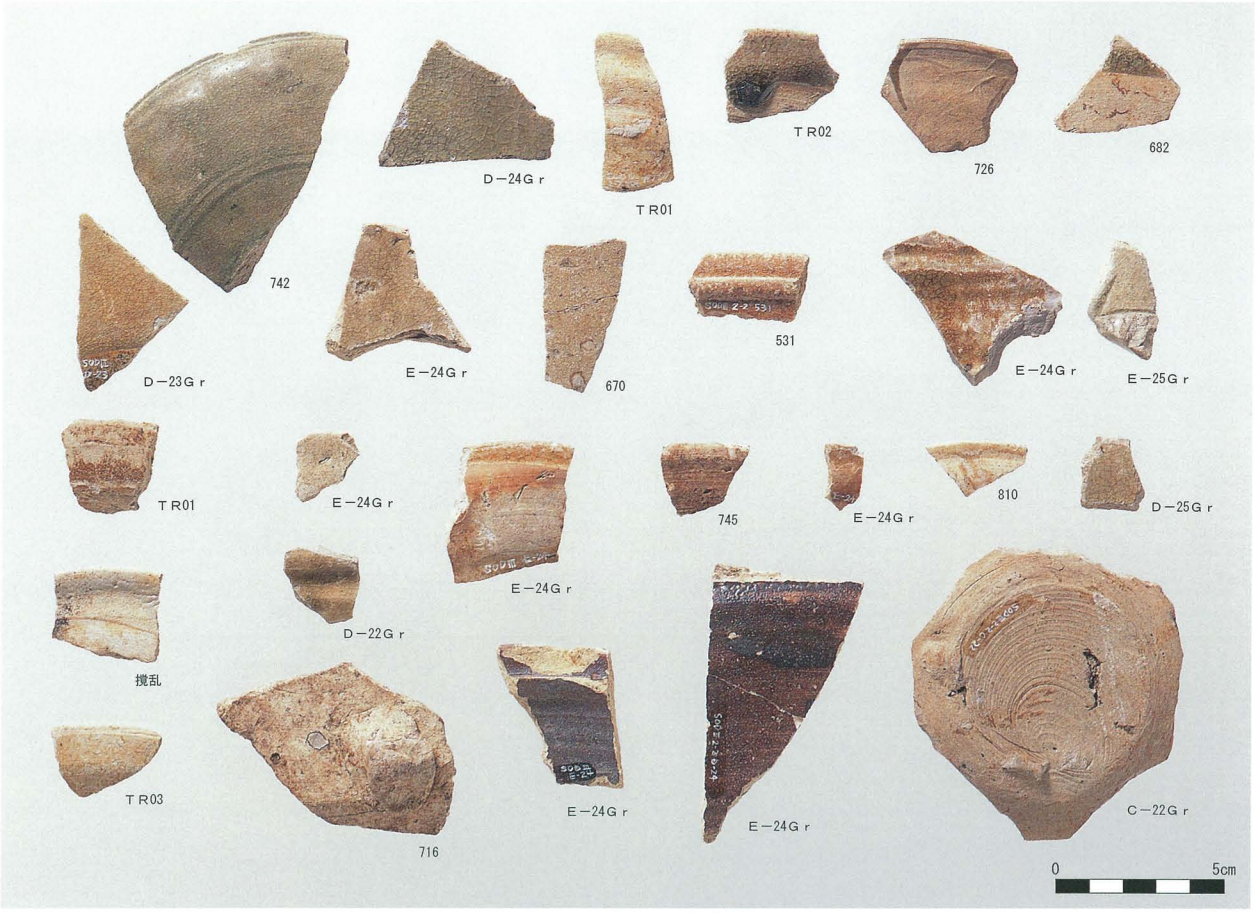
3　2－2区　弥生土器（3）

4　2－2区　礫器



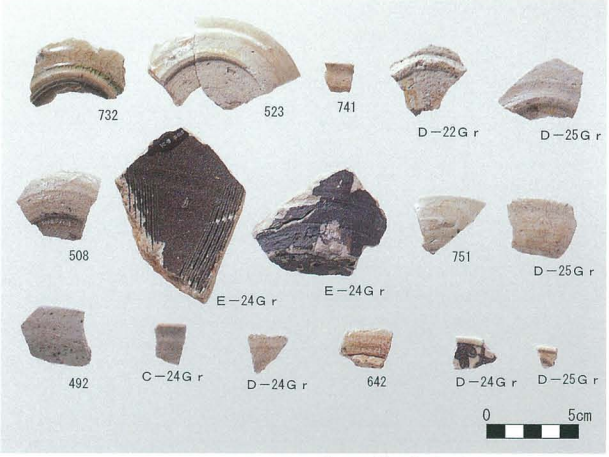
5　2－2区　石鏃・楔形石器

6　2－2区　磨石

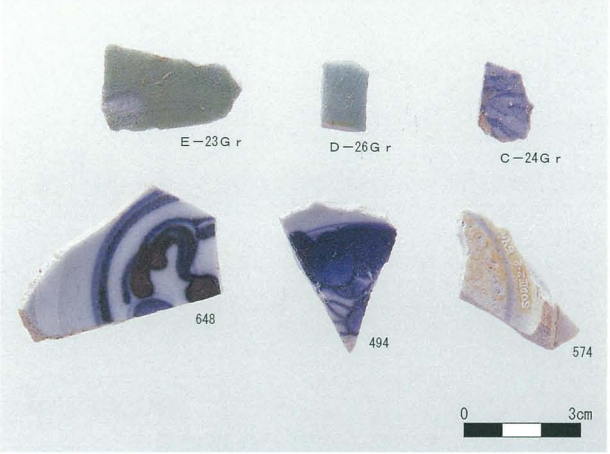


1　2－2区　古瀬戸

2　2－2区　古瀬戸擂鉢

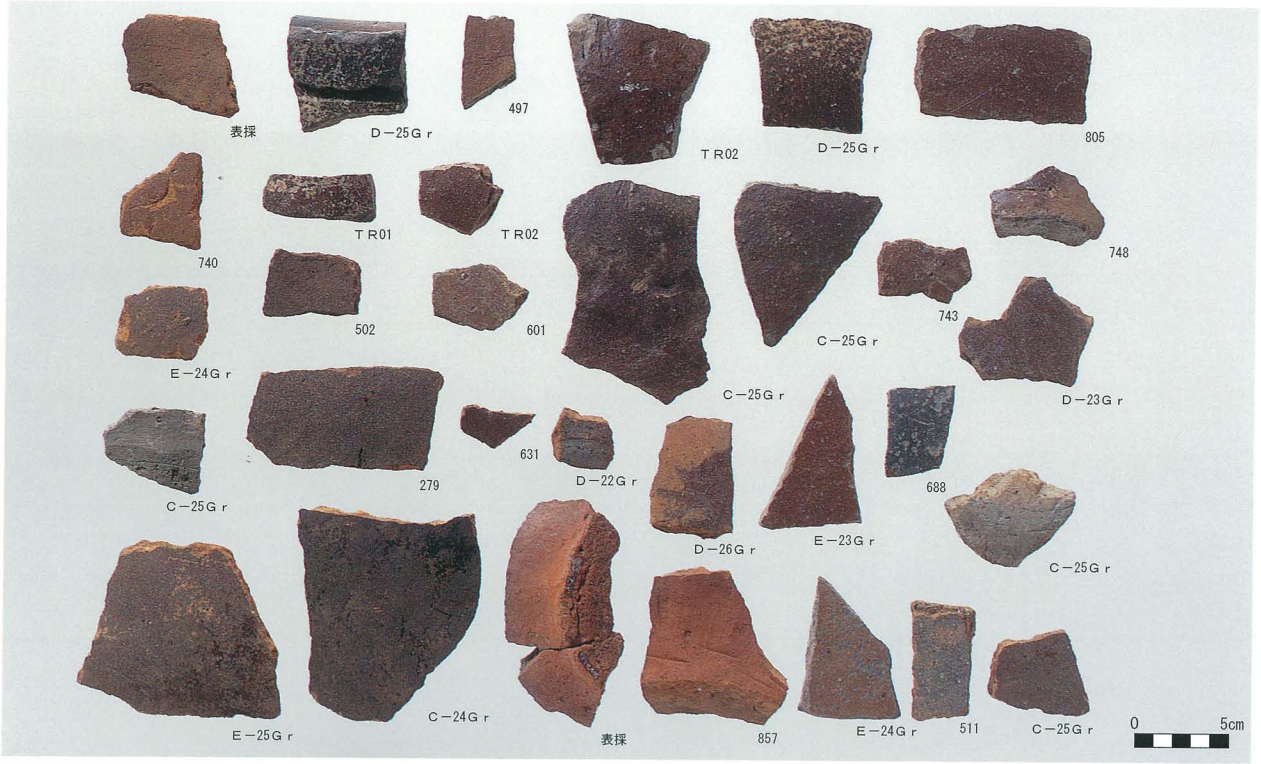


3　2－2区　瀬戸美濃大窯



4　2－2区　貿易陶磁器

5　2－2区　羽釜・内耳鍋・瓦質陶器



1　2－2区　常滑

2　2－2区　かわらけ（1）

3　2－2区　かわらけ（2）

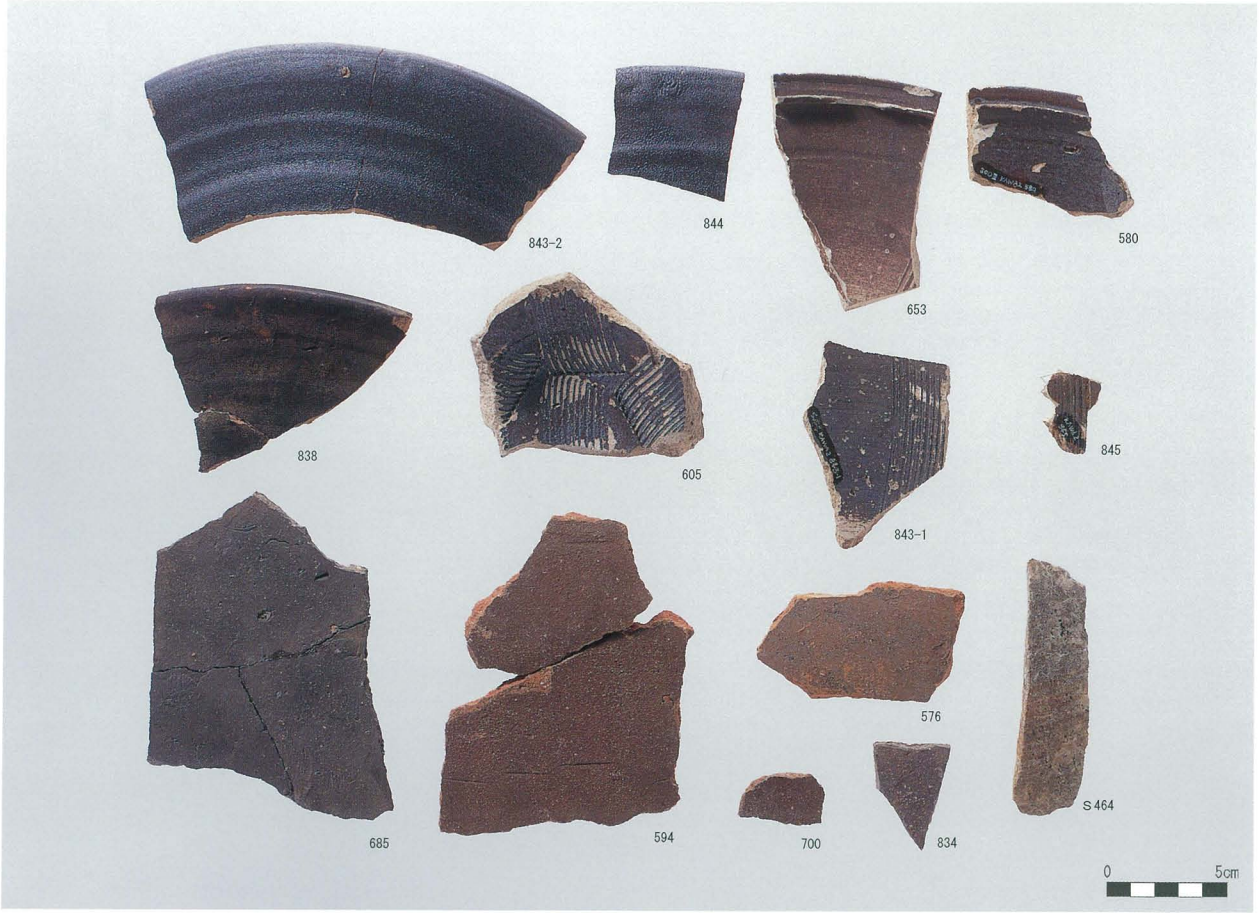
4　2－2区　かわらけ（3）

5　2－2区　かわらけ（4）

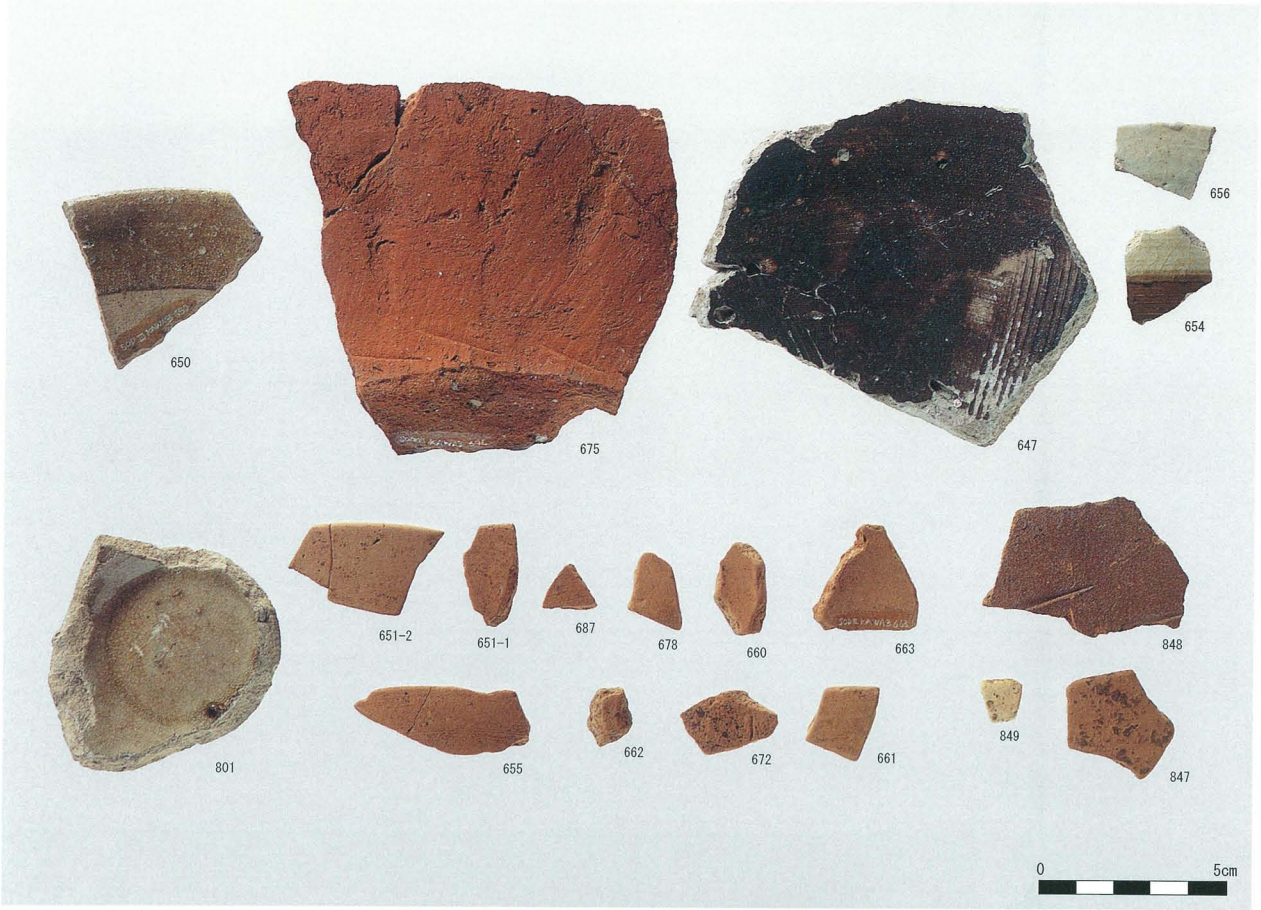
6　2－2区　近世遺物

7　2－2区　金属製品

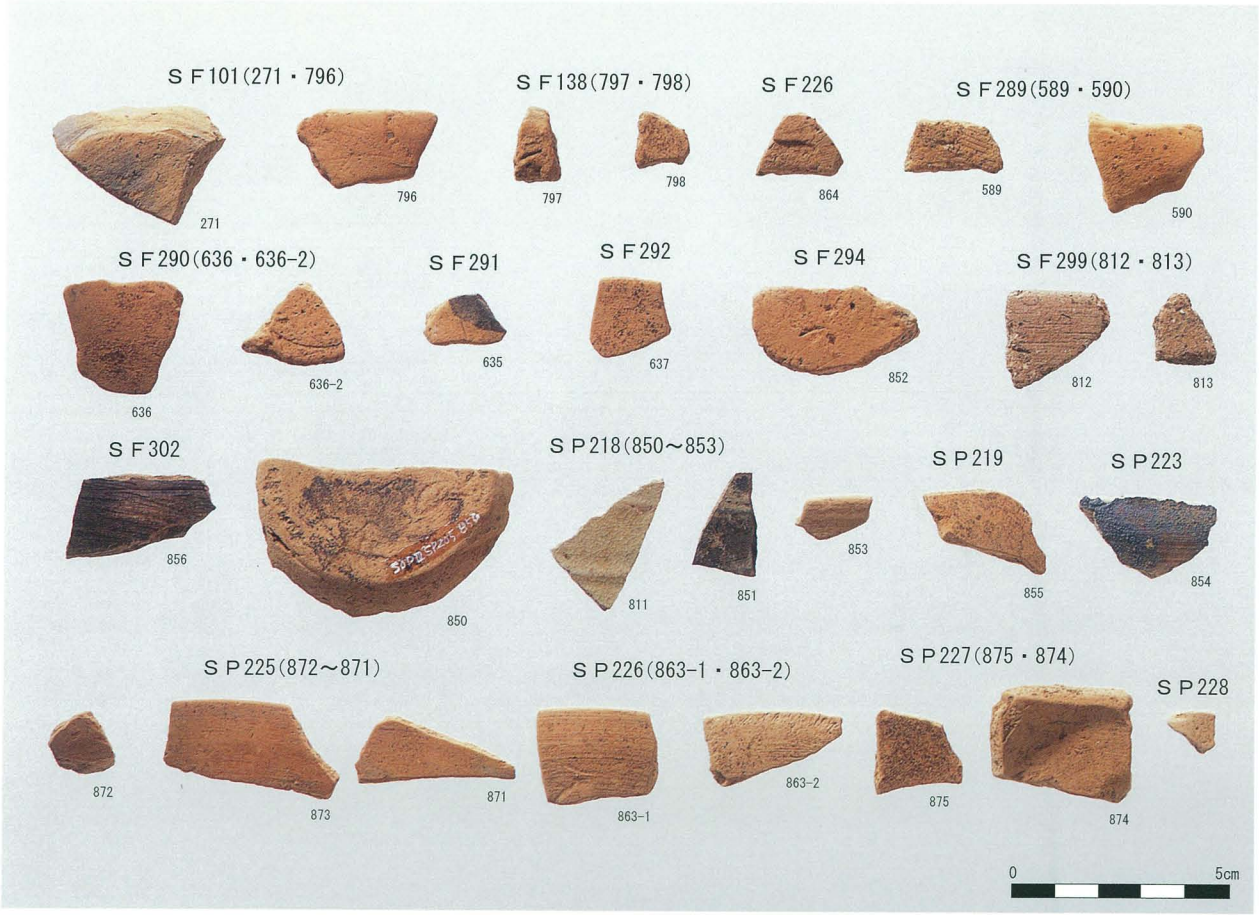
1　２－２区　ＳＲ03出土遺物（１）



2　２－２区　ＳＲ03出土遺物（２）



1　2－2区　SR04・SR05出土遺物



2　2－2区　遺構出土遺物（SF・SP）

報告書抄録

ふりがな	おおだいらいせきさん
書名	大平遺跡Ⅲ
副書名	東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第198集
編著者名	中鉢賢治／日吉高幸／木村忠義
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23番20号　TEL 054－262－4261(代表)
発行年月日	西暦2009年3月27日

所収遺跡名(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大平遺跡(おおだいらいせき)	静岡県(しずおかけん) 駿東郡(すんとうぐん) 長泉町(ながいずみちょう) 南一色(みなみいっしき)	22342		世界測地系 35°8′59.8247″	世界測地系 138°53′46.69853″	2005年9月～2006年5月	1－1区 3,135㎡ 2－2区 1,627㎡	東駿河湾環状道路建設工事に伴う事前調査
				日本測地系 35°8′48″	日本測地系 138°53′58″			

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大平遺跡	散布地	弥生時代	旧河川1基	弥生土器・石器	弥生前期末の条痕文系土器
		中世・近世	旧河川4基	中世陶磁器・かわらけ 近世陶磁器・石製品 銭貨・金属製品	
	墓域	中世・近世	溝状遺構3条 土坑 140基 小穴 33基	中世陶磁器・かわらけ	

要約

大平遺跡は静岡県駿東郡長泉町に所在する遺跡である。過去二回、調査が実施されており、本報告書は第Ⅲ期調査の報告書となる。第Ⅱ期調査において弥生時代前期末の住居及び条痕文系土器が出土しているが、今回の調査においても同様の土器群が出土した。また、過去の調査で中世の集石墓群が検出されているが、今回の調査においても同様の集石墓と推定される土坑群が多数検出された。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第198集

大 平 遺 跡 Ⅲ

平成16・17年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年３月27日

発行所　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒420-8002
静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL（054）262－4261㈹
FAX（054）262－4266
印刷所　松本印刷株式会社
〒421-0303
静岡県榛原郡吉田町片岡2210
TEL（0548）32－0851㈹